

太秦古墳群

一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

本報告書の対象となる寝屋川市打上の地点は、30年ほど前から古墳の存在などが予想はされていたところですが、その実態は具体的なものではありませんでした。ところが、平成12年度の確認調査により、溝とそこからまとまった須恵器の出土があったことから、枚方丘陵西端にひろがる太秦古墳群の一部を構成する古墳に伴うものであるということが確実視されるようになりました。

これまでの太秦古墳群は5・6世紀の古墳が各尾根に点在するという印象をあたえる分布状況でしたが、本調査の結果、古墳は5世紀後半の小形方墳を中心としたグループを形成し、古式群集墳といわれるような密集した群を構成していることが判りました。

小形方墳群は、日本列島の主立った地域で最近になって多く確認されだしているものですが、これは北河内においてはじめてです。古墳時代には遺跡が急増する大きな平野を西に抱える本地域の重要度からすれば至極当然の確認とも言えますが、開発が進んだこの古墳群の状況を考えると、北河内の歴史をひもとく上で極めて貴重な調査成果を呈示していることはまぎれもない事実です。今後、この成果をより一層活用していただきたく、上梓した次第であります。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。

2003年6月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内のうち、寝屋川市打上所在の打上遺跡（太秦古墳群）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所の委託を受け、日本道路公団枚方工事事務所の協力を得、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人 大阪府文化財調査研究センター（現・大阪府文化財センター）が実施した。
3. 調査は平成13年5月16日から同年12月31日まで実施し、財団法人 大阪府文化財調査研究センター 中部調査事務所調査第一係一瀬和夫、井藤暁子、松尾洋次郎が現地調査を担当した。
4. 本書で用いた現場写真は主に松尾があたり、遺物写真については中部調査事務所片山彰一、水取康人があたった。
5. 調査の実施にあたっては関係諸機関をはじめ、以下の方々からご教示ならびに資料提供などを得た。和田晴吾（立命館大学）、塩山則之・濱田延充（寝屋川市教育委員会）、野島 稔・村上 始（四条畷市教育委員会）、大竹弘之（枚方市教育委員会）、西田敏秀（財団法人 枚方市文化財研究調査会）、宇治原靖泰（門真市教育委員会）、河端 智、清水 哲、河村恵理、阿河大介、佐野 円、岩下明正
6. 本書の編集は一瀬、松尾、奥村弥恵が行い、本文の文責については目次に記した。

凡 例

1. 本書に掲載した地形図・遺構実測図、その他の図に付された方位は、全て座標北を示している。
2. 当センターが試掘調査および本書で使用している座標は、国土座標第VI系を基準に設置したものである。また、レベル高は東京湾標準水位のT.P.+の数値を使用した。
3. 本書で使用した土壌色の記述は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖第15版』1995年版を使用した。

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経過と調査方法	(一瀬) 1
第2節 位置と環境	(一瀬) 2
第2章 調査成果	3
第1節 基本層序	(松尾) 3
第2節 調査成果	(松尾) 33
第3章 太秦古墳群の検討	111
第1節 太秦古墳群尾支群について	(松尾) 111
第2節 打上川・讃良川流域の古墳動向と太秦古墳群	(一瀬) 123

挿 図 索 引

第1図 太秦古墳群周囲遺跡・古墳分布図	1
第2図 太秦古墳群古墳分布図	2
第3図 遺構配置図及び南北模式断面図	3
第4図 K1号墳 平面図	4
第5図 K1号墳 前方部遺物出土状況図	5
第6図 K1・K2・K13号墳 周溝断面図	5
第7図 K1号墳 出土遺物	6
第8図 K1・K2・K3号墳 断面図	7・8
第9図 K2・K4号墳 平面図	9・10
第10図 K2号墳 周溝東南部遺物出土状況図	9・10
第11図 K2号墳 周溝西辺遺物出土状況図	11
第12図 K2号墳 出土遺物(1)	11
第13図 K2号墳 出土遺物(2)	12
第14図 K3号墳 周溝北辺遺物出土状況図	14
第15図 K3号墳 平面図	15・16
第16図 K3号墳 主体部	15・16
第17図 K3号墳 周溝南辺遺物出土状況図	17・18
第18図 K3号墳 周溝東辺遺物出土状況図	17・18
第19図 K3号墳 出土遺物(1)	19
第20図 K3号墳 出土遺物(2)	20
第21図 K5・K13号墳 平面図	21・22
第22図 K5号墳 周溝遺物出土状況図	21・22

第23図	K 5・K 6号墳 断面図	23・24
第24図	K 4～K 7・K 9～K 11・K 13号墳 出土遺物	25
第25図	K 6号墳 周溝断面図	26
第26図	K 7号墳 周溝南辺遺物出土状況図	27
第27図	K 8号墳 周溝北側遺物出土状況図	28
第28図	K 6号墳 平面図	29・30
第29図	K 7号墳 平面図	29・30
第30図	K 9・K 11号墳 平面図	31・32
第31図	K 10号墳・K 12号墳 平面図	33・34
第32図	K 10号墳 周溝東部遺物出土状況図	33・34
第33図	K 7・K 8号墳 断面図	35・36
第34図	K 9～K 12号墳 断面図	37・38
第35図	K 8号墳 平面図	39・40
第36図	K 8号墳 周溝断面図	39・40
第37図	K 8号墳 周溝西側遺物出土状況図	39・40
第38図	K 8号墳 出土遺物	41
第39図	調査区全体図	45・46
第40図	太秦古墳群尾支群分布図	47
第41図	杯身・蓋の径高指数	49
第42図	須恵器壺・甕の口径分布	49
第43図	須恵器壺・甕のタタキ具とアテ具	50
第44図	弥生・古墳時代遺跡と古墳	53
第45図	太秦古墳群尾支群古墳変遷図	55
第46図	北河内主要古墳分布図	57

表 索 引

第1表	遺物観察表(1)	42
第2表	遺物観察表(2)	43

写真図版目次

写真図版1	写真1. 太秦古墳群 全景(南西から)
	写真2. 太秦古墳群位置写真
写真図版2	航空写真 垂直(上が北)
写真図版3	写真1. 航空写真 斜め全景(東から)

- 写真2. 航空写真 斜め全景 (南から)
- 写真図版4 写真1. 太秦古墳群尾支群 全景1 (南から)
写真2. 太秦古墳群尾支群 全景2 (北から)
写真3. 太秦古墳群尾支群 全景3 (南から)
- 写真図版5 写真1. K1号墳 検出状況 (北から)
写真2. K1号墳 前方部前面周溝断面 (南から)
写真3. K1号墳 前方部前面西側周溝遺物出土状況 (南から)
- 写真図版6 写真1. K2号墳 検出状況 (南から)
写真2. K2号墳 周溝東辺断面 (南から)
写真3. K2号墳 周溝北辺断面 (西から)
- 写真図版7 写真1. K2号墳 完掘状況 (南から)
写真2. K2号墳 周溝西辺遺物出土状況 (北から)
写真3. K2号墳 周溝南辺遺物出土状況 (南から)
写真4. K2号墳 周溝東辺遺物出土状況 (東から)
- 写真図版8 写真1. K3号墳 検出状況 (東から)
写真2. K3号墳 周溝東辺断面 (南から)
写真3. K3号墳 周溝東辺断面 (西から)
写真4. K3号墳 周溝北辺断面 (東から)
- 写真図版9 写真1. K3号墳 完掘状況 (南から)
写真2. K3号墳 主体部 (東から)
写真3. K3号墳 周溝南辺遺物出土状況1 (西から)
写真4. K3号墳 周溝南辺遺物出土状況2 (南から)
- 写真図版10 写真1. K3号墳 周溝東辺遺物出土状況 (東から)
写真2. K3号墳 周溝南辺遺物出土状況3 (西から)
写真3. K3号墳 周溝東辺遺物出土状況 (北から)
写真4. K3号墳 周溝北辺遺物出土状況 (東から)
- 写真図版11 写真1. K5号墳 完掘状況 (北から)
写真2. K5号墳 周溝東辺断面 (北から)
写真3. K5号墳 周溝南辺断面 (東から)
写真4. K5号墳 周溝南辺遺物出土状況 (南から)
- 写真図版12 写真1. K6号墳 周溝東辺断面 (南から)
写真2. K6号墳 周溝南辺断面 (東から)
写真3. K7号墳 検出状況 (東から)
- 写真図版13 写真1. K8号墳 検出状況 (西から)
写真2. K8号墳 周溝西部断面 (南から)
写真3. K8号墳 周溝北部断面 (東から)
写真4. K8号墳 周溝西遺物出土状況 (西から)
写真5. K8号墳 周溝北遺物出土状況 (北から)

- 写真図版14 写真1. K 9号墳 検出状況（南から）
写真2. K 9号墳 周溝南辺断面（東から）
写真3. K 9号墳 周溝西辺断面（南から）
- 写真図版15 写真1. K10号墳 検出状況（東から）
写真2. K10号墳 完掘状況（南東から）
写真3. K10号墳 周溝北辺断面（東から）
- 写真図版16 写真1. K11号墳 検出状況（南から）
写真2. K11号墳 周溝南辺断面（西から）
写真3. K13号墳 周溝西辺断面（南から）
- 写真図版17 K 1・K 2号墳 出土遺物
- 写真図版18 K 3号墳 出土遺物
- 写真図版19 K 3・K 5・K 8・K10・K11号墳 出土遺物

第1章 調査に至る経過と調査方法

第1節 調査に至る経過と調査方法 (第1・2・40図)

大阪府寝屋川市に所在する打上遺跡（太秦古墳群）の本調査区は、昭和57年の分布図に弥生時代遺跡の太秦遺跡、東接して古墳時代遺跡の殿山古墳として図示されていた（第2図3Y・2K）。

その後、一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う用地となり、大阪府教育委員会の指導によって打上遺跡として、平成12年度に、本センターが本用地内の確認調査を実施することになった。その際の調査において、古墳時代に属する土器の出土とそれを含む溝の検出があり、古墳の存在が想定されるに至った。これにより、それが広がる範囲を大阪北道路建設に先立って当該文化財保存の資料を得るため、大阪府教育委員会が本格的な発掘調査を必要とする部分と判断した。そして、太秦遺跡・太秦古墳群の範囲を南東側に広げることになった。そして、本センターが翌平成13年度に全面的な発掘調査を実施し、古墳が群をなして検出したことを受けて、字名をとり「尾支群」と呼称することとなった。その際の調査が本報告掲載分にあたる。なお、本調査区西側でも後に実施した平成14年度の確認調査で古墳の周溝を検出しており、西側、南側の尾根にも尾支群の古墳分布が拡がることが判明している。

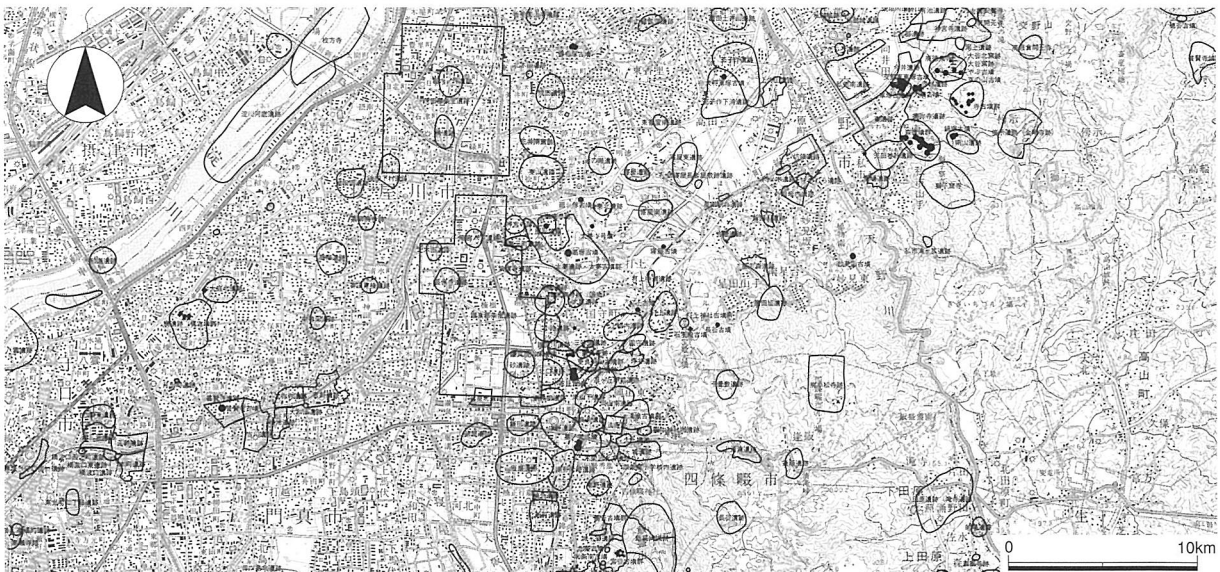
調査にあたっては、大阪府教育委員会から指示のあった範囲の表層及び攪乱部分を機械掘削し、遺物包含層及び遺構部分を人力で掘削した。検出した遺構は随時、写真撮影、図化実測し、全体は航空撮影による測量図化を行った。

＜参考文献＞

大阪府教育委員会1977 『大阪府文化財分布図』

(財)大阪府文化財調査研究センター2002 『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区 一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』第77集

(財)大阪府文化財センター2003 『門真西地区、讚良郡条里遺跡西地区、讚良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区 一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』第90集



第1図 太秦古墳群周囲遺跡・古墳分布図 (1/50,000地形図を縮小して改変)

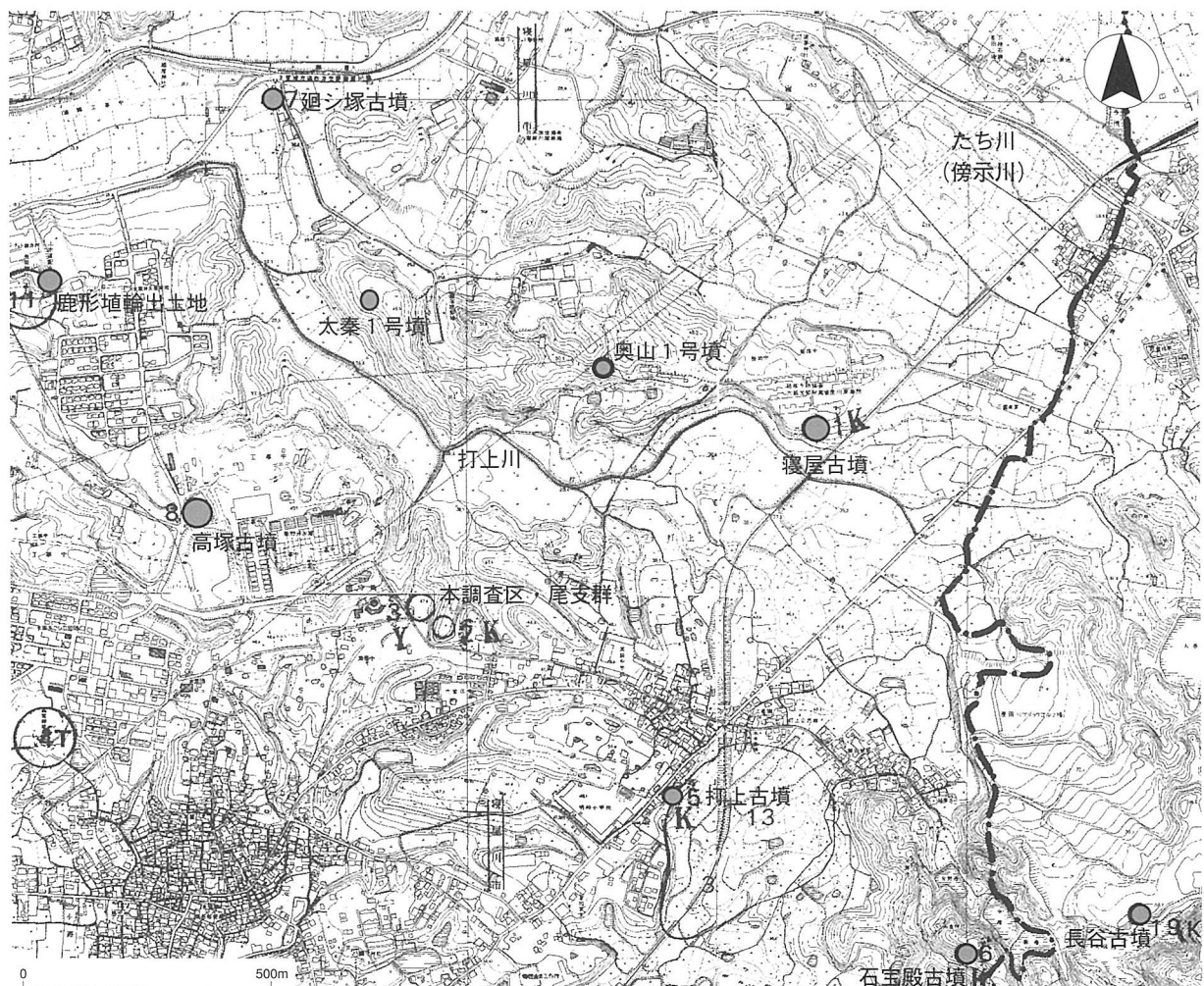
第2節 位置と環境 (第1・2・44・46図、写真図版)

太秦古墳群の所在する北河内北半は、河内平野北東側にある枚方丘陵から西方の平野部に流れ込む船橋川、穂谷川、天野川、たち川（傍示川）、打上川、讃良川、岡部川、清滝川といった河川がある。このうち、前三者は淀川に直接流れ込み、後者は南流する寝屋川に流れ込む。本地域は、丘陵・台地地帯では旧石器時代から、平野部では縄文時代からその足取りを追うことができる。太秦古墳群は河内平野側の打上川と讃良川にはさまれた丘陵上にある。ここでは主要な古墳のみを紹介する。

まず、4世紀初めの出現期には、天野川上流域にバチ形の前方形をもつ前方後円墳、交野市森1号墳がある。同じ下流域には同形態の枚方市禁野車塚古墳、鏡を出土する万年山古墳があり、いずれも全長100mをこえ、この流域が本地域において優勢であったことを示す。やや下って、4世紀前半には讃良川流域の全長90mの前方後円墳、四条畷市忍岡古墳がある。

5世紀には、天野川上流域では引き続き、前方後円墳の交野市東車塚古墳がある。そして、穂谷川下流の全長110mの前方後円墳、枚方市牧野車塚古墳が際立つ。しかし、前半中にこうした大規模な古墳の築造は終息する。その後半から6世紀前半までは、四条畷市更良岡山古墳群、守口市棍古墳群など河内平野及び縁辺部での古墳が目立ち始める。この時期は、おそらく太秦古墳群の最盛期とも重なる。

6世紀後半以降は、終末期古墳の横口式石槨をもつ寝屋川市石宝殿古墳をはじめとして、寝屋川市打上、四条畷市清滝といったたち川から清滝川の間、打上川を中心とした上流域に集中する傾向がある。



第2図 太秦古墳群古墳分布図

第2章 調査成果

第1節 基本層序 (第3図)

調査区の位置する太秦丘陵は、その地質的成因が大きくは大阪層群を不整合に被う高位段丘堆積物にあたる。調査前の現況において南から北に向かい緩やかに高まりを見せる地形で、一帯は竹林で覆われていた。平成12年度確認調査の成果も踏まえ、調査地の堆積状況及びその成因を以下にまとめた。

耕作・整地土<上面：第Ⅰ面（現代以降）>

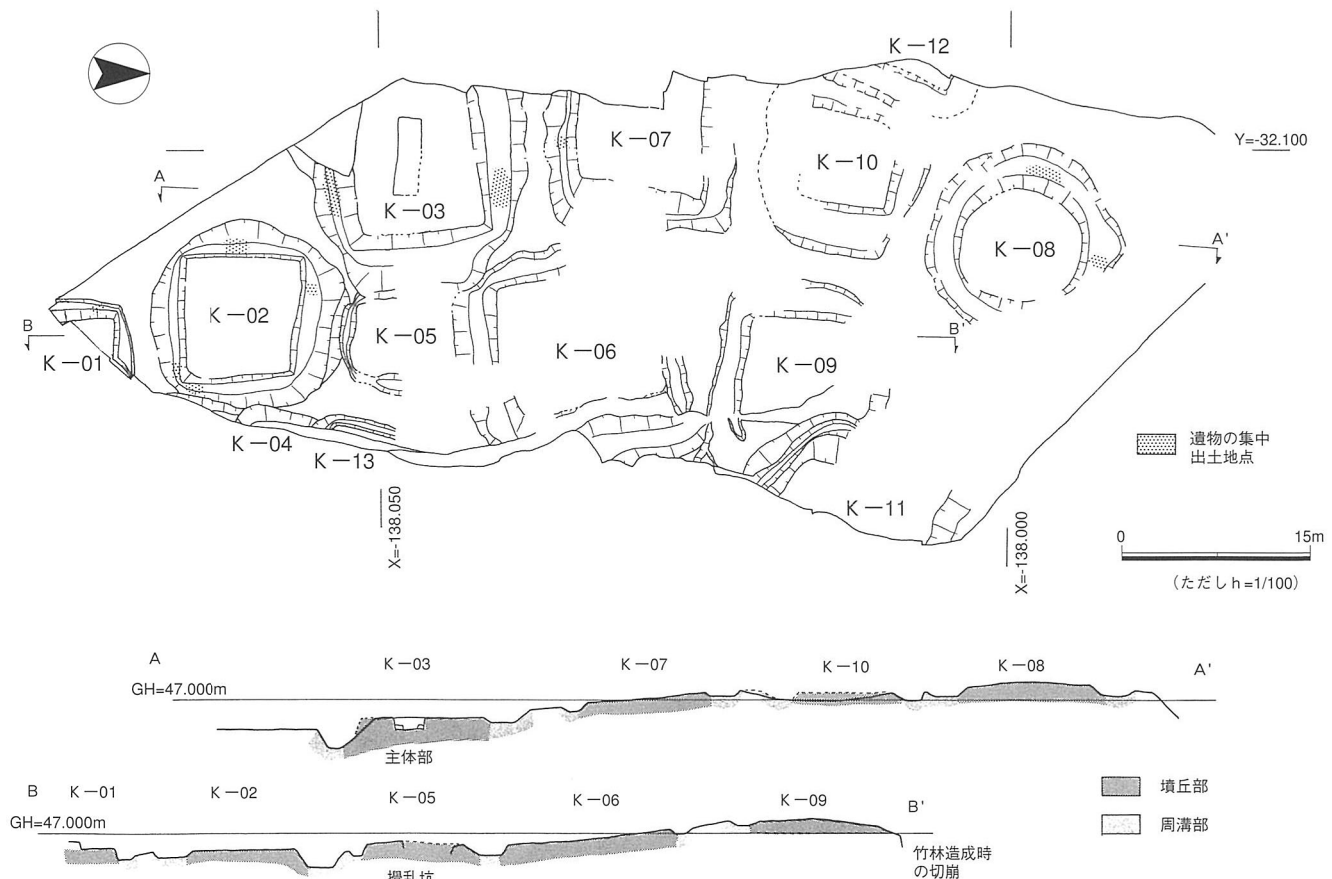
調査区のほぼ全域で確認できる層厚0.2mほどの黒褐色系の砂礫混じり土である。一帯は1965年（昭和40年）前後を中心に碎石などを盛って整地されており、その盛土内には鉄クズなどのガラも含んでいた。整地の過程あるいはその前に現代の建物や産業廃棄物施設のために巨大な坑を設けており、その掘り込みが地山まで及んでいる。

旧耕作・整地土<上面：第Ⅱ面（現代以前）>

層厚0.2m前後の黄灰～灰黄色系の細砂を含むシルトである。周辺からの客土を盛って整地し、耕作地として利用されていたと推測する。いつ頃からかを特定できる遺物はほとんど確認できなかった。

地山<上面：第Ⅲ面（古墳時代中期～後期中心）>

高位段丘堆積面にあたる黄褐色系の細砂を含むシルトである。明褐色土（赤色風化殻）が斑点状に混じる。太秦古墳群尾支群はこの層をベースとして周溝を掘り込み、その掘削土をもって墳丘が構築されている。周溝は墳丘盛土の崩落土によって、埋積していた。



第3図 遺構配置図及び南北模式断面図

第2節 調査成果

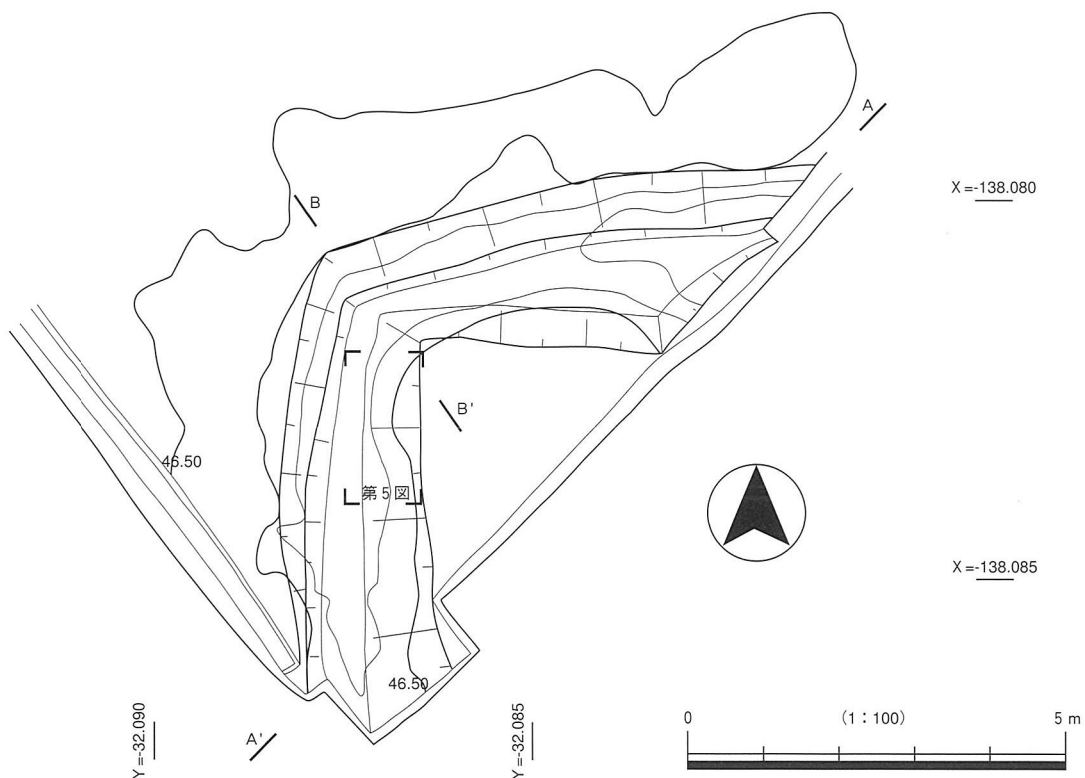
調査の結果、西南から北に向かってのびる細長い支丘陵上で計13基の古墳を検出した。

丘陵面は、現代の開発により大きく削平・攪乱を受け、墳丘盛土を残していない状態であった。その削平状況は丘陵が高まる北方に向け大きくなっている。また、支丘陵の東南部一帯は、竹林の造成により下りの急傾斜が形成されており、一部の古墳はこれにより壊されている。一方で、周溝の掘削状況からは古墳が地形の起伏を利用して造られていたことがわかる。この支丘陵部の古墳群は、北方の太秦古墳群に谷を挟んで隣接することから、旧土地台帳の小字名「尾（オー）」にちなんで太秦古墳群尾支群としてまとめた。古墳は第二京阪道路予定地内の調査で検出した意味から京阪のローマ字頭文字をとりK○号墳と呼称した（文中では特に断わりがない限り「K」を略した）。

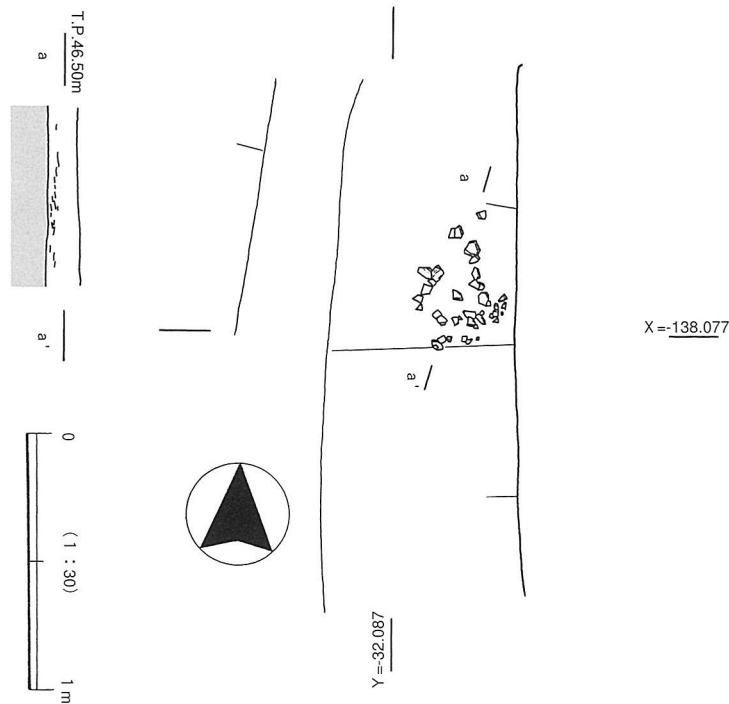
以下、南側に位置する古墳から北へ順に報告する。

1. K1号墳（第4～8図、写真図版5・17）

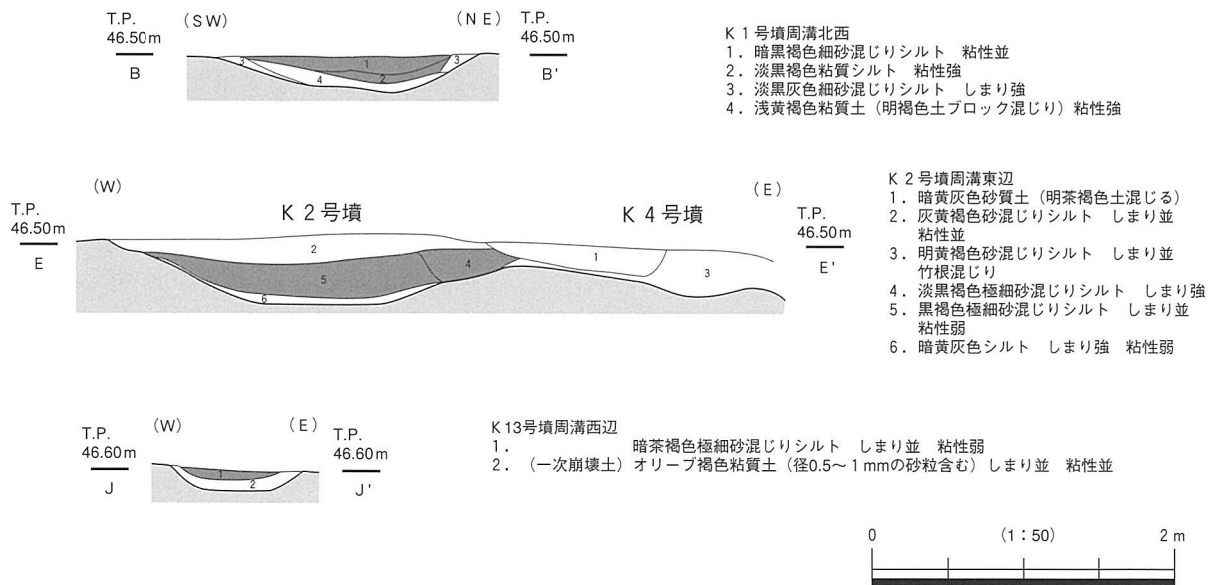
調査区の南端で検出し、墳丘部の地山面はT.P.46.5m前後を測る。墳形は前方後円形を呈し、検出したのは後円部につづく北側くびれ部から前方部北側面と前面の一部分である。検出部分から推測して全長約11m、後円部は径8m強となろう。検出した前方部墳丘面は南北方向の耕作痕などで荒らされており、盛土はそれらに削平されたのか全く残存していなかった。後円部にあたる部分は調査区外の南方に広がっていくのであろうが、その部分は現在竹林の造成により東南に向かって下る急な傾斜面地となっており、後円部はその造成時に消滅したのであろう。



第4図 K1号墳 平面図



第5図 K1号墳 前方部遺物出土状況図

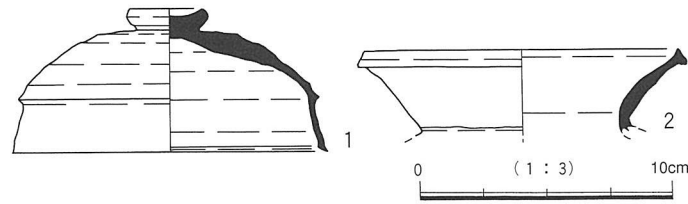


第6図 K1・K2・K13号墳 周溝断面図

古墳の周囲には、幅0.8~1.8mの周溝がめぐり、くびれ部と前方部前面の中央付近で肩口から0.2mと最も深く掘り込まれ、ほかでは0.1m前後であった。周溝の堆積土は、下層に暗黄灰色細砂混りシルトが、上層に暗黒褐色細砂混じりシルトが堆積する。下層の堆積土はキメも細かく、地山に質が似ていることから、墳丘盛土が崩落し堆積したものであろう。上層の有機質に富む黒色の堆積土は、墳丘盛土の二次崩壊土が堆積する過程に落葉などの有機物が加わり黒色化をあたえたものと考えられる。

主体部は前方部墳丘面では検出できず、盛土内に構築されたか調査区外となる後円部上にあったのであろう。主体部が確認できなかったため埋葬施設は不明である。

遺物は、前方部西辺の北隅の墳丘部寄り、周溝堆積土の暗黒褐色細砂混じりシルト層から須恵器・



第7図 K1号墳 出土遺物

土師器の甕片がまとまりで出土している（第5図）。その他、周溝の上層を中心として須恵器の杯蓋・有蓋高杯の蓋（第7図1）・壺・甕の破片が出土している。これらはほとんどが接合関係も追えないほどの破片であることから、古墳の二次崩壊時に墳丘上に供献あるいは埋葬施設へ副葬していたのが転落し混入したものと推測する。

図示した1の須恵器は天井部に中心が凹むつまみが付く有蓋高杯の蓋で、口端部は端面を回転ヨコナデし内傾に仕上げている。ヘラケズリは天井部から稜部におよび、口縁部と境する陵部は回転ヨコナデを施し鋭角に仕上げている。2の須恵器は内・外面の全体に自然釉が付着した甕で、口縁部の内面はナデして整え、口端部は外面を拡張し下方にツマミナデしている（第7図）。（註）P42

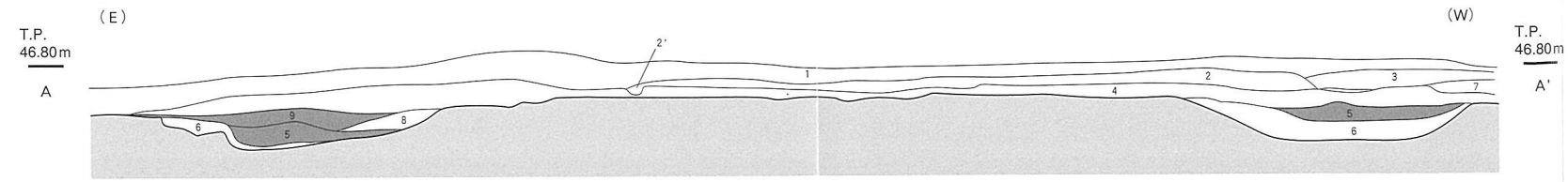
2. K2号墳（第6・8～13図、写真図版6・7・17）

墳丘部の東西軸9.6m、南北軸8.6mを測る方墳である。墳丘部一帯の地山面はT.P.46.3～46.9mと北方の支丘陵頂部へゆるやかに高まっていく地形上に築かれている。墳丘面は現代の建物柱跡や溝によって荒らされ、墳丘の盛土は全く残存していなかった。主体部は墳丘面に掘方が確認できなかったことから、墳丘盛土内に構築されていたと推測する。

古墳の周囲には外周の隅が丸くなり方形状を呈する幅2.7～3.7mの周溝が掘られ、四隅で幅が狭くなっている。周溝は肩口からの深さが南辺で0.15m前後と浅く、地山面が高まる北辺では0.3m程と深くなり、各辺ともに中央部分が最も深く掘りこまれていた。周溝には墳丘部から掘方に這うように暗黄褐色粘質シルトが下層に堆積し、下層堆積後の凹みに溜まるように墳丘部から上層に暗褐色シルトが堆積している。掘り込みが深い北辺では下層の堆積を厚く確認できた。下層の堆積土は砂礫の混じりもほとんどない細かい質で墳丘側から流れたような堆積状況から、墳丘盛土の一次崩壊土が堆積したものと考える。この2号墳の周溝北辺は5号墳の周溝を切り込んでいる。

遺物は、暗褐色シルト層から、東南隅付近と西辺中央部のそれぞれ墳丘部寄りの位置で須恵器片のまとまりを検出した（第10・11図）。東南隅付近ではほぼ完形の杯蓋が2点（第13図1・2）のほか、臑・器台片（第13図10～16）が、西辺中央部では甕の破片（第12図3）が中心として出土した。東南隅付近のまとまりでは接合関係を追って完形に近い形態に復元できる破片も含まれていた。しかし、各破片はそれほど大きくなく、周溝底から浮いて混じり込むように堆積土に含まれていたことから、1号墳と同様で古墳の二次崩壊時に墳丘部から転落してきたのであろう。西辺では出土したのがほとんど甕片であって、東南隅付近のまとまりと比べると出土器種に違いがうかがえる。

第13図1～4は杯蓋である。天井部は2～4はやや丸みをおび、1は平坦気味になる。底端部は端面をやや内傾気味に仕上げている。天井部は稜部にむかって2/3から1/2にケズリを施している。第13図5～9は杯身である。たちあがりはやや内傾気味に立ち上り、端部は端面をやや内傾気味に仕上げている。



K 1号墳

- K 1号墳東西
1. 暗褐色砂質土 (粗砂混じり) しまり弱
 2. 黒褐色細砂混じりシルト (ガラ含む) しまり並
 3. 淡黄灰色砂質土 (粗砂混じり) しまり弱
 4. 淡黄灰色シルト質土 (黄褐色砂質土が斑点状に混じる) しまり並
 5. 暗黒褐色細砂混じりシルト 粘性並
 6. 暗黄灰色細砂混じりシルト (黄褐色砂質土が斑点状に混じる) 粘性弱
 7. 黄灰色粗しき混じり土 (赤褐色土が斑点状に混じる、ガラ含む) しまり弱
 8. 淡黄灰色砂礫混じりシルト (淡黄褐色シルト・明黄褐色砂質土が斑点状に混じる) しまり強
 9. 暗黒褐色細砂混じりシルト 粘性並



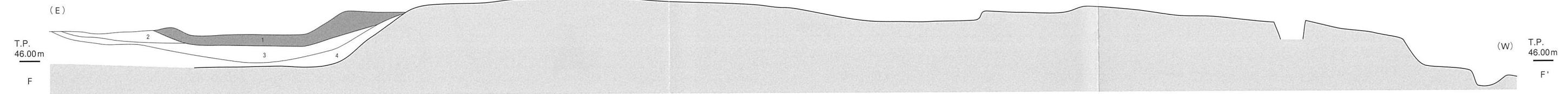
- K 2号墳周溝西辺
1. 黒褐色極細砂混じりシルト しまり並 粘性並
 2. (一次崩壊土) 暗黄褐色粘質シルト しまり強 粘性強
 3. (一次崩壊土) オリーブ褐色細砂混じりシルト しまり並 粘性弱
 4. 黄褐色細砂混じりシルト質土 (赤褐色シルト質土混じる)



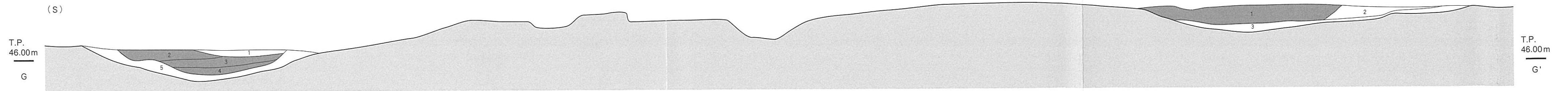
- K 2号墳周溝北辺
1. 暗黒褐色細砂混じりシルト しまり並 粘性弱 竹根混じり
 2. (一次崩壊土) オリーブ褐色極細砂混じりシルト しまり並
 3. (一次崩壊土) 黄褐色中砂混じり粘質土 しまり強 粘性並

- K 2号墳周溝南辺
1. 暗黒褐色細砂混じりシルト しまり強
 2. (一次崩壊土) 黄褐色中砂混じり粘質土 しまり強
 3. 黄褐色細砂混じりシルト質土 (赤褐色シルト質土斑点混じり) しまり強

K 2号墳



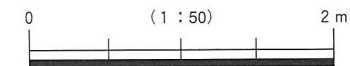
- K 3号墳周溝東辺
1. 暗黒褐色シルト しまり並 粘性強 (遺物含む)
 2. 暗茶褐色極細砂混じりシルト しまり並 粘性並
 3. (一次崩壊土) 浅オリーブ灰色細砂混じりシルト質土 (明黄褐色土混じる) しまり並 粘性並 (完形遺物含む)
 4. (一次崩壊土) 浅黄灰色シルト質土 しまり並 粘性強



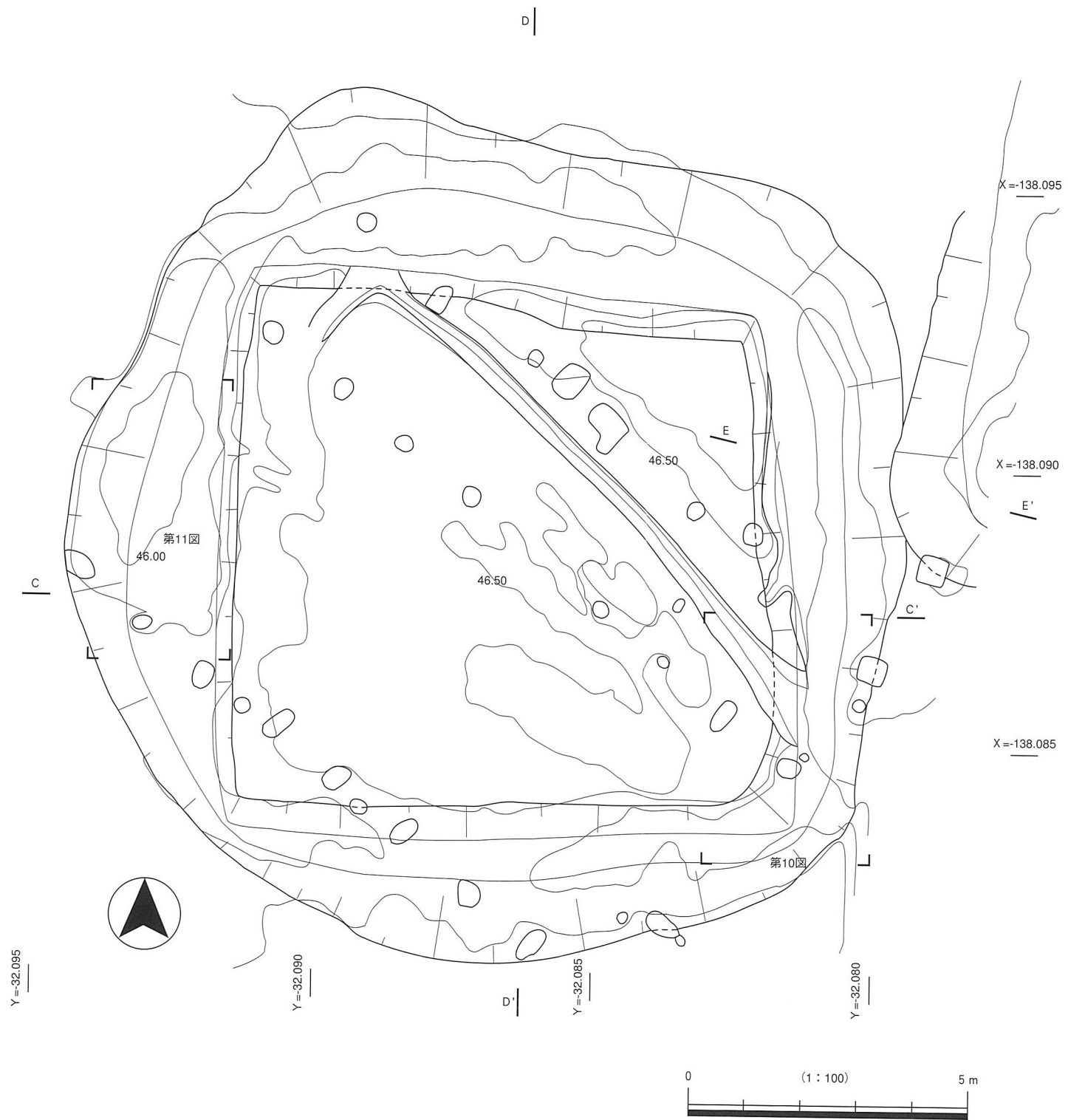
- K 3号墳周溝南辺
1. 淡黄灰色細砂混じりシルト (径~1mmの砂礫含む) しまり並
 2. 淡黒褐色粘質シルト しまり並 粘性弱
 3. 暗黒褐色粘質シルト しまり強 粘性並 (最下部に遺物含む)
 4. 暗黄灰色粘土 (淡黄褐色土混じる) しまり強 粘性強
 5. (一次崩壊土) 黄褐色砂質シルト しまり並 粘性並

- K 3号墳周溝北辺
1. 黒褐色シルト しまり並 粘性並 (遺物含む)
 2. 茶褐色細砂混じりシルト しまり並
 3. (一次崩壊土) 黄褐色砂質土 (灰白色粘質土混じる、径1~10mmの砂礫を含む) しまり弱

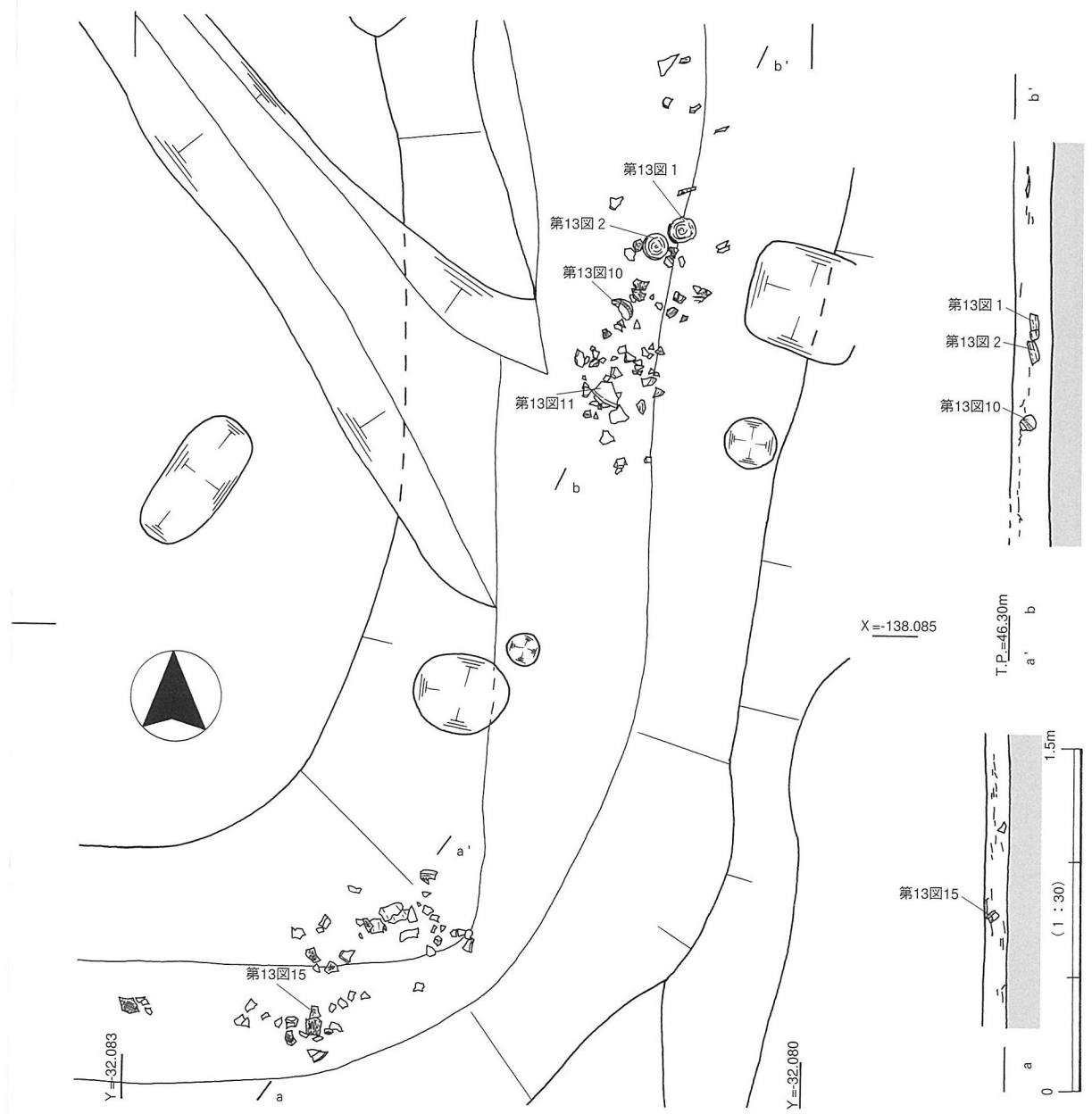
K 3号墳



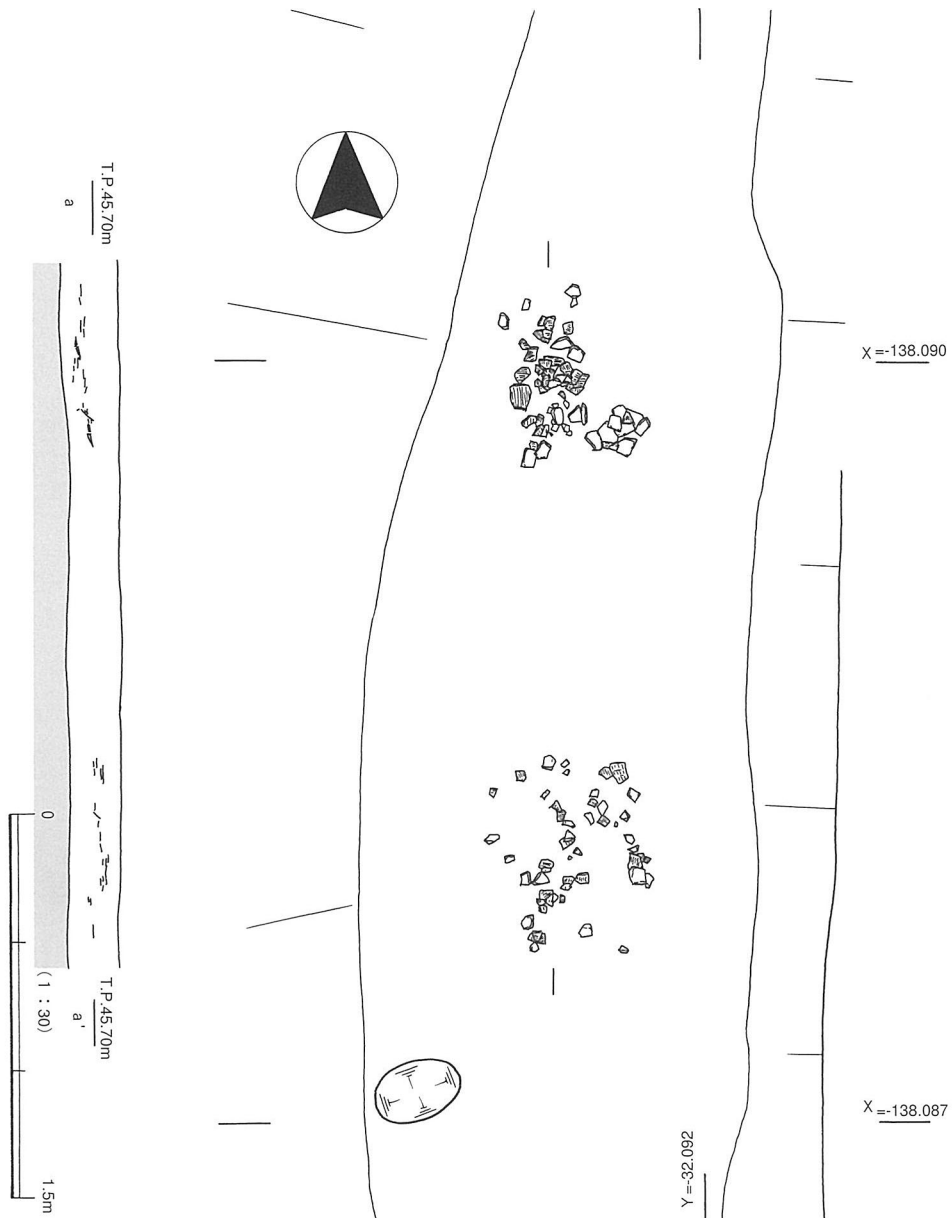
第8図 K1・K2・K3号墳 断面図



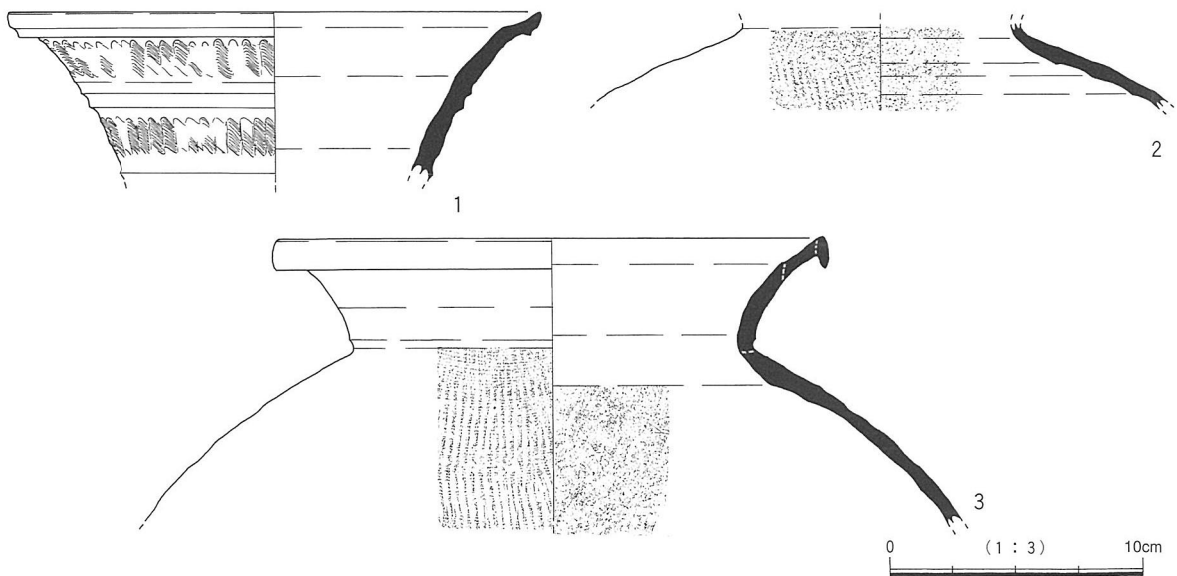
第9图 K2·K4号墳 平面图



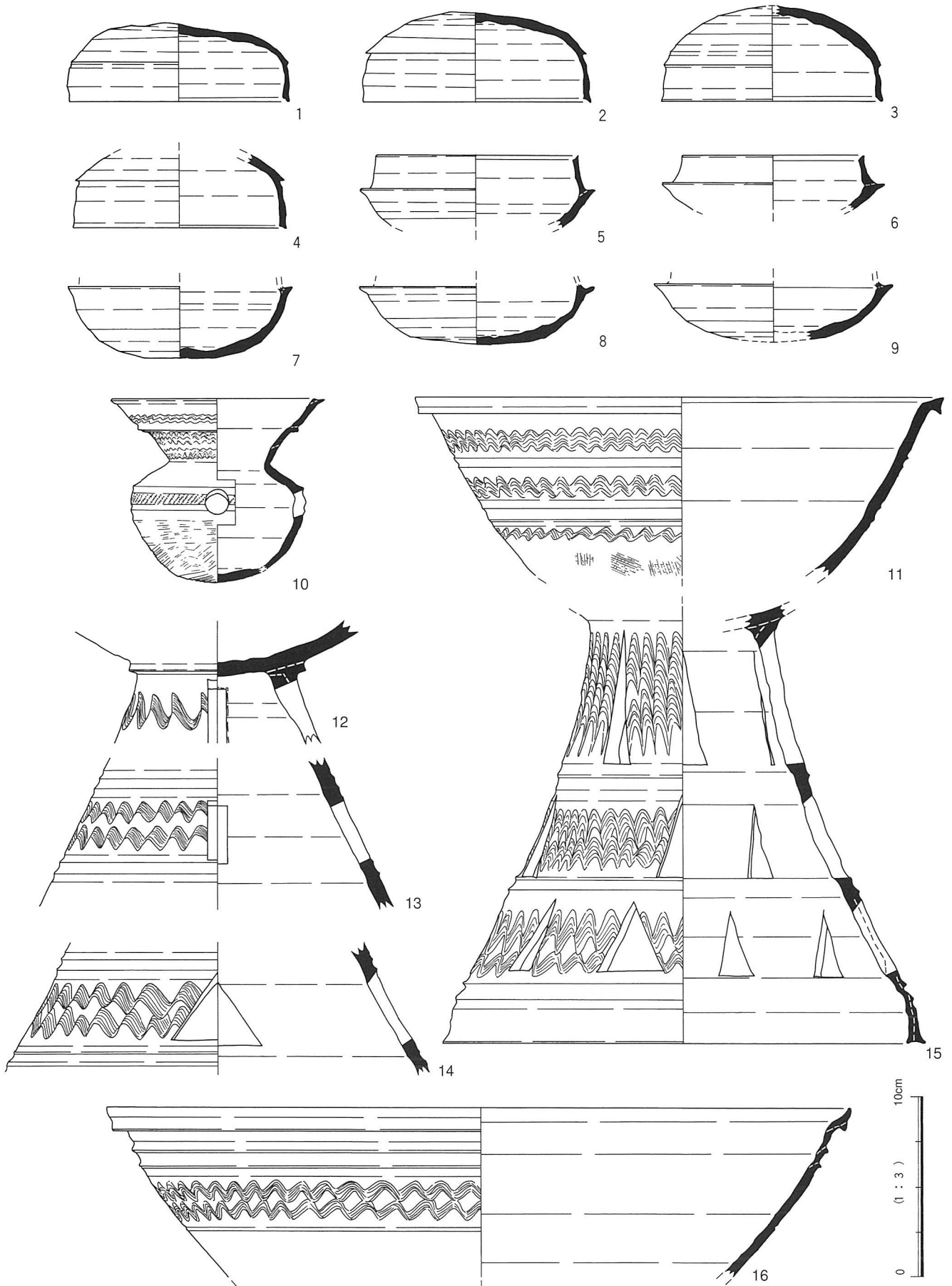
第10图 K2号墳 周溝東南部遺物出土状況图



第11図 K2号墳 周溝西辺遺物出土状況図



第12図 K2号墳 出土遺物(1)



第13図 K2号墳 出土遺物(2)

底部は受部にむかって1/2にケズリを施している。第13図10は隙で、底部から体部にかけて外面に平行タタキを施したのち体部付近をナデている。体部には板状具でキザミを施し、おそらく同一であろう工具で口頸部に波状文を描いている。口縁端部は、回転ナデして凹面を作り出している。第13図11～16は器台の杯部と脚部である。11は口縁部を外方に強く屈曲させ、口端部は下端をつまむようにして回転ヨコナデしている。16は口縁部内面を強く回転ヨコナデし口端部を斜め上方に向け、端部から一段下がったところに粘土紐を貼付し、拡張した部分を回転ヨコナデし仕上げている。11・16ともに体部には、沈線様に強く回転ヨコナデすることで隆起線を作り出し、この隆起線で区画されたような間にクシ状工具で波状文を描いている。波状文の描出方法には、工具を連続的に動かして描出するもの（以下、A種と称する）、工具を不連続に動かして一波ごとに描出するもの（以下、B種）がある。体底部全体には外面に平行タタキを施したのち、ナデて仕上げている。脚部には隆起線で区画した間にB種波状文を描いたのち三角形スカシ孔を開けている。第12図1は壺の口縁部で、頸部にはクシ状具でB種波状文が二段描かれ、口縁部は内面をヨコナデしている。第12図3は口縁部を外下方に折り込んでいた甕で、体部は平行タタキを施したのち板状具で不等間隔に回転ヨコナデしている。

3. K3号墳（第8・14～20図、写真図版8～10・18・19）

墳丘部の東西軸10.7m、南北軸9.8mを測る方墳である。古墳は支丘陵頂の南西部分を墳丘部として、周溝の南辺は西に向かって落ち込む細い谷の谷頭を利用するかたちで掘られ、盛り土して墳丘を築造している。周溝の東辺が支丘陵頂部に深く掘り込まれることで、北辺と南辺の高低差を意識させないでいる。墳丘盛土であったろう黄褐色粘質シルトが南側の斜面から墳頂部付近にかけて若干残存し、この堆積を厚く確認し、墳頂部では主体部を検出した。

周溝は幅2.3～4.5mで、2号墳同様に四隅でその幅が狭まっている。各周溝辺ともに中央部で深く掘りこまれている。周溝の堆積土は墳丘方面から供給されており、下層に墳丘盛土の一次崩壊土と推測する黄褐色粘質シルトが、上層には暗黒褐色シルトが堆積し、東辺の墳丘部寄りでは一次崩壊土が厚く堆積していた。

墳頂部のほぼ中央の盛土内で東西方向に軸をもつ墓壙の最大長6.3mの主体部を1基検出した。主体部は、墳丘を構築した後に棺を納める部分を地山面まで掘り込み、棺を納めたのち周辺を埋め固めてから埋めている。棺およびその材は確認できなかったが、長軸4.3mの木材の腐食と陥没と推測する土壌の変色部が確認できることから、埋葬施設は木棺直葬と推測できる。棺の納まる部分およびそこに落ち込む堆積土から遺物は出土していない。

遺物は、周溝堆積土の暗黒褐色シルト層を中心として出土している。南辺東半部は須恵器の杯・高杯・甕片のまとまりを、北辺東半部で須恵器の台付杯・短頸壺片（第19図16・18・19）や土師器片のまとまり（第20図4）を、それぞれ墳丘部寄りに検出した。東辺では一次崩壊土から須恵器の杯身・蓋、高杯（第19図2・3・6～9・15）がいずれもほぼ完形で、0.5～1.0mごとに等間隔をなすかのように転落した状況で出土した。これら出土状況からは、墳丘部に供献していたものが墳丘の崩壊時に転落したものと推測でき、東辺で検出した遺物は墳丘に据えられていた配置に近い可能性がある。

第19図1～5は杯蓋である。天井部は全体にやや丸みをおびるものと平坦気味なものがある。底端部はやや内傾気味に仕上げている。天井部から稜部にいたる2/3程にケズリを施している。第19図6～12



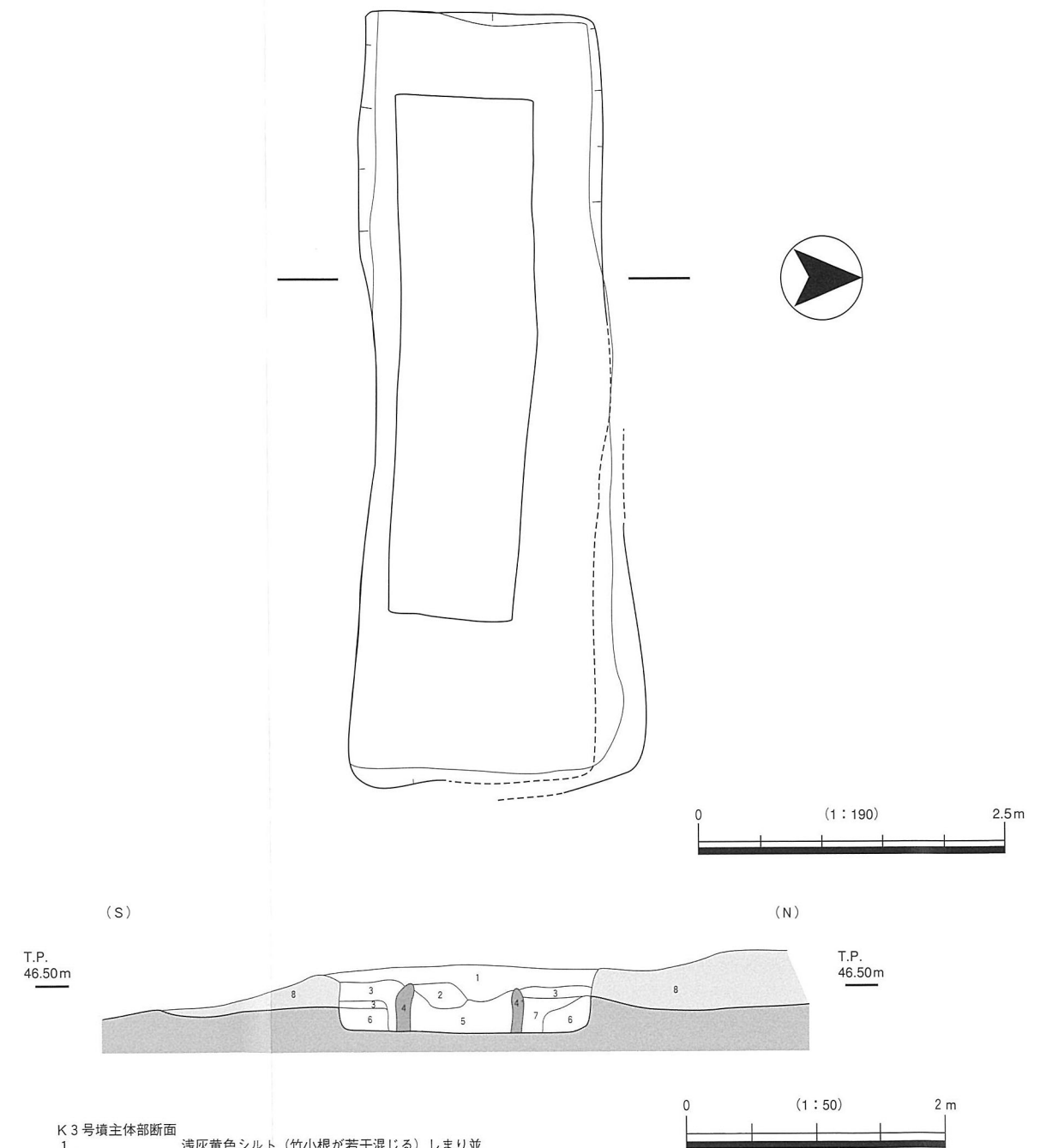
第14図 K3号墳 周溝北辺遺物出土状況図

は杯身である。底部のケズリはおよそ2/3程度で収め、たちあがりは端部にかけて内傾の度合いがやや強い。たちあがりの高さは1.5～2 cmである。第19図13は台付椀である。第19図17は椀で、底部をナデで整えている。第19図16は無蓋高杯あるいは台付壺である。第19図14は脚部の3方向に長方形のスカシが見られる。第19図15は杯部の体部付近に長方形のスカシを放射状に開けている。脚端部は内面を回転ナデし直に立ち上げ、外面は回転ヨコナデし隆起線を作り出している。この脚端部の成形は甕の口縁部成形に類似している。第19図18は短頸壺の口縁部で、口端部は平坦に面取りしている。第19図19は壺の底部から体部で、外面は丁寧にヨコナデを施している。第20図1・2は器台の脚柱部で、沈線様に回転ヨコナデし作り出した隆起線で区画されたような間にクシ状工具でB種波状文を描いている。波状文を描出したのち外面から三角形スカシ孔を開けている。第20図4は脚裾部が外に開き、端部は端面を強くナデて凹面がつき、内・外端を内・外に広げている。第19図20は口縁部の内面をヨコナデし端部を直立させている裾である。外面は平行目タタキを施しのち板状具で不等間隔に回転ナデを施し、頸部付近で特に密にしている。第19図21は口縁部を外下方に強く屈曲させた壺で、頸部にカキ目を施している。

第20図3は頸部で外反し、外面にタテハケを施した土師器の甕である。第20図5は外面にタテハケを施している埴輪片である。第20図3・5は、内外面ともに摩滅が激しい。

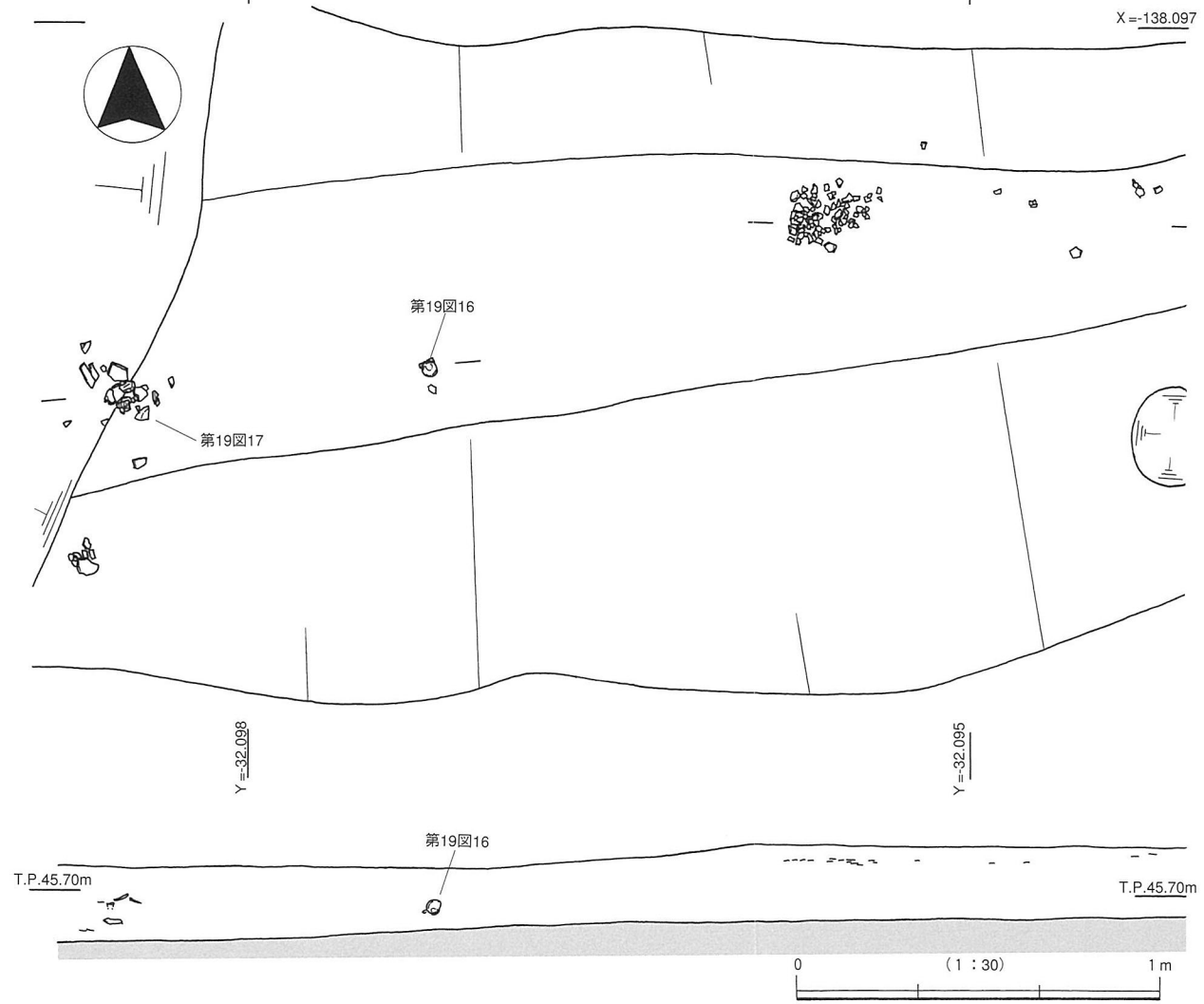


第15図 K3号墳 平面図

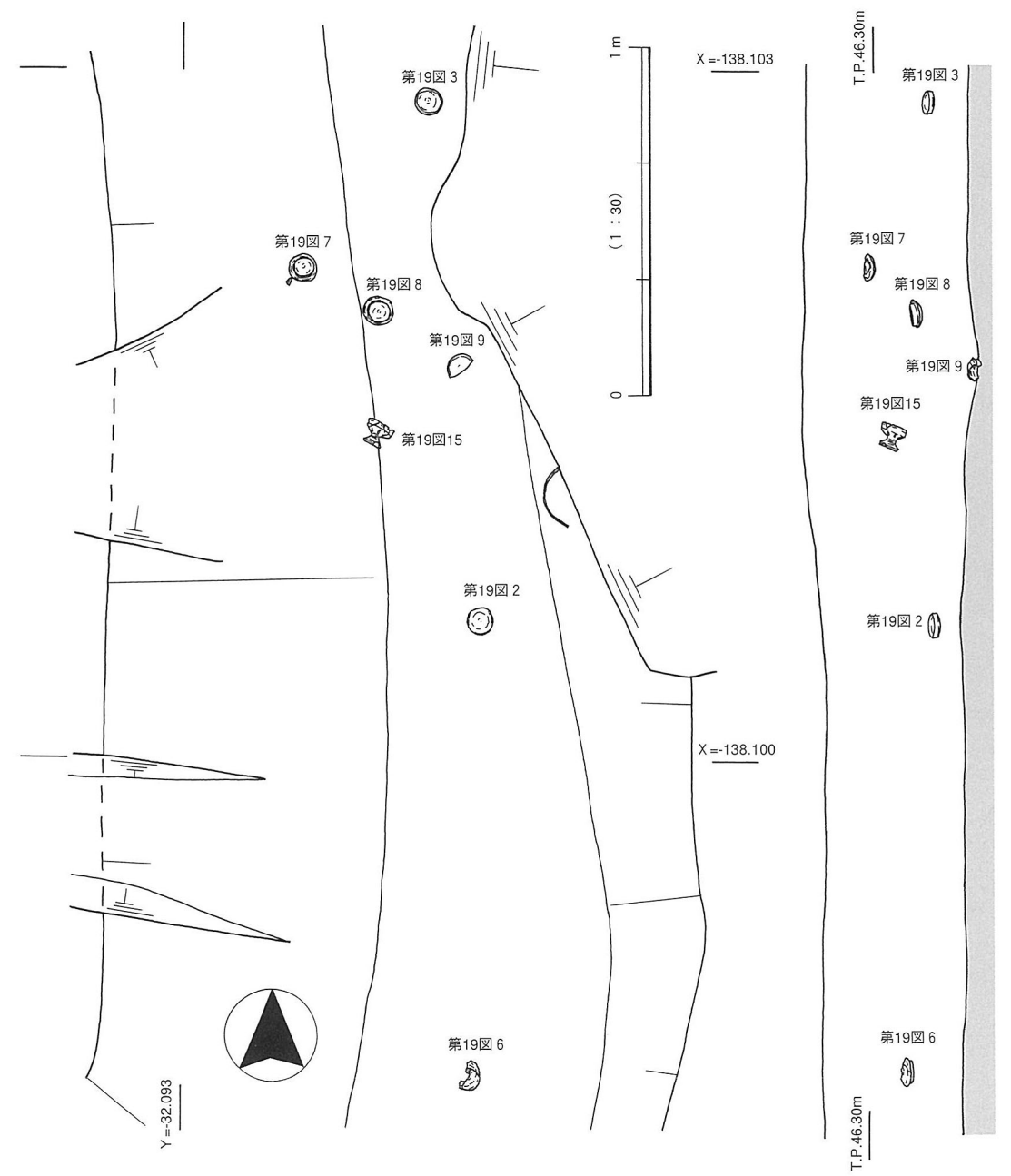


- K3号墳主体部断面
1. 浅灰黄色シルト (竹小根が若干混じる) しまり並
 2. 淡灰黄褐色シルト (径~5mmの砂礫を含む) しまり弱
 3. 粘性弱灰黄褐色シルト しまり並 粘性強 明褐色シルトが斑点状に若干混じる
 4. (木棺側板痕) 淡オリブ褐色シルト (径~1.5mmの砂粒を含む) しまり弱
 - 4'. (木棺側板痕) オリブ褐色シルト (径~1.5mmの砂粒を含む) しまり弱
 5. 浅褐色粘質シルト (径0.5~1.0mmの砂粒を含む, 明褐色シルトが斑点状に混じる) しまり並 粘性並
 6. 淡黄褐色粘質シルト (明褐色シルトが斑点状に混じる) しまり並 粘性強
 7. 淡黄褐色粘質シルト (明赤褐色粘質シルトが斑点状に混じる, 径1~4.5mmの砂礫が混じる) しまり並 粘性強
 8. (墳丘盛土) オリブ褐色シルト (明赤褐色シルトが斑点状に若干混じる, 径1~4.5mmの砂礫が混じる) しまり並 粘性弱

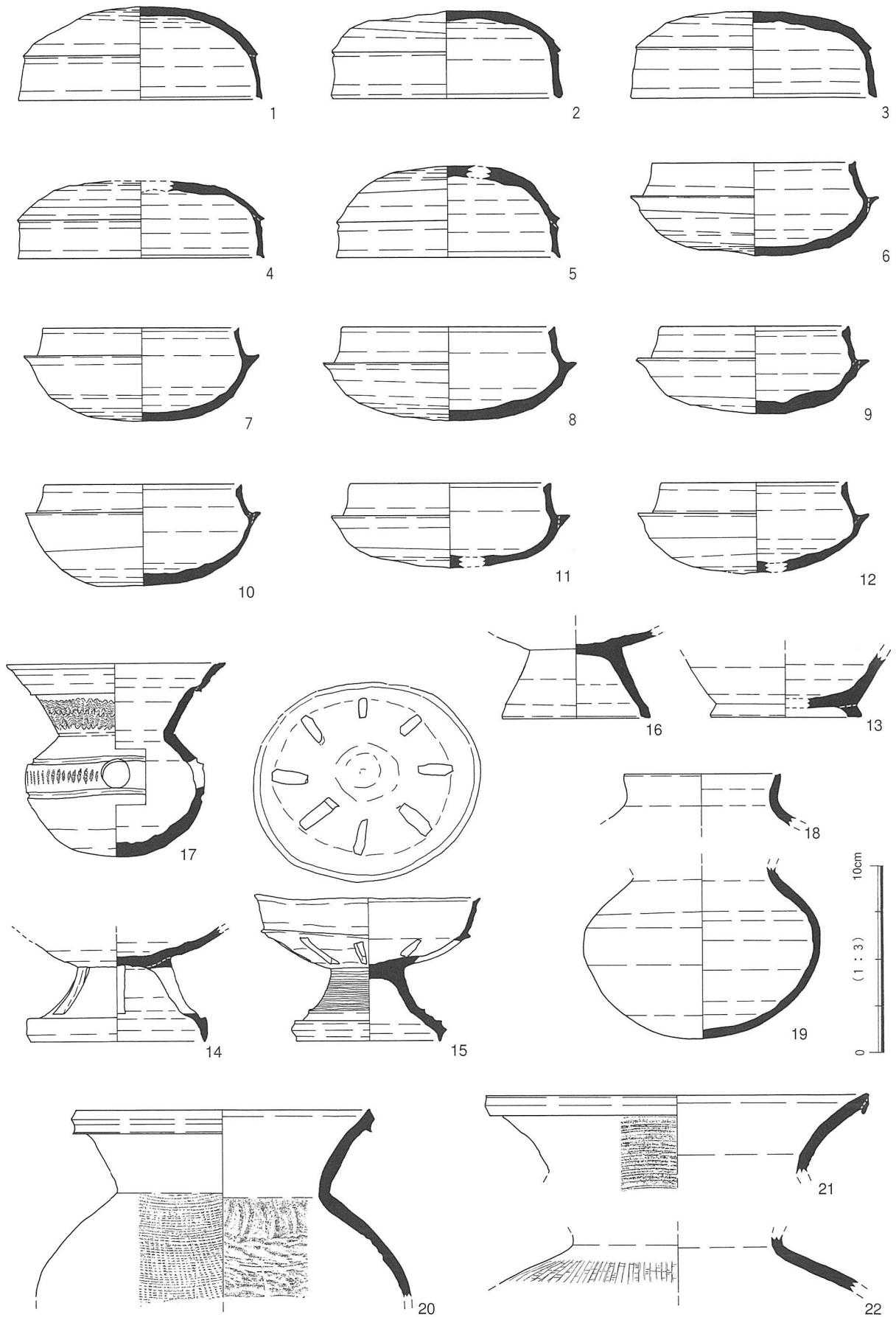
第16図 K3号墳 主体部



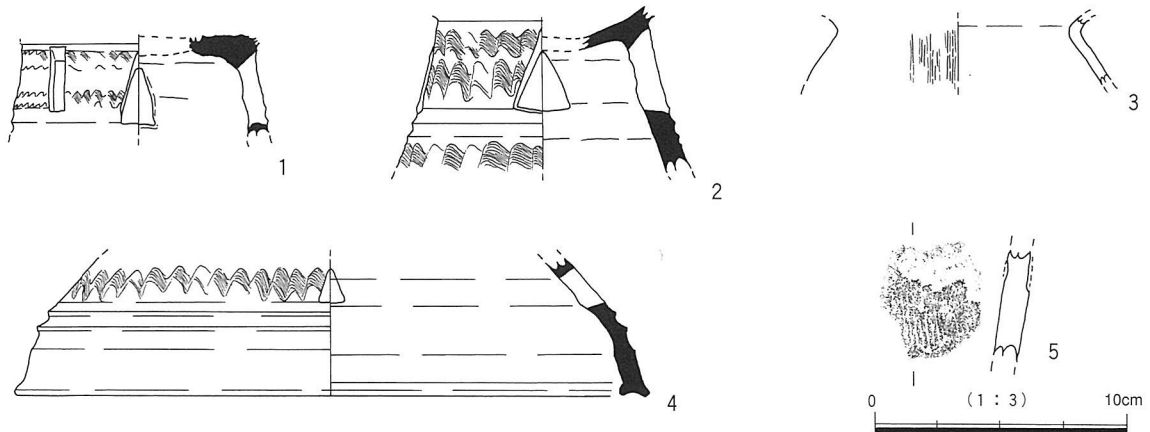
第17图 K3号墳 周溝南辺遺物出土状況図



第18图 K3号墳 周溝東辺遺物出土状況図



第19図 K 3号墳 出土遺物 (1)



第20図 K3号墳 出土遺物(2)

4. K4・13号墳 (第6・9・21・24図、写真図版16)

調査区の南半部、東側に竹林の造成によるものであろう急激に落ち込む傾斜面の肩口で検出した。どちらの古墳ともに検出したのは周溝西辺部のみで、墳丘部ほかにあたる部分は急斜面が形成されたときに切り崩されたのであろう。

4号墳は、周溝部分が後世に斜面の肩口に沿ってはしる里道として再利用されており、その際の攪乱が確認できた。この周溝の堆積土は一部で黒色シルトが確認できたが、黄褐色系シルトの堆積後に砂質土が上から切り込む堆積状況から里道の廃絶後あるいは機能時に再堆積したものと推測する。この再堆積土と考える暗黄灰色砂質土から須恵器の杯身(第24図1)が出土している。4号墳の周溝西辺は、南角で2号墳の周溝東辺を切り込み、北側は13号墳の周溝によって切られている。

13号墳の周溝西辺は、幅が1m前後、肩口からの深さは0.1~0.15mである。周溝の堆積土は、下層に墳丘盛土の一次崩壊土であろうオリブ褐色粘質土が、上層には暗茶褐色極細砂混じりシルトが堆積していた。上層からは須恵器の高杯(第24図13)・甕の体部片が出土している。

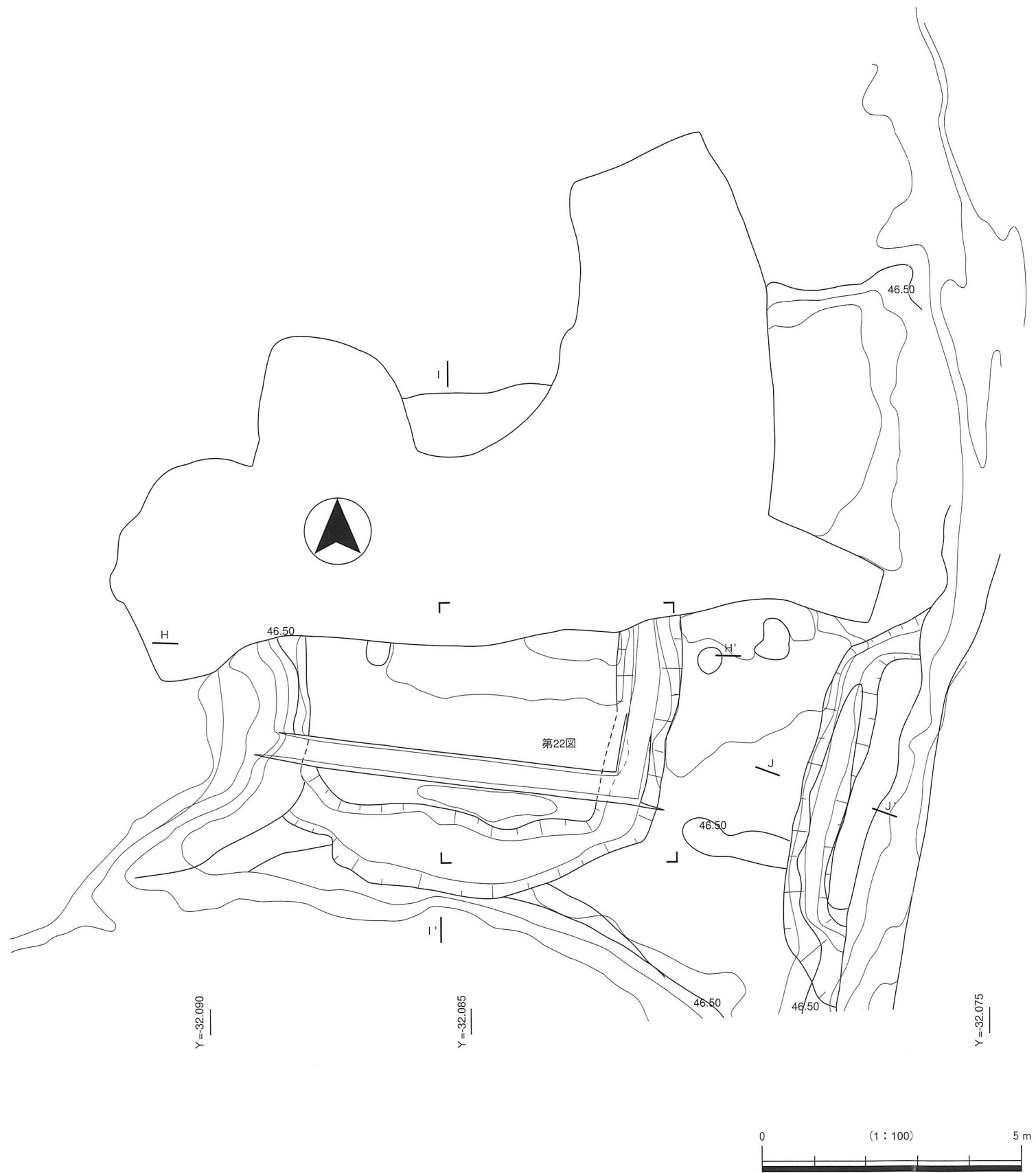
第24図1は杯身で、底部から受部にかけてが浅く扁平な印象をもつ。たちあがりは、端部にかけて欠損しており、破断面の観察からは受部に粘土紐をつぎたし成形していることがわかる。底部のケズリは1/2ほどで収まる。

第24図13は外面に回転カキ目を施し、外面から長方形のスカシ孔を4方向に開けている高杯である。脚端部は、外面を回転ヨコナデをし段を作り出している。

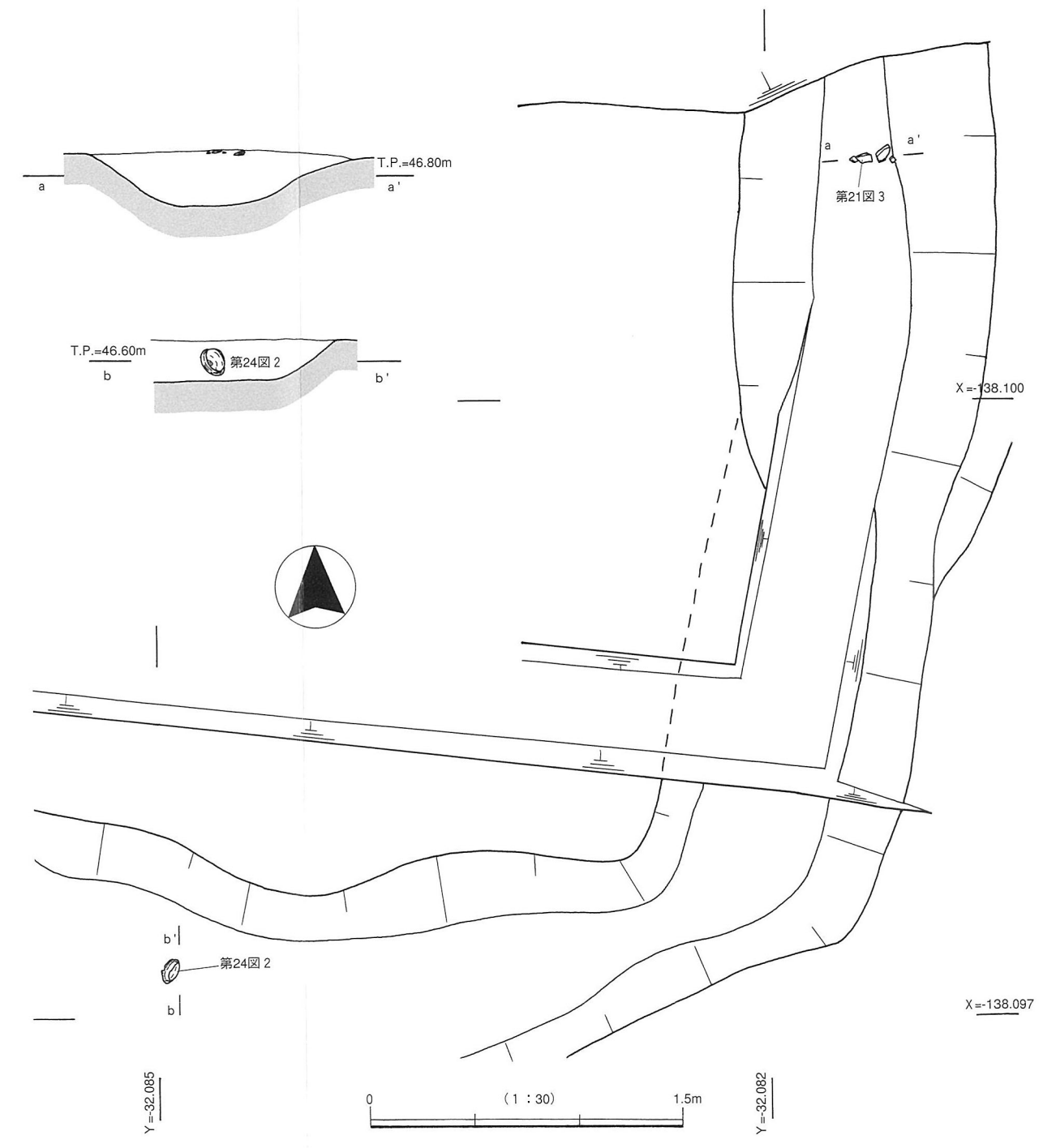
5. K5号墳 (第21~24図、写真図版11・19)

墳丘部の東西軸6.0mを測る方墳である。古墳は支丘陵頂部の南部にあたる場所に造られている。南側より地形的に一段高くなるため削平された度合いも強かったようで、墳丘盛土は全く残存していなかった。主体部は地山面で掘方が確認できず、墳丘盛土内に構築されていたと考える。古墳の北半部は、現代の掘り込み坑によって大きく切り崩されている。

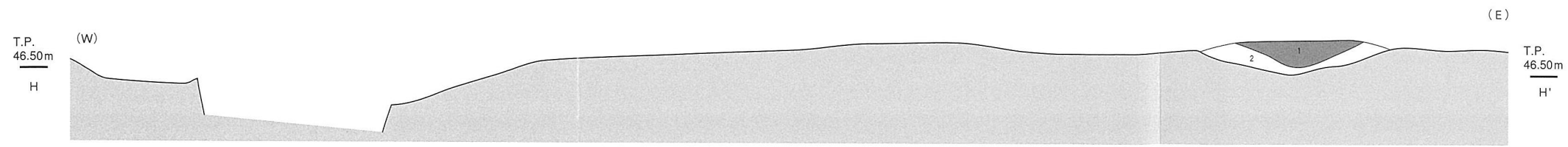
周溝は掘り方の肩口付近にかけて若干削平されたようで、残存する幅は1.2m、深さは0.2~0.3mほどであった。周溝の堆積土は南辺の依存状況がよく、下層にオリブ褐色シルト、上層に淡黒褐色シルトが堆積している。下層の堆積土は地山の土質に近く、砂礫の混じりが少なく目の細かい土であることが



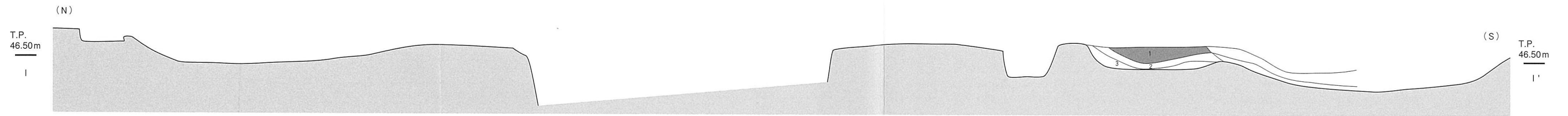
第21图 K5・13号墳 平面図



第22图 K5号墳 周溝遺物出土状況図



K 5号墳周溝東辺
 1. 浅黒褐色細砂混じりシルト (灰白色シルト斑点混じる) しまり強
 2. 浅黄灰色砂質シルト (径0.5~1mmの砂粒含む) しまり強

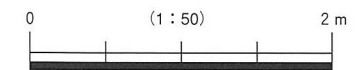
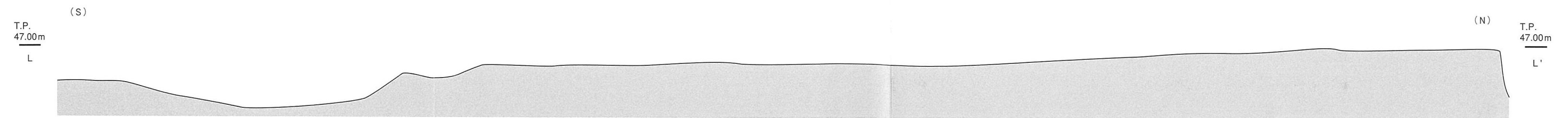


K 5号墳

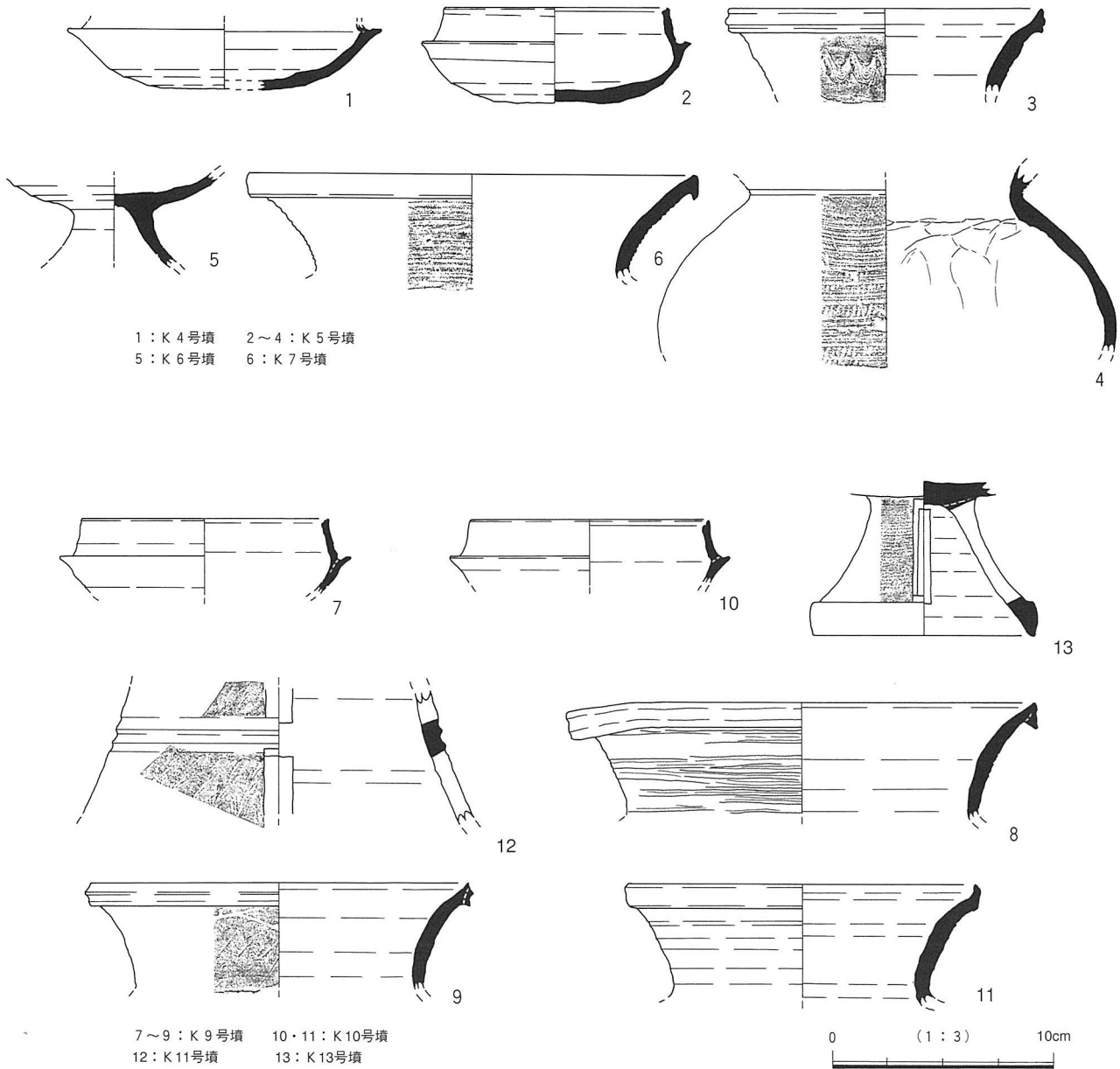
K 5号墳周溝南辺
 1. 淡黒褐色シルト しまり強 竹根混じる
 2. (一次崩壊土) 黄灰色極細砂混じりシルト しまり並
 3. (一次崩壊土) オリーブ褐色シルト しまり並



K 6号墳



第23図 K 5・K 6号墳 断面図



第24図 K 4~K 7・K 9~K 11・K 13号墳 出土遺物

ら墳丘盛土の一次崩壊土と推測できる。この古墳の周溝は、北辺を6号墳と共有し、南辺は2号墳の周溝によって、また西辺が3号墳の周溝によりそれぞれ切り込まれている。

遺物は周溝堆積土の淡黒褐色シルト層から、東辺で須恵器の壺片（第24図3・4）、南辺では須恵器の杯身（第24図2）・杯蓋片・高杯の脚端部片・土師器の甕片が出土している。接合関係が追えるものはほとんどなかったが、東辺で出土した杯身は完形の状態であった。

第24図2は底部にやや丸みをもった杯身で、たちあがりはほぼ直立し、口端部は平坦に仕上げている。底部のケズリは稜部まで施している。第24図3は壺の口頸部から口縁部の破片で、口頸部にクシ状具でU字を描くように一波ごとが断絶する波状文（C種）を描き、口縁部は内面をナデて立ち上げている。第24図4は壺の頸部から体部で、頸部から体部に平行タタキを施したのち板状具で密に回転ヨコナデしている。

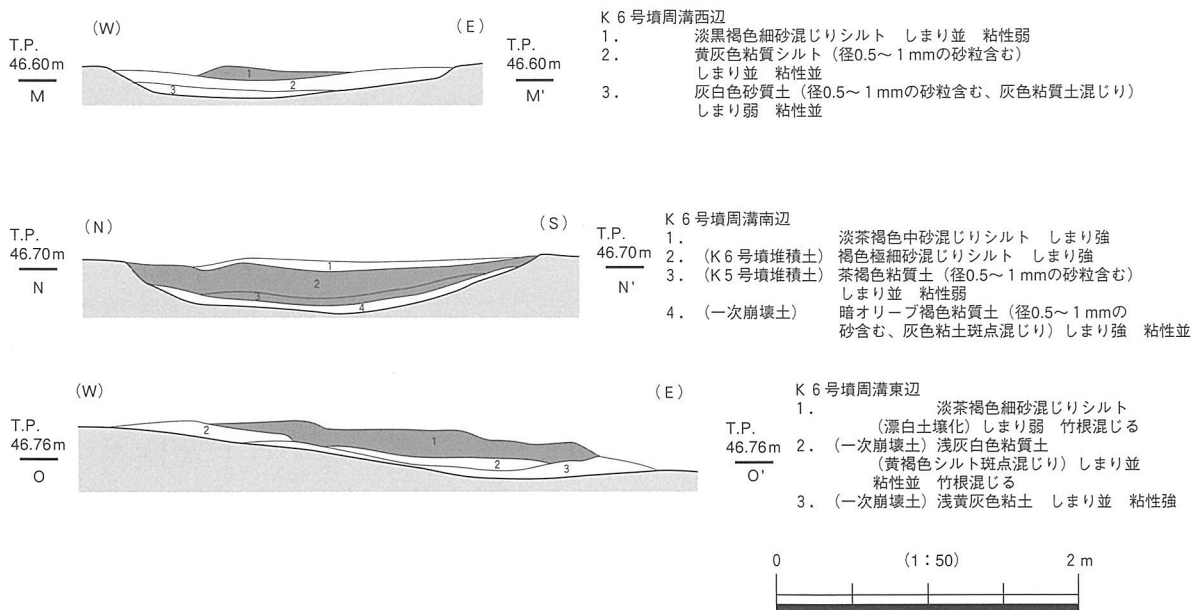
6. K6・7・9～12号墳（第23～26・28～34図、写真図版14～16・19）

古墳群のある支丘陵頂部の中央部から北部一帯で検出した。地山面はT.P.46.4～47.4mで北に向かって高まっている。北東側は竹林の造成時に切り崩されているほか、地山面にはいくつもの現代の巨大な掘りこみ坑があるなどの削平・攪乱を受け、古墳の墳丘盛土はおろか、周溝掘方の依存も悪い。しかし、依存状態が悪いながらも部分ごとに古墳が残存していることから、丘陵面が一様に削平されたわけでないことがうかがえる。

遺物は、周溝堆積土の上層の黒色系シルトから須恵器・土師器片を出土しているが、各古墳の出土量は2・3号墳に比べると微々たるものであった。

6号墳は、墳丘部の南北軸13.0m、東西軸11.5mを測る方墳である。墳丘部は現況で南から北に向かって緩やかに高まりを見せ、周溝の掘方からはおおよそもとの起伏を保っていると推測する。周溝は幅2.5～3.5m、深さ0.2～0.3mほどで、南辺を5号墳と共有している。東辺と北辺は攪乱により掘方が切り崩されていた。東辺の一部で周溝に堆積した墳丘盛土の崩壊土は、竹根の影響からか土色が漂白されていた。南辺と西辺の堆積土は、下層に黄灰色系の粘質土、上層は黒褐色系のシルトが堆積している。南边上層はさらに上下二層に分層でき、下の層を切り込んで黒褐色のシルトが上に堆積していることからこの層が6号墳の周溝堆積土と考える。この層からは須恵器の無蓋高杯（第24図5）・高杯の脚裾部片が出土している。遺物はほかに、東辺から甕の体部片が出土し、周溝北・西辺を切り込む攪乱坑の堆積土には杯身あるいは蓋の底あるいは天井部片・甕の体部片が含まれていた。

7号墳は、墳丘部の南北軸10.1mの方墳である。墳丘部は現状で高さがほぼそろっているが、周溝の掘方は南辺で深いことから北側が地形的により高かったのであろう。周溝は、幅2.2～2.5m、深さ0.25mほどである。北辺と東辺のほとんどは攪乱・削平され、掘方は肩口にかけて特に乱れている。周溝の堆積土は南辺と北辺の一部が確認でき、下層は黒色系シルト、上層が褐色系シルトである。遺物は、周溝南辺の淡黒褐色シルト層から須恵器甕の口縁・体部片のまとまり（第24図6）や隙の頸部片、埴輪片が出土している。東辺を切り込む攪乱坑の堆積土には、墳丘盛土の二次崩壊土と推測する黒色シルトが攪



第25図 K6号墳 周溝断面図



第26図 K7号墳 周溝南辺遺物出土状況図

る。墳丘部一帯は攪乱坑はじめ大きく荒らされている為、もとの丘陵部の起伏は復原しがたいが、周溝の掘方などから西に若干下がるがおおむね平坦だったと考える。周溝は幅2.5~3.7m、深さ0.2m前後である。周溝が確認できた北辺と東辺は、下層に褐色系シルトが、上層に黒色系シルトが堆積していた。遺物は東辺の上層から、須恵器の杯身・釵・甕（第24図10・11）が出土している。周溝東辺の外周肩部では土師器を検出した。

11号墳は、墳丘部の辺長13mの方墳である。墳丘部はじめ古墳の2/3は竹林の造成時に切り崩され消滅している。周溝は幅1~3.6m、深さ0.2m前後である。周溝には下層に褐色系シルト、上層に黒褐色系砂質シルトが堆積していた。遺物は、南辺の上層から須恵器の杯の身あるいは蓋片・器台片・甕の体部片（第24図12）が出土している。

12号墳は、10号墳に隣接する東から西に緩やかに傾斜する面に造られた方墳である。残存状況は墳丘部の辺長が7.8m、周溝幅は3mである。周溝東辺を検出したが、攪乱・削平がひどく周溝の掘方はくずれ、堆積土も確認が困難な程に荒らされている。古墳に伴う遺物は出土していない。

第24図5は杯部の底部にヘラケズリを施している無蓋高杯である。脚部との接合部が細く絞まり、杯部は口縁部一帯を欠損している。台付椀の可能性もある。

第24図6は口縁部を外下方に強く屈曲させた甕で、口頸部に回転カキ目を施している。

第24図7はたちあがり内傾する杯身で、口端部はヨコナデ内傾に仕上げている。第24図9は甕の口縁部で、頸部にクシ状具でB種波状文を描いている。第24図8は頸部にカキ目を施したのちヨコナデしている。

第24図10は、たちあがりとその端面がともに内傾する杯身である。受部はツマミナデしている。第24

拌・混入しており、この攪乱坑の堆積土には須恵器の杯蓋・椀を含んでいた。

9号墳は、墳丘部の南北軸10.2m、東西軸7.1mの方墳である。墳丘部は攪乱による凹凸はなく、もとの地形面を見せていると推測する。周溝は幅2.2~2.9m、深さ0.2m前後である。周溝の堆積土は、下層は褐色系シルト、上層は黒色系シルトである。遺物は、東辺の上層から須恵器の杯蓋・杯身・高杯・甕（第24図7）が出土している。東辺北部分は、11号墳の周溝に切り込まれている。

10号墳は、墳丘部の南北軸7.6m、東西軸7.1mの方墳であ

図11は壺の口縁部で、口縁部をツマミナデで立ち上げ、端部をわずかに内に折り込んでいる。頸部には回転ナデを施している。

第24図12は外面にクシ状具でB種波状文を描いている須恵器の器台片である。上段と下段にそれぞれ長方形のスカシ孔を開けている。

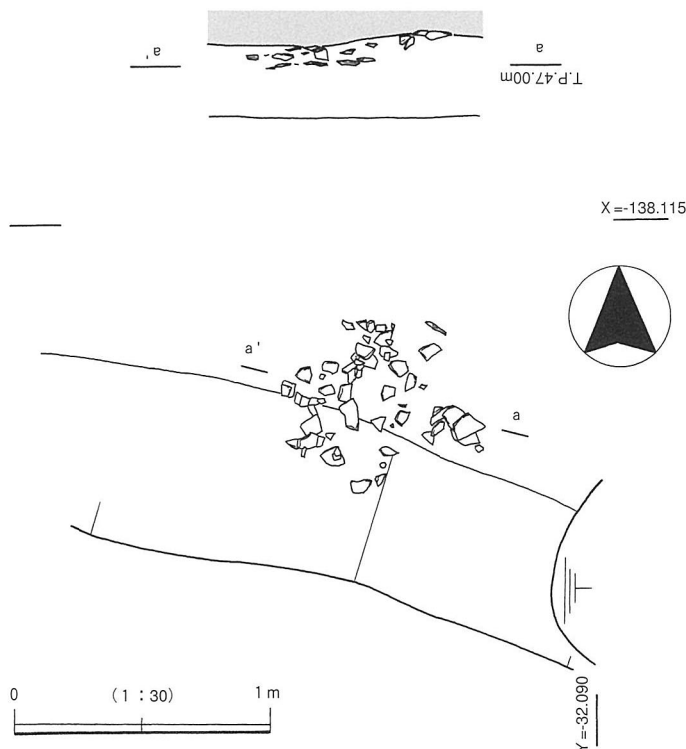
7. K8号墳 (第27・33・35~38図、写真図版13・19)

墳丘部の地山面はT.P.47.3~47.5mで、この支丘陵の頂部にあたる場所で検出した。古墳は、支丘陵頂部の北部の収まりを利用するように造られている墳丘部の径10.6mを測る円墳である。丘陵頂にあたるため墳丘部の削平の度合いも強かったのであろう、墳丘盛土は全く残存していなかった。墳丘部および周溝は丘陵の西側を南北に走る溝に切り込まれ、東側は竹林の造成時に切り崩されている。

周溝は墳丘部を囲んで円状に廻り、幅2.7~3.7mで、深さは0.15m前後である。周溝の掘方は西部分と南部分の一部では残存していたが、東部分は竹の根や切り崩しで荒らされて掘方と堆積土は確認できなかった。周溝の堆積土は、墳丘部から掘方に流れ込むように墳丘盛土の一次崩壊土と考える黄褐色粘質土が下層に堆積し、上層には暗茶褐色シルトが下層を覆うように堆積している。下層の堆積土には、灰白色粘土の微小ブロックが混入している。

遺物は、周溝堆積土の暗茶褐色シルト層から西辺では主に円筒埴輪片がまとまって、北辺では須恵器の甕・壺が出土している(第37・38図5)。埴輪片には大きめの破片も含まれ接合関係もあるが、周溝底から浮く出土状況と堆積土への包含状況からは古墳の二次崩壊時に墳丘に残存していたものが転落したと推測する。

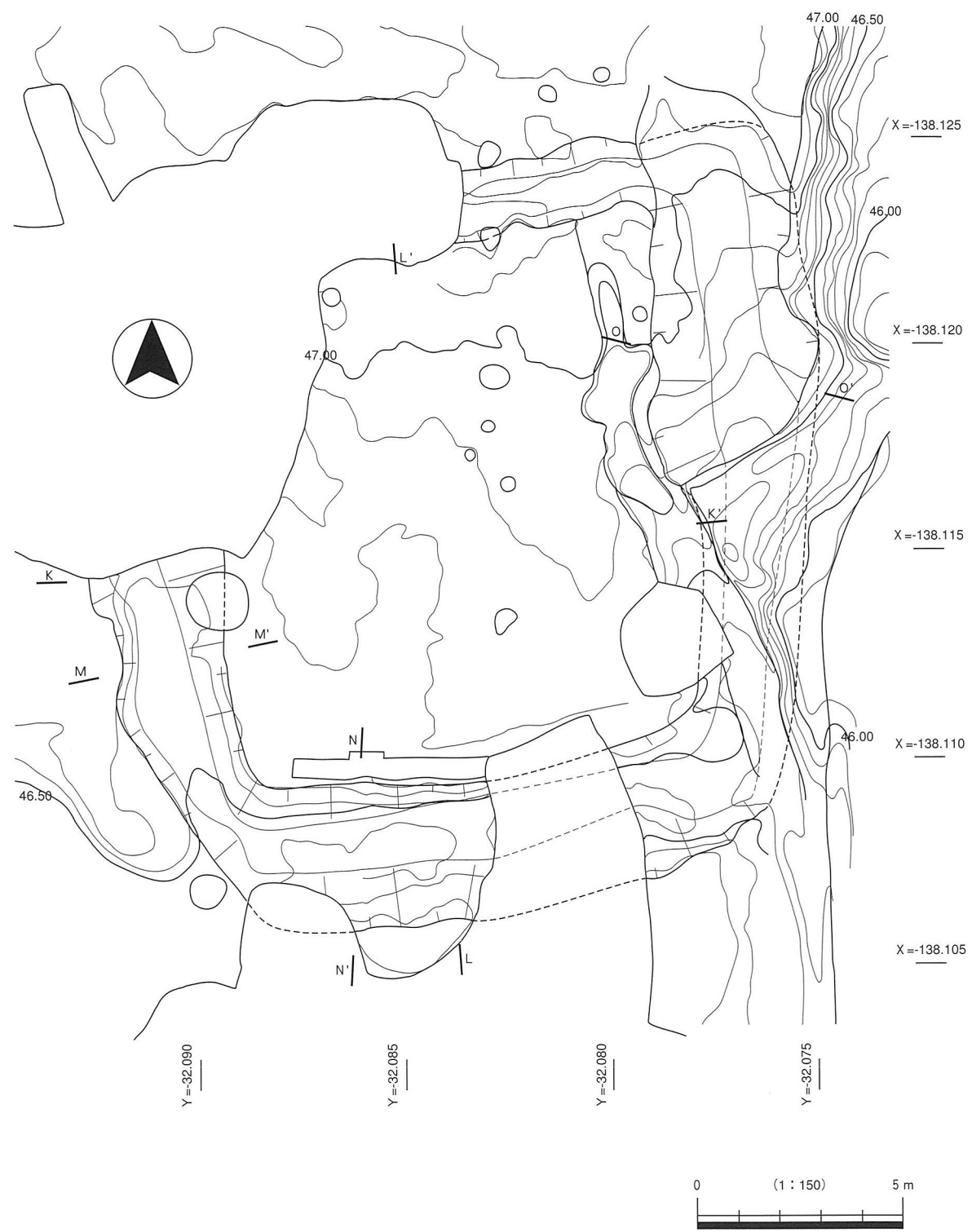
第38図1は杯または壺の蓋で天井部から口縁部への境は陵がほとんどなく、口端部はやや内傾する。



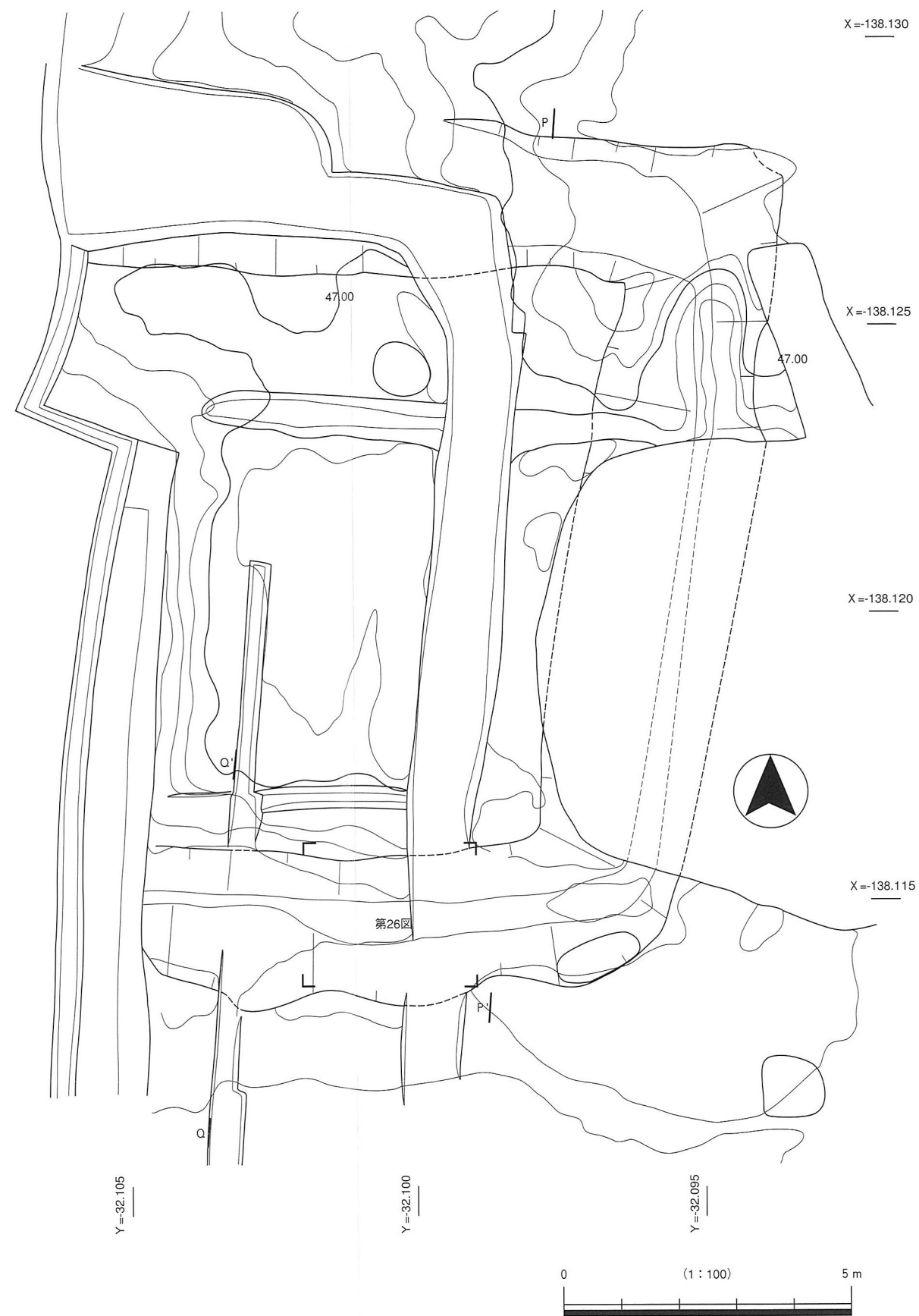
第27図 K8号墳 周溝北側遺物出土状況図

第38図2は脚部の4方向に長方形のスカシ孔を外側から開けている高杯で、外面に回転カキ目を施している。第38図3・4は長頸壺で、体部が最も張るところに荒目のカキ目を施している。第38図5は頸部が直に立ち上がり口縁部から端部にかけて外反する甕である。口端部をつまんでヨコナデし直立させ、口縁部は強く回転ヨコナデすることで隆起線を作り出している。体部には平行タタキを施している。

第38図6~11はタガの断面形がやや不定形な台形を呈した円筒埴輪である。外面にはタテハケを上から下方向に施し、内面は指オサエまたは不整方向にナデて簡単に



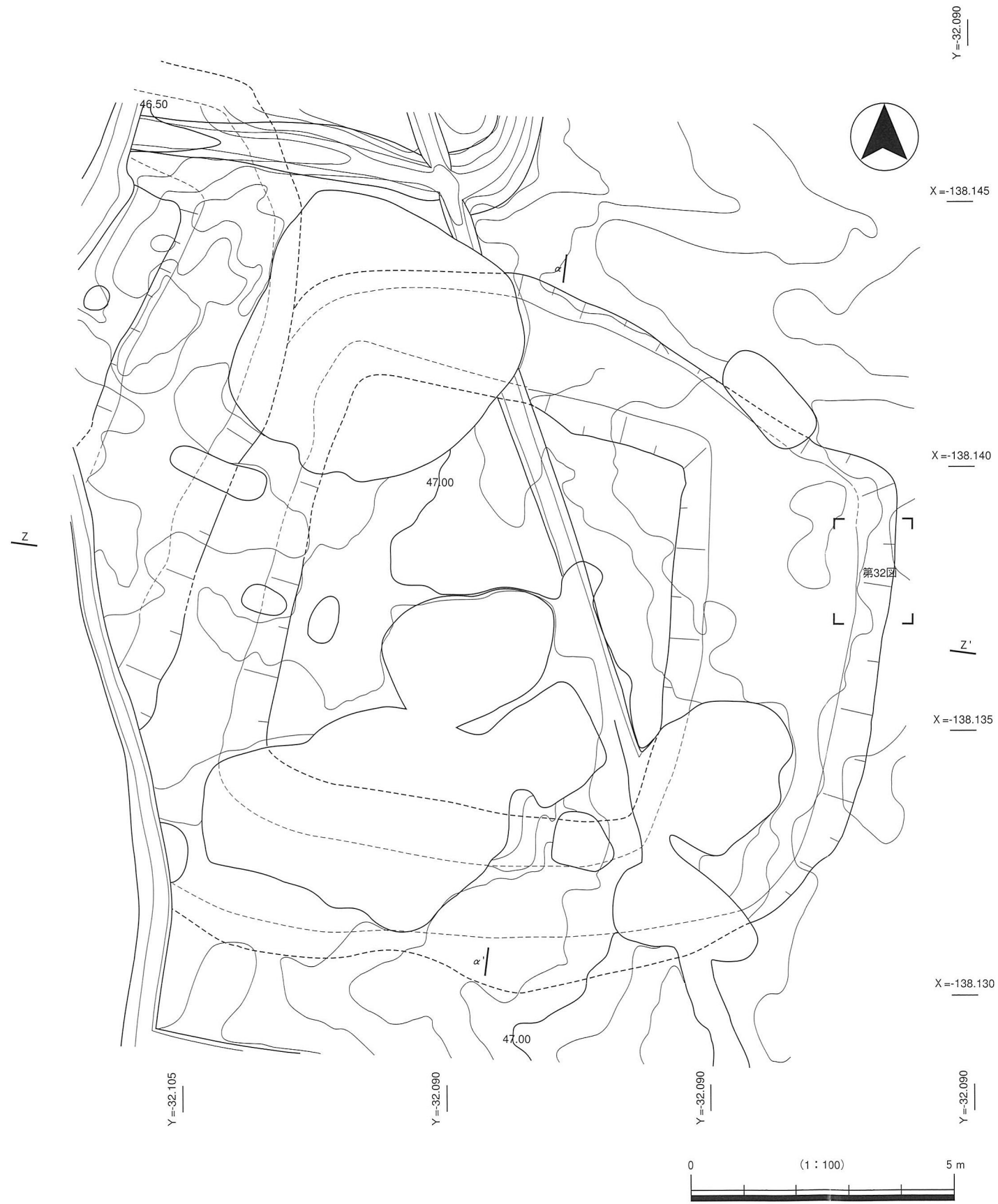
第28图 K6号墳 平面图



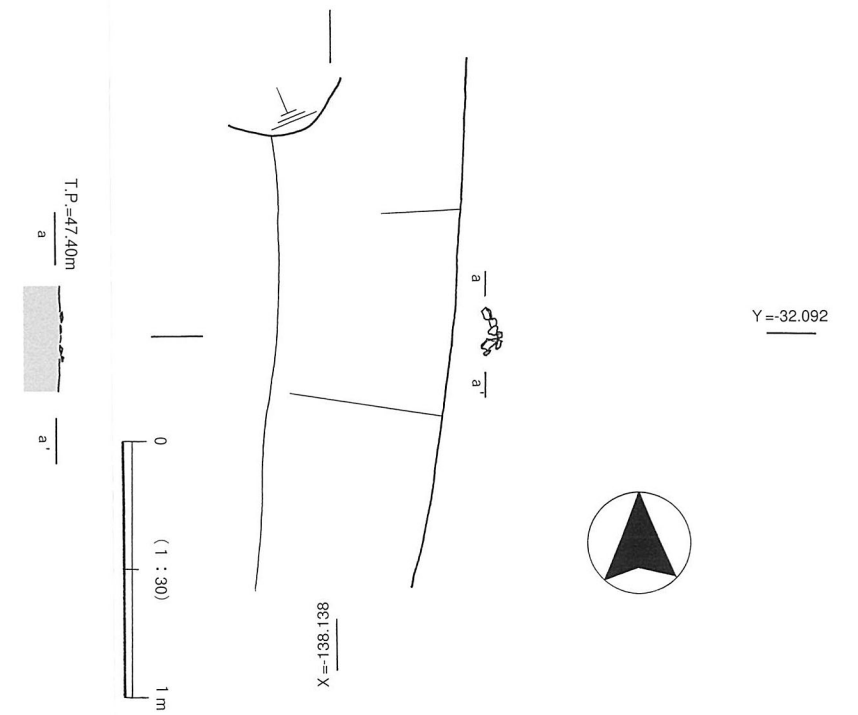
第29图 K7号墳 平面图



第30图 K9·K11号墳 平面图



第31图 K10・K12号墳 平面図

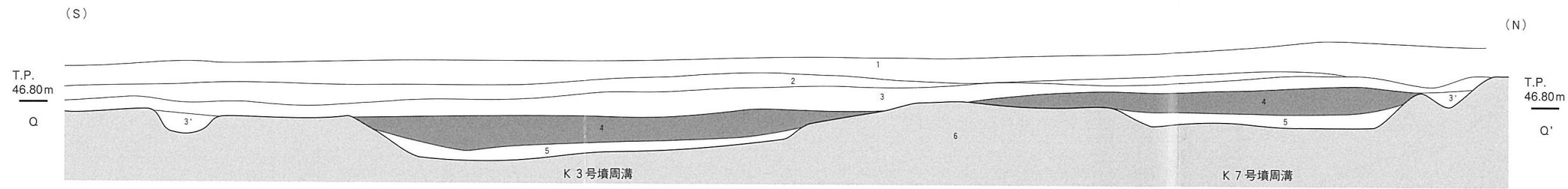


第32图 K10号墳 周溝東部遺物出土状況図



K 7号墳周溝北辺
 1. 浅黒色中砂混じりシルト しまり強
 2. (一次崩壊土) 黄褐色細砂混じりシルト しまり強 粘性並

K 7号墳周溝南辺
 1. 淡黒褐色極細砂混じりシルト しまり強
 2. (一次崩壊土) オリーブ褐色細砂混じり粘質シルト しまり強 粘性並



K 7号墳南北
 1. (整地土) 淡黒褐色砂礫混じり土
 2. (整地土) 黄褐色細砂混じりシルト しまり強
 3. (旧整地土) 淡灰黄色細砂混じりシルト (竹根混じる)
 3'. 淡灰黄色細砂混じりシルト しまり並
 4. 暗黒褐色細砂混じりシルト 粘性並
 5. (一次崩壊土) オリーブ褐色粘質土 (明褐色土が斑点状に混じる) 粘性強
 6. (地山) オリーブ褐色シルト (明褐色土が斑点状に混じる) しまり強

K 7号墳

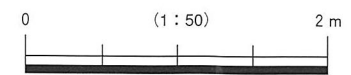


K 8号墳周溝西辺
 1. 暗灰黄色砂質土 (径1~5mmの砂粒含む) しまり並
 2. 暗茶褐色シルト (径1~5mmの砂粒混じる) しまり並粘性弱竹根混じり (埴輪片を多量に含む)
 3. オリーブ褐色砂質土 (径1~3mmの砂粒含む) しまり並 粘性並
 4. 暗オリーブ褐色粘質土 (灰白色粘土斑点混じり) しまり強 粘性並

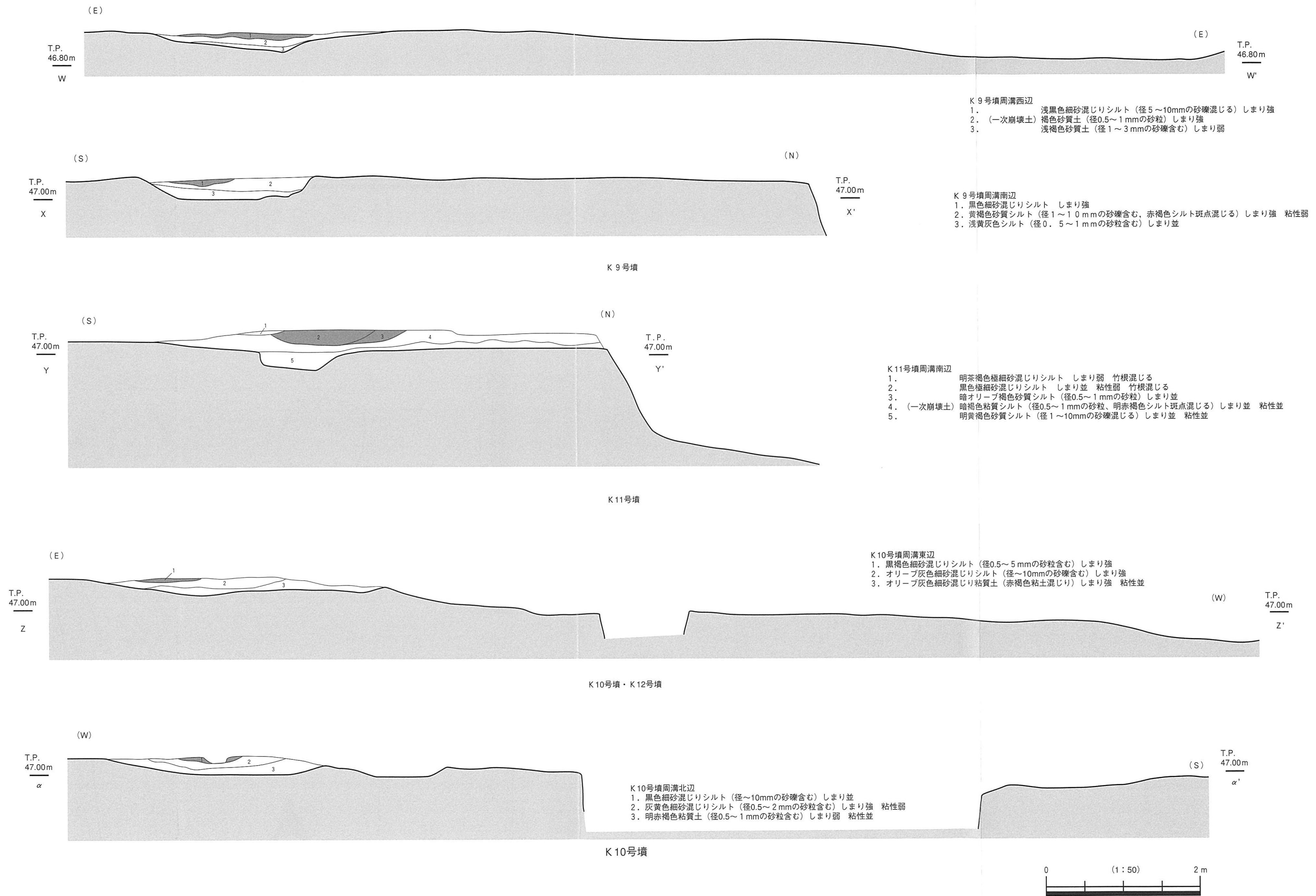
K 8号墳周溝北辺
 1. 黒褐色シルト (径0.5~1mmの砂粒含む) しまり並 竹根混じり (埴輪片・須恵器を含む)
 2. (一次崩壊土) 明黄褐色砂質土 (灰白色粘土斑点混じり) しまり並 粘性並



K 8号墳



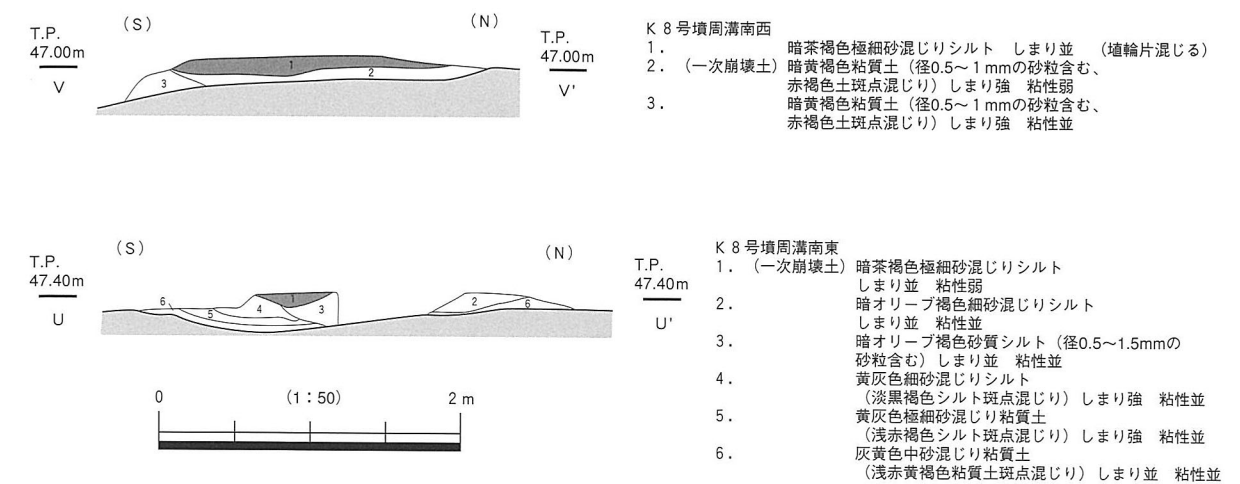
第33図 K 7・K 8号墳 断面図



第34図 K 9 ~ K 12号墳 断面図

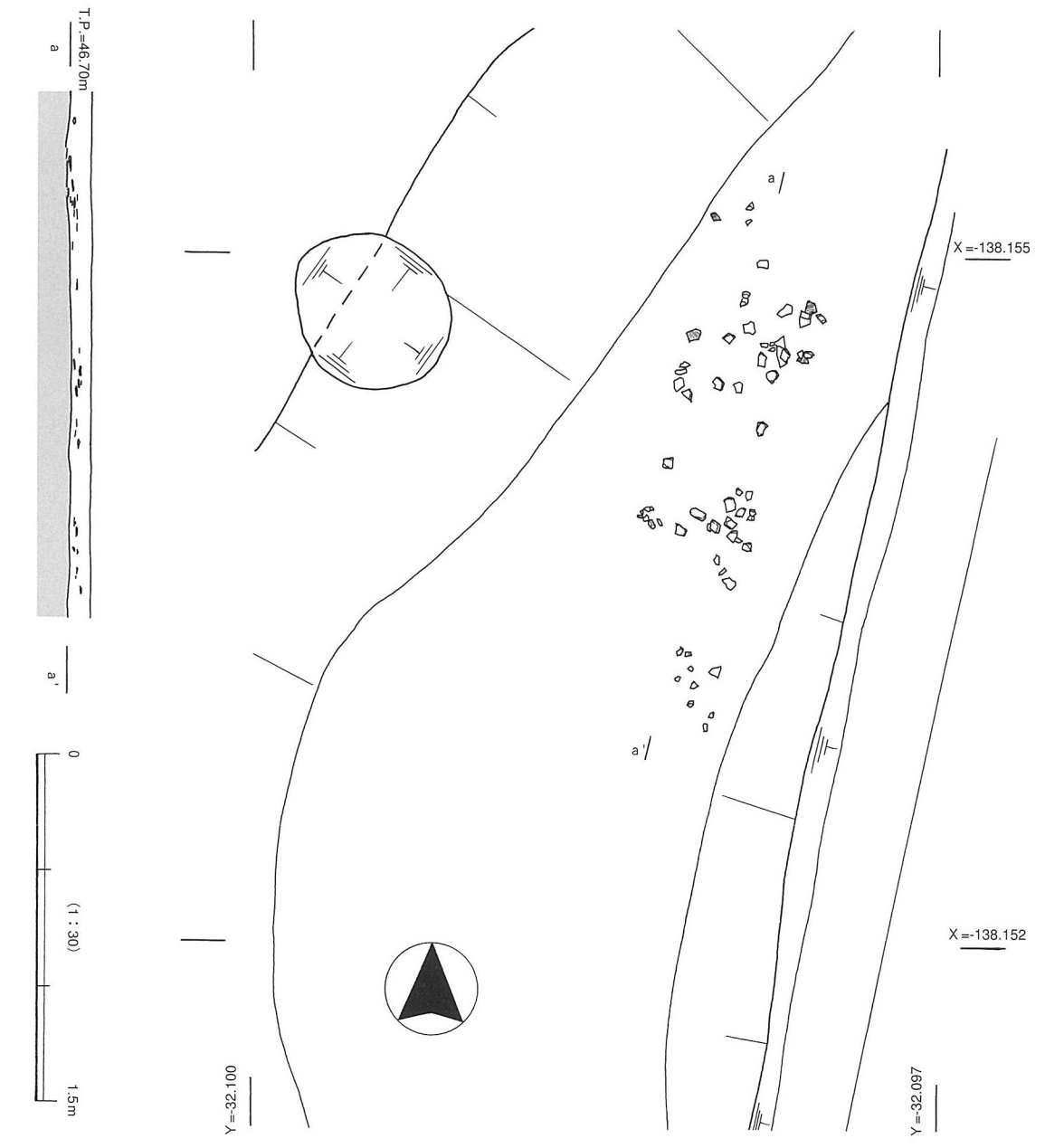


第35図 K 8号墳 平面図

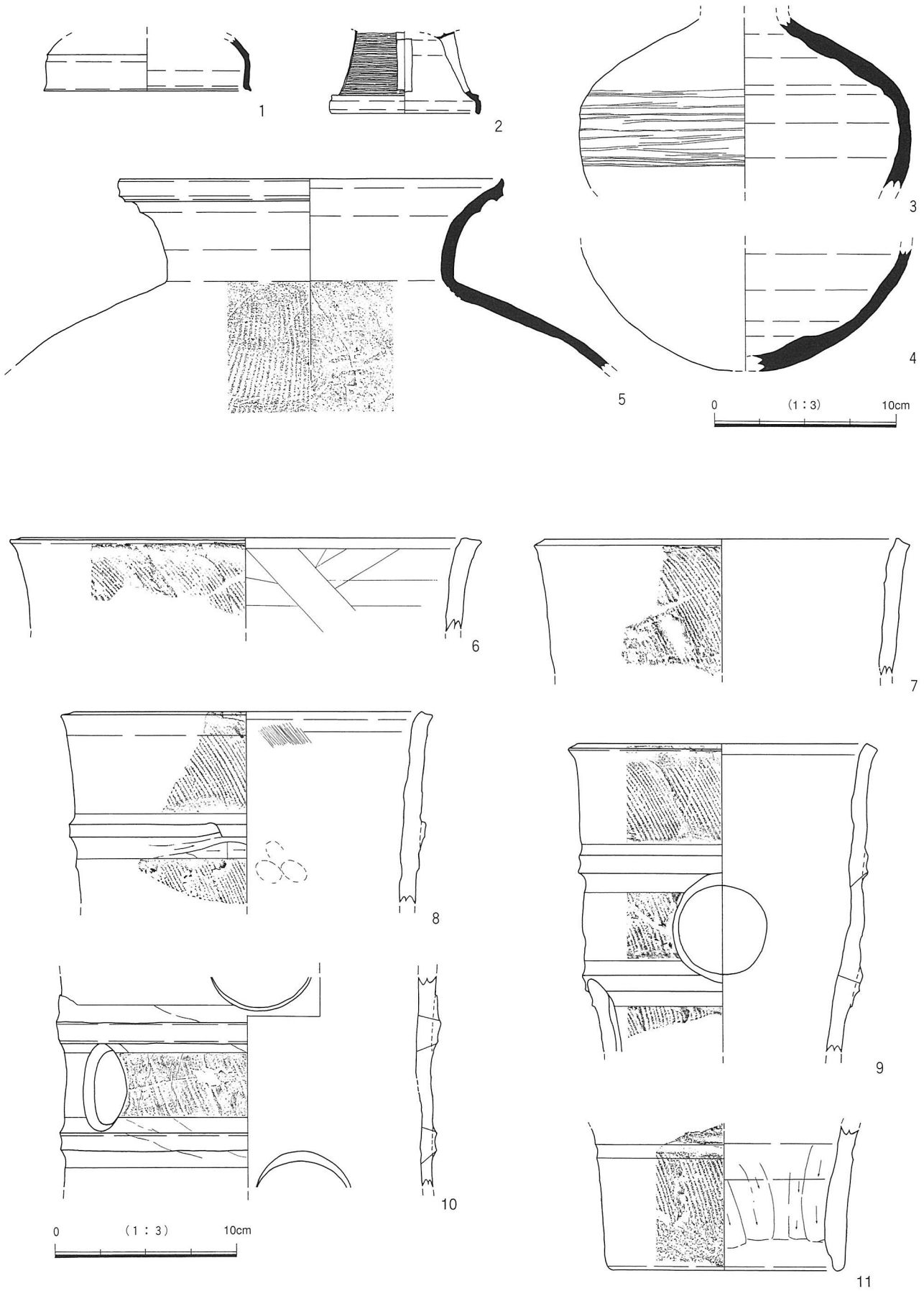


第36図 K 8号墳 周溝断面図

- K 8号墳周溝南西
1. 暗茶褐色極細砂混じりシルト しまり並 (埴輪片混じる)
 2. (一次崩壊土) 暗黄褐色粘質土 (径0.5~1mmの砂粒含む、赤褐色土斑点混じり) しまり強 粘性弱
 3. 暗黄褐色粘質土 (径0.5~1mmの砂粒含む、赤褐色土斑点混じり) しまり強 粘性並
- K 8号墳周溝南東
1. (一次崩壊土) 暗茶褐色極細砂混じりシルト しまり並 粘性弱
 2. 暗オリーブ褐色細砂混じりシルト しまり並 粘性並
 3. 暗オリーブ褐色砂質シルト (径0.5~1.5mmの砂粒含む) しまり並 粘性並
 4. 黄灰色細砂混じりシルト (淡黒褐色シルト斑点混じり) しまり強 粘性並
 5. 黄灰色極細砂混じり粘質土 (浅赤褐色シルト斑点混じり) しまり強 粘性並
 6. 灰黄色中砂混じり粘質土 (浅赤黄褐色粘質土斑点混じり) しまり並 粘性並



第37図 K 8号墳 周溝西側遺物出土状況図



第38図 K 8号墳 出土遺物

仕上げている。二段目以下には円形のスカシ孔を外側から穿っている。器面調整後に断面高0.2~0.3cmほどの粘土紐を貼付し、上・下端および上面をヨコナデし仕上げタガを作り出している。第38図11は底部にあたり、端部を内方にナデ込むようにし、内面は上から下方向に強めにナデて仕上げている。

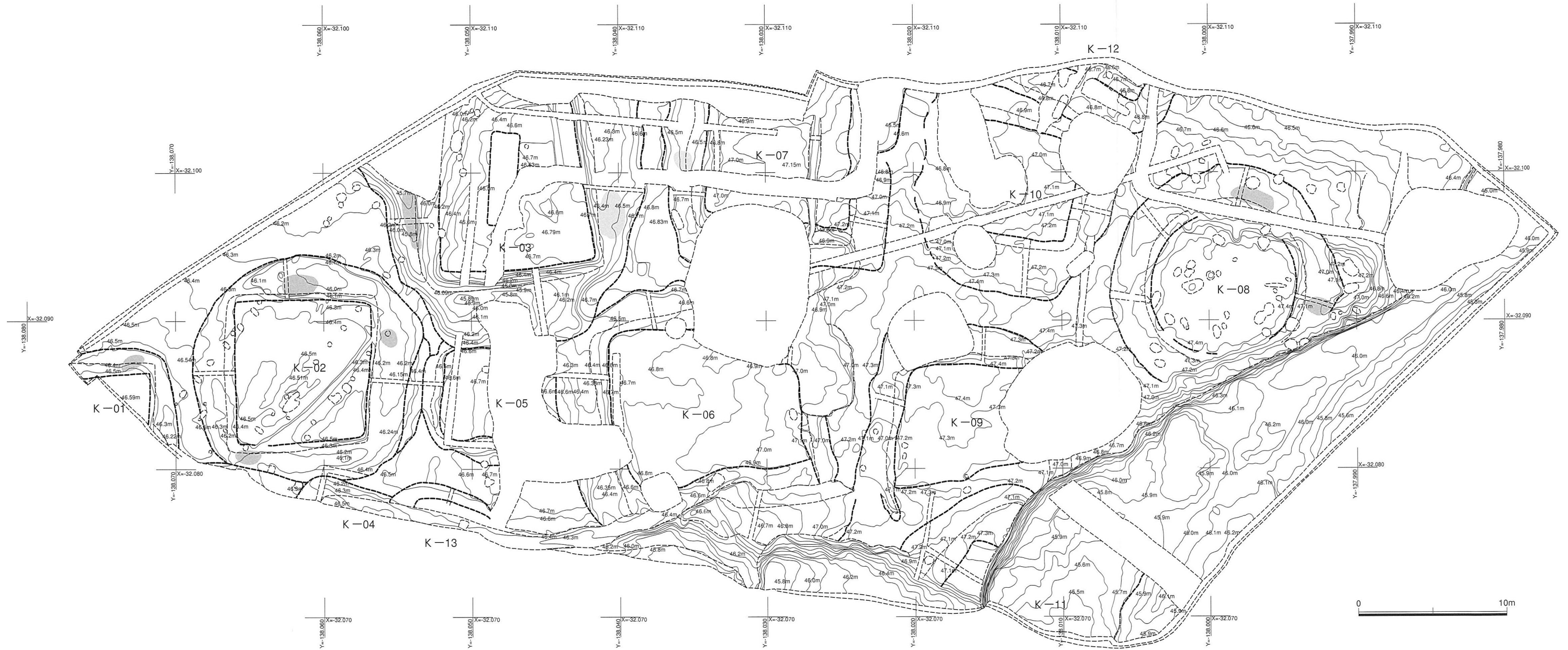
註 遺物は古墳の周溝埋土を中心として主に須恵器が出土しているほか、K 8号墳では埴輪が多量に出土し、K 1・K 3・K 5号墳では土師器片が出土している。土師器は小片で摩滅・風化が激しいためほとんど図化できなかった。個体として復元できるものを中心に図化し掲載した。器種および各部位の名称は『陶邑古窯址群Ⅰ』・『陶邑Ⅲ』を主に参考とし、整形・調整技法は上記文献を参考としながら工具や技法の名称を「ヘラ」・「ナデ」などカタカナで表記した。

第1表 遺物観察表(1)

掲載図No.	出土地点	器種	法量 (cm)			色調	
			口径	器高	底径	内面	外面
第7図1	K 1号墳周濠前面	高杯蓋		5.5	12.6	青灰色	灰褐色
第7図2	K 1号墳周溝前面	甕	13.5	(残) 3.4	-	灰黄色 釉: 暗緑灰色	暗青灰色 釉: 暗緑灰色
第12図1	K 2号墳周溝東辺	壺	21.2 (復元)	(残) 6.7		暗青灰色	青灰色 釉: 暗オリーブ色
第12図2	K 2号墳周溝北辺	甕	12.0	(残) 2.9		暗青灰色	黄褐色 釉: 暗緑灰色
第12図3	K 2号墳周溝西辺	甕	21.8 (復元)	(残) 11.1		暗青灰色	灰褐色
第13図1	K 2号墳周濠東辺	杯蓋		4.3	12.2	明青灰色	明青灰色
第13図2	K 2号墳周濠東辺	杯蓋		4.9	12.6	暗青灰色	天井: 明青灰色 暗青灰色
第13図3	K 2号墳周濠西辺	杯蓋		5.3	12.2	暗青灰色	青灰色
第13図4	K 2号墳周濠東辺	杯蓋		(残) 4.1	11.8 (復元)	暗青灰色	灰色
第13図5	K 2号墳周濠東辺	杯身	11.4 (復元)	(残) 3.6		赤みを帯びた 暗青灰色	上半: 灰色 下半: 暗青灰色
第13図6	K 2号墳周濠東辺	杯身	10.2 (復元)	(残) 3.0		灰白色 釉: 明緑灰色	灰白色 釉: 暗オリーブ色
第13図7	K 2号墳周濠東辺	杯身	(受口) 12.4 (復元)	(残) 3.9		暗青灰色	灰色
第13図8	K 2号墳周濠東辺	杯身	(受口) 13.0 (復元)	(残) 3.2		明赤灰色	灰褐色
第13図9	K 2号墳周濠東辺	杯身	(受口) 13.2 (復元)	(残) 3.0		暗青灰色	若干赤みを帯びた 暗青灰色
第13図10	K 2号墳	隙	11.8	10.5		青灰色	青灰色
第13図11	K 2号墳周溝南・東	器台(杯部)	29.4 (復元)	(残) 9.8	-	暗青灰色	暗青灰色
第13図12	K 2号墳	器台(脚部)		(残) 6.1		暗青灰色	青灰色
第13図13	K 2号墳	器台(脚部)		(残) 8.4		灰白色	青灰色
第13図14	K 2号墳	器台(脚部)		(残) 8.2		暗青灰色	暗青灰色
第13図15	K 2号墳周溝南・東	器台(脚部)		(残) 3.7	26.8		青灰色
第13図16	K 2号墳周溝南・東	器台(杯部)	41.2 (復元)	(残) 9.3	-	青灰色	青灰色
第19図1	K 3号墳周溝東辺	杯蓋		5.0	13.0	灰白色	灰白色
第19図2	K 3号墳周溝東辺	杯蓋		4.7	12.4	明青灰色	明青灰色~青灰色 釉: 暗オリーブ色
第19図3	K 3号墳周溝東辺	杯蓋		4.5	13.2	明青灰色	明青灰色
第19図4	K 3号墳周溝東辺	杯蓋		3.9	13.2 (復元)	明青灰色	青灰色 部分的に紫灰色
第19図5	K 3号墳周溝北	杯蓋		4.9	12.0 (復元)	暗青灰色	暗青灰色
第19図6	K 3号墳周溝東辺	杯身	11.0	5.0		灰白色	灰白色
第19図7	K 3号墳周溝東辺	杯身	10.6	5.0		灰白色	灰白色
第19図8	K 3号墳周溝東辺	杯身	11.4	5.0		灰白色	灰白色
第19図9	K 3号墳周溝東辺	杯身	10.2	4.7		暗青灰色	青灰色 釉: 明緑灰色
第19図10	K 3号墳	杯身	10.6	5.4		暗青灰色	青灰色
第19図11	K 3号墳	杯身	10.8 (復元)	4.5		青灰色	青灰色
第19図12	K 3号墳周溝東辺	杯身	9.8 (復元)	4.8		灰白色	灰白色 釉: 暗オリーブ色

第2表 遺物観察表(2)

掲載図No.	出土地点	器種	法量 (cm)			色調	
			口径	器高	底径	内面	外面
第19図13	K 3号墳周濠北辺	台付椀	-	(残) 3.1	8.0 (復元)	灰白色	暗青灰色
第19図14	K 3号墳	高杯 (脚部)	-	(残) 6.0	9.2	青灰色	暗青灰色
第19図15	K 3号墳周濠東辺	高杯	12.2	7.8	7.8	暗青灰色	暗青灰色 釉: 暗青灰色
第19図16	K 3号墳周濠西辺	台付杯	-	(残) 4.8	7.9	赤みを帯びた 青灰色	暗青灰色 脚部: 赤灰色
第19図17	K 3号墳周濠南辺	罍	11.6	10.7		暗青灰色 釉: 明緑灰色	暗赤灰色、口縁暗青 灰色、釉明緑灰色
第19図18	K 3号墳周濠北辺	短頸壺	8.4 (復元)	(残) 2.4	-	暗灰色	上半: 暗灰色 下半: 明青灰色
第19図19	K 3号墳周溝北辺	短頸壺		(残) 9.3		暗青灰色	上半: 灰白色 下半: 暗赤灰色
第19図20	K 3号墳周溝北辺	壺	15.8	(残) 10.0	-	明青灰色	青灰色
第19図21	K 3号墳周濠北辺	壺	20.4 (復元)	(残) 4.2	-	暗青灰色	暗灰褐色
第19図22	K 3号墳周濠北辺	壺	(頸部) 11.2 (復元)	(残) 3.1	-	灰色	暗青灰色
第20図 1	K 3号墳溜池掘削時?)	器台 (脚部)		(残) 3.7	-	暗青灰色	暗灰色
第20図 2	K 3号墳周濠南辺	器台 (脚部)		(残) 6.5	-	青灰色	暗青灰色
第20図 3	K 3号墳周溝南辺	土師器甕	(頸部) 9.6 (復元)	(残) 2.7	-	暗オリーブ色	暗オリーブ色~ 黄褐色
第20図 4	K 3号墳溜池掘削時?)	器台 (脚部)		(残) 5.4	25.0 (復元)	明青灰色	青灰色
第20図 5	K 3号墳周濠表採	埴輪	-	(残) 4.3	-	暗黄褐色	黄褐色
第24図 1	K 4号墳周溝西辺	杯身	(受口) 14.2 (復元)	(残) 3.0	-	暗青灰色	暗青灰色
第24図 2	K 5号墳周溝南辺	杯身	10.6	4.4		暗青灰色	上半: 青灰色 下半: 明青灰色
第24図 3	K 5号墳周溝東辺	壺	14.2 (復元)	(残) 3.7		暗青灰色	青灰色
第24図 4	K 6号墳周溝東辺	壺	(頸部) 12.4 (復元)	(残) 7.9	-	青灰色	灰色
第24図 5	K 6号墳周溝南辺	無蓋高杯		(残) 4.2		青灰色	青灰色
第24図 6	K 6号墳周溝南辺	甕	20.0 (復元)	(残) 5.2	-	青灰色	暗赤灰色
第24図 7	K 9号墳周溝東辺	杯身	11.2 (復元)	(残) 3.7	-	青灰色	青灰色~暗青灰色
第24図 8	K 9号墳周濠東辺	甕	21.2 (復元)	(残) 5.3	-	明青灰色~ 暗青灰色	暗青灰色
第24図 9	K 9号墳周溝東辺	甕	17.0 (復元)	(残) 4.8	-	暗赤褐色	オリーブ色
第24図10	K 10号墳周溝東辺	杯身	10.9 (復元)	(残) 2.8	-	青灰色	暗青灰色
第24図11	K 10号墳周溝東辺	壺	15.6 (復元)	(残) 5.0	-	明青灰色~灰色	暗青灰色~灰色
第24図12	K 11号墳周溝南辺	器台		(残) 5.7		暗青灰色	暗青灰色
第24図13	K 13号墳周溝西辺	高杯	-	(残) 6.4	10.0 (復元)	青灰色	青灰色
第38図 1	K 8号墳周溝南辺	杯or壺蓋	11.4 (復元)	(残) 2.9		明青灰色	青灰色
第38図 2	K 8号墳周溝南辺	高杯 (脚部)	-	(残) 4.5	8.0 (復元)	青灰色	暗青灰色
第38図 3	K 8号墳周溝東辺	長頸壺	(頸部) 5.0 (復元)	(残) 9.1		暗灰色 釉: 暗オリーブ色	暗灰色
第38図 4	K 8号墳周溝東辺	長頸壺		(残) 7.1		暗灰色 釉: 暗オリーブ色	暗灰色 釉: 暗オリーブ色
第38図 5	K 8号墳周溝北辺	甕	21.0 (復元)	(残) 10.3	-	明青灰色	灰褐色
第38図 6	K 8号墳周溝西	円筒埴輪	24.8 (復元)	(残) 5.1	-	暗赤褐色	暗橙色
第38図 7	K 8号墳周溝北	円筒埴輪	20.2 (復元)	(残) 7.5	-	明橙色	明黄褐色
第38図 8	K 8号墳周溝東辺	円筒埴輪	20.4 (復元)	(残) 10.6	-	暗赤褐色	暗赤褐色
第38図 9	K 8号墳周溝北	円筒埴輪	16.2 (復元)	(残) 17.7	-	暗橙色	黄褐色
第38図10	K 8号墳周溝西	円筒埴輪	(胴部) 20.4 (復元)	(残) 12.3	-	暗赤褐色	赤褐色
第38図11	K 8号墳周溝各辺	円筒埴輪	-	(残) 8.1	13.0 (復元)	暗赤褐色	暗赤褐色



第39図 調査区全体図

第3章 太秦古墳群の検討

第1節 太秦古墳群尾支群について

尾支群は、太秦古墳群の中心部とは谷をはさみ葉脈状に広がる支丘陵の一つに形成された一群である。古墳はわずかな広さの丘陵面の起伏を利用してまさしく重ね合わせに形成されている。しかし、出土の投棄物から考えると昭和40年代を中心に削平されたようで、それ以前には墳丘盛土は残存していたものとする。高塚（トノ山）古墳など数基が点々と現存するのみの太秦古墳群や、周辺の打上八十塚とも称された遺跡も同様の時期に削平されたものと推測する。

尾支群は①丘陵上に立地し墳丘規模が6～14mほどの方墳が群を成し、②葺石を欠くが埴輪・須恵器を持ち、③ベース面には埋葬施設の掘方が確認できず、④おそらく墳丘盛土内に埋葬施設が設けられていたという特徴を挙げることができる。これらは5世紀から6世紀に見られる小形方墳群に類似する特徴で、この古墳（群）がその時期のものであることが改めていえる。古墳は周溝の切りあい関係から築造順が以下のように復原できる。

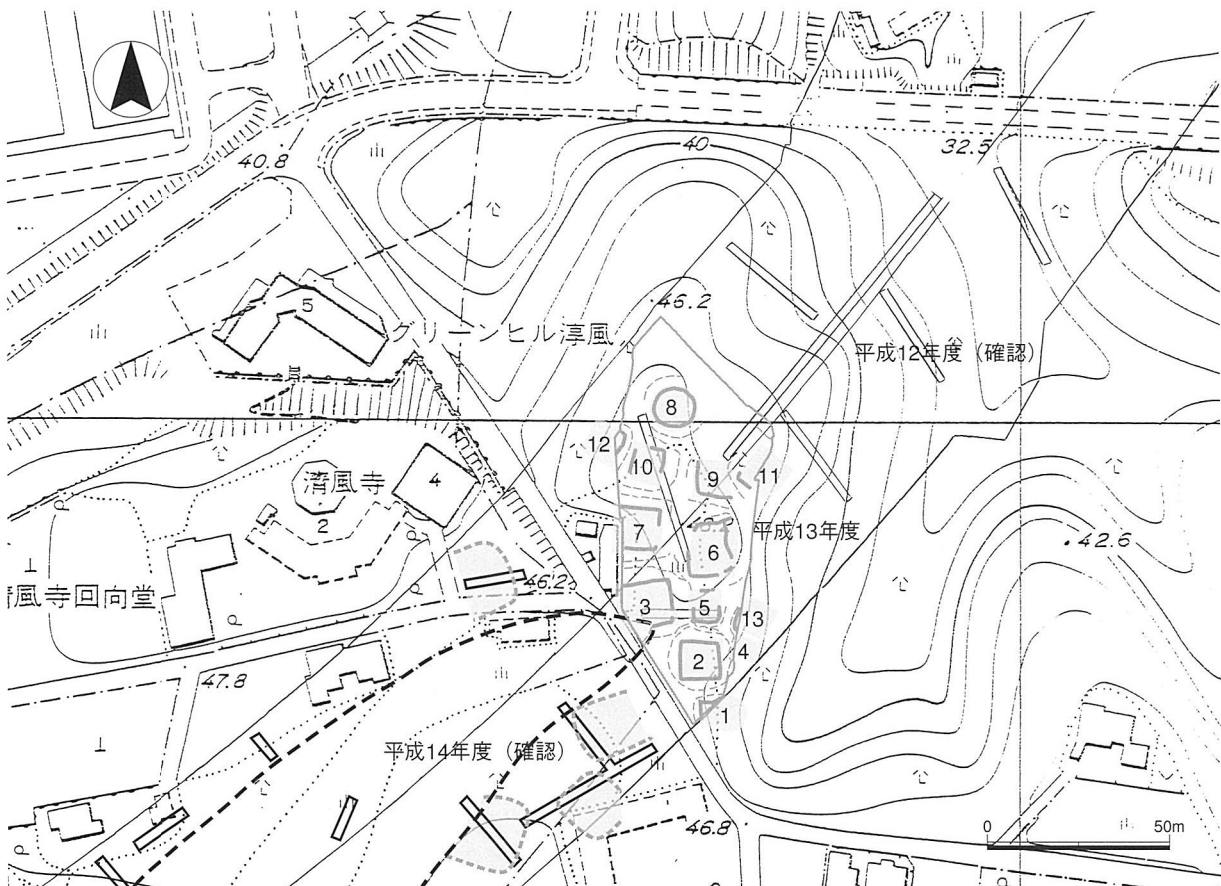
5号墳<2号墳<4号墳<13号墳

∩3号墳<6号墳

9号墳<11号墳

1号墳 8号墳 10号墳

尾支群内で主体部が検出できた古墳は3号墳のみで、この支群における埋葬形態や被葬者をうかがい



第40図 太秦古墳群尾支群分布図

知るのは困難である。3号墳の主軸は主体部と同方位の東西に取ることから、3号墳同様に東西に主軸をとる2号墳や南北に主軸をもつ6号墳・9号墳・10号墳がその方位に主体部をもっていたと推測できる。3号墳で検出した主体部では副葬品は確認できなかったが、太秦古墳群では直刀・金環・三環鈴・方格規矩文鏡・獸帯六鈴鏡・鉄鏃・銅鏃などの金属製品、勾玉・子持勾玉・紡錘車などの石製品が採集されている。主体部を検出できなかった古墳も、これらを副葬していた可能性を考えることができる。また、古墳の周溝堆積土内から出土した須恵器の観察からは2時期ほどの時期幅が観取できるものもあることから、古墳には時期を違えた複数主体がともなった可能性も指摘できる。

今回検出した尾支群は、太秦丘陵上に築かれた他の古墳との関係を交えた太秦古墳群の全容や周辺に残る渡来系氏族の地名との関係などを知る上で貴重な成果となる。

太秦古墳群尾支群の出土須恵器について

出土須恵器の観察視点

古墳の築造年代はいくつの特徴から5世紀中期後半から6世紀後期前半に当てはまるが、この時期の須恵器窯が寝屋川市内はもとより北河内地域では確認されておらず、当期の須恵器も僅少である。こうした現状は、周溝から出土した須恵器群の位置付けを困難にしている。そこで、陶邑窯跡群との比較を念頭に出土した須恵器をその成形技法に主眼を置いて検討することにした。

須恵器は各古墳の周溝に堆積する黒色系シルトを中心として杯身・蓋・罎・高杯・短頸壺・器台・甕の器種が出土している。古墳は周溝を切り合うものもありその前後関係が確認できる。さらに周溝堆積土はその質から墳丘盛土の崩壊土と考えることができ、崩壊過程に上下2層の堆積時間差が確認できる。各古墳で出土し個体が多数あり古墳の前後関係を検証するうえで都合が良いことから杯・壺・甕を中心に検討したい。この2器種は、堺・和泉・大阪狭山市陶邑窯跡群における編年作業など研究が発達している点からも他遺跡の出土資料との情報交換がしやすい。

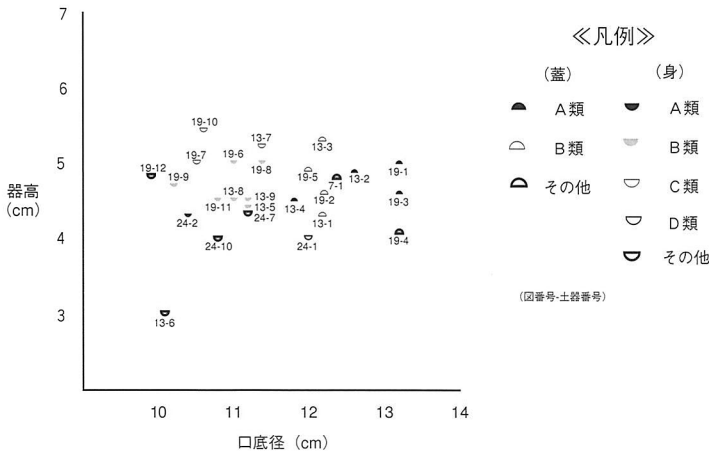
各須恵器は第2章第2節 調査成果でその所見を述べているので、ここではそれを基に成形技法の類似性から類型化を試みた。

杯身・蓋

口・底径と器高が算出できる身15個体（内1個体は平成13年度確認調査時に出土）、蓋10個体（内2個体は有蓋高杯の蓋）を対象とし、天井（底）部と口端部の成形・ケズリの施行範囲などの観察から蓋で2大別3細分、身で4大別6細分を提示したい。

まず蓋については、底端面の内傾する体部高が2.7cm程、天井部は平坦気味で頂部を中心として稜部へ向けた間3/4程に回転ケズリを施すA類（第13図2・4、第19図1・3）は、底径が11.7～13.2cmで、稜部は外方に鋭く伸びるもの（i種：第13図2・4）と短く鈍いもの（ii種：第19図1・3）が観取できる。B類は（第13図1・3、第19図2・5）は底端面の内傾する体部高が2.2cm程、天井部は丸みを帯び頂部を中心として稜部へ向けた間1/2程に回転ケズリを施している。底径は12～12.5cmで、稜部は短く、直下が沈線様に浅い溝を成している。

A i類は2号墳から、A ii類は3号墳からそれぞれ中心的に成る一群であり、B類は2・3号墳の両方から成っている。体部高や天井部へのケズリの施行範囲などからしてA類とB類の差異を時期差として捉えて相違なからう。



第41図 太秦古墳群尾支群 杯身・蓋の径高指数

次に身については、口端面がやや内傾気味のたちあがり高が1.8cm程、底部は平坦面をもって中心から受部へ向けの間3/4程に回転ケズリを施すA類（第24図2）は口径が10.5cmを指向する。B類（第13図5・8・9、第19図6・8・9・11）は口端面の内傾するたちあがり高が1.8cm程、底部はやや丸みを帯びて中心から受部へ向けの間3/4程に回転ケズリを施しているもの（i種：第19図6・8）、1/3程のもの（ii種：第19図9・11）、1/2程のもの（iii種：第13図5・8・9）の3種が観取できる。口径は10.3~11.5cmを指向する。C類（第13図7、第19図7・10）は口端面の内傾するたちあがり高が1.4cm程、底部は膨れ気味で中心から受部へ向けての間1/3~1/2程に回転ケズリを施し、口径は10.5~11.5cmを指向する。D類（第24図1）に類するものは口縁部を欠損しているため端面形状・たちあがり高は不定だが、たちあがりを受部との接合具合を観察する限りでは内傾の度合いが高そうである。底部は扁平で中心から受部へ向けての間1/2弱に回転ケズリを施している。

B i・ii類は3号墳から、B iii類は2号墳から、C類は2・3号墳の両方からの出土須恵器でそれぞれ一群を成している。また、A類は5号墳の、D類は4号墳の出土須恵器がそれぞれ該当する。

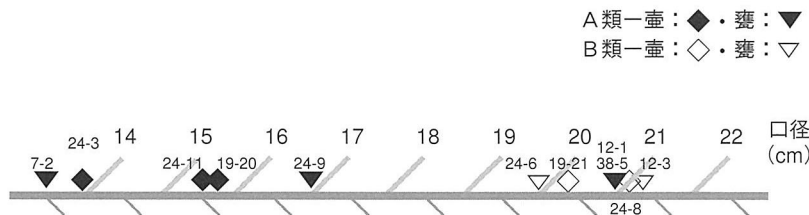
たちあがりの高さや内傾の度合い、また底部へのケズリの施行範囲などからしてA類を最古として以降はB類→C類→D類と時間的序列を想定できる。これは5号墳→2・3号墳という周溝の切り合い関係からも保証できよう。また、陶邑窯跡群出土須恵器の変遷から考えてもこの差異が時期差を表徴していることはほぼ間違いないだろう。

各杯蓋・身の径高指数は、検討した個体数にも起因するのだろうが各類型でまともには認めがたい（第41図）。2号墳と3号墳から出土している杯蓋・身には以上の検討から2時期を内包しており、古墳に主体部の追加が想定できる。

壺・甕

口頸部が残る11個体と、タタキ目の観察に任意抽出した体部片を対象とした。

口縁端部の形状には、直立するA類（第12図1、第19図20、第24図3・9・11、第38図5）-外面に強いヨコナデを施すことで隆起線を作成するなどしている、外下方に屈曲させるB類（第7図2、第12図3、第19図21、第24図6・8）の2つに大別でき、内面をナデている（i種）かナデない（ii種）かによる細分が可能である。頸部は、ヨコナデし器面を整えたのちにクシ描の波状文を描く、ユビ又はハ



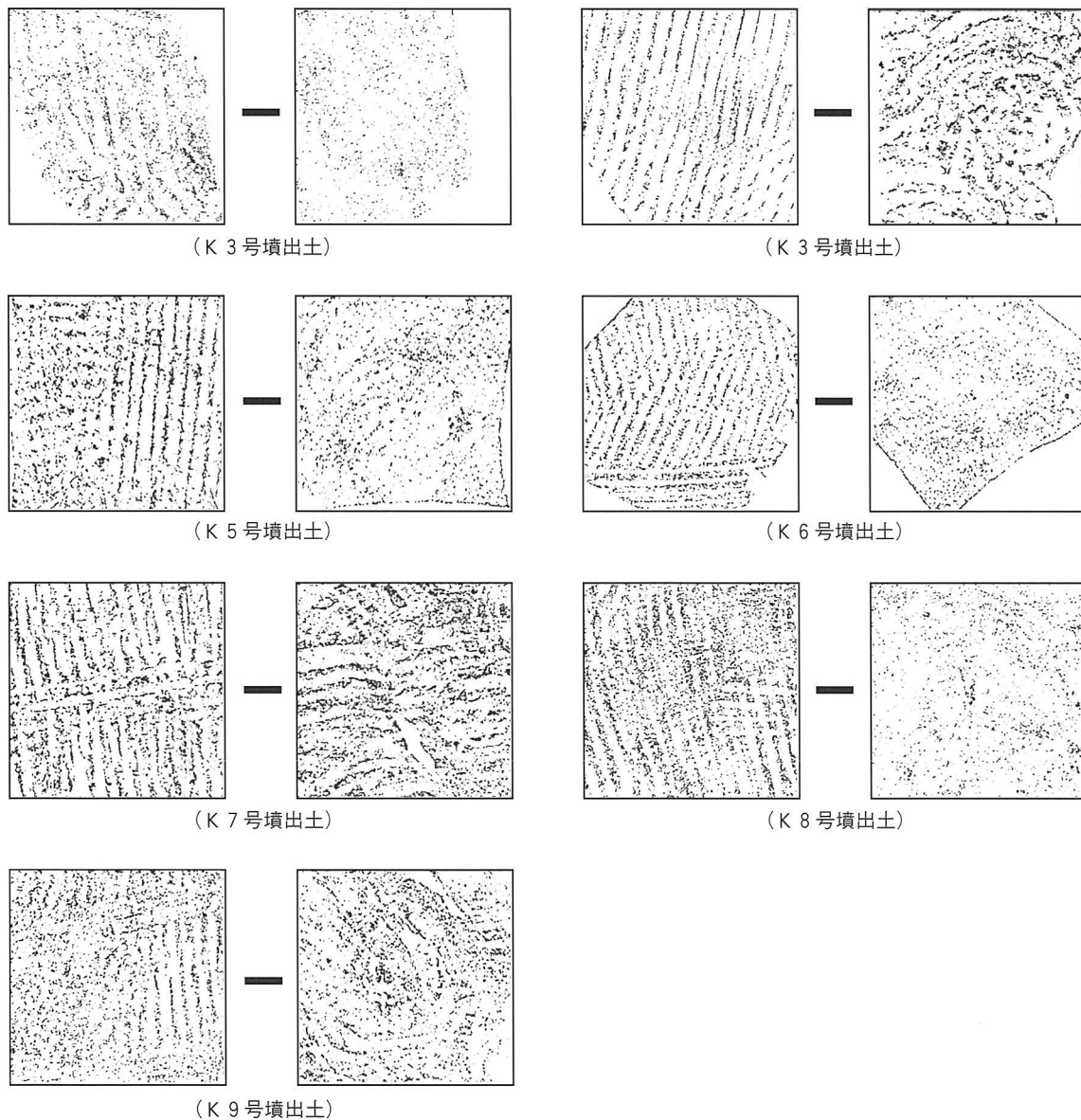
第42図 須恵器壺・甕の口径分布

ケでヨコナデする、クシ状具でカキ目を施す、ものがある。A類をとるものの口径は13.5~17cmに分布がまとまり、B類は20cm以上でまとまることから、口縁端部の差異は壺・甕という器種内の大形あるいは中・小形によるものといえよう（第42図）。

次に体部の成形・調整を観察すると、器形を整える1次調整として外面は下方から上方に向けた縦位のタタキを施し、頸胴部を中心に2次調整としてハケでヨコナデを施行している。アテ具の使い方を観察すると、胴部最上部ではアテ具の縁辺を用いて横方向に、胴部上部は縁辺と中心を併用して縦方向にそれぞれ調整タタキを施していることがわかる。胴部最上部を中心にタタキの施行後の2次調整にユビやハケでナデてアテ具痕を磨り消している。

用いられているタタキ具とアテ具の種類は凡そ第43図に挙げた通りで、タタキ目はタタキ具の機能面の木目に直行して平行目になるよう溝が彫られており、溝の彫りが浅いものは木目と直行することで格子目状にみえるものも若干ある。アテ具は同心円が主だが、無文のもの（第24図4）もある。

口縁部端部の形状は器形差とも取れるが端部内面のナデ施行を含めて見ると大きくはA類からB類への変化として、この差異が時期差を表していると考えてよいだろう。



第43図 須恵器壺・甕のタタキ具とアテ具

高杯・罎・器台

高杯は図化した4個体のほかに脚部片で2個体分の計6個体がある。脚部のみで杯部は欠損している。スカシ孔は脚部の三方に長方形に開けるものが1個体(第19図14)、四方へ長方形に開けるものが2個体(第24図13、第38図2)、円形が1個体である。脚端部は内面をナデながら屈曲を作り出すのが3個体(第19図14・15、第38図2)、肥厚するのが1個体(第24図13)である。肥厚するものは他の3個体に比べ脚部高が高い特徴もあって、この個体が出土した古墳の築造順位や形態を型式学的にみても他の個体より新出とみて異論はないだろう。

器台は少なくとも5個体(第13図11~16、第20図1~3、第24図12)あり、杯部は底部全体に平行目タタキを施し、脚部は杯部との接合面にキザミを施している。

罎は図化した2個体(第13図10、第19図17)のほかに7号墳から少なくとも1個体の計3個体があり、底部の成形に甕の成形技法でもある内部に無文アテ具を添え平行目タタキを施す「タタキ出し」を行うもの、外面にケズリを施すものがある。

太秦古墳群尾支群須恵器の生産体制

以上、成形技法を中心に各器種を観察し細別を試みてきたが、ここで成形技法の共通性があることに気付く。壺・甕の口端部の成形技法と高杯の脚端部の成形技法に共通性が看取できるのだが、それには同時性ばかりか習得している技法を駆使し器種を作り分けていた製作風景をも想起させる。

<須恵器工人たちのもっていた設計図>

(用いた工具)	(用いた成形・調整技法)	(製作した器種)
ユビ(・布・皮)	-ナデ	-杯(身・蓋)、罎、高杯、器台、壺、甕
板(ヘラ・ハケ) 状具	-ナデ、ケズリ	-杯(身・蓋)、罎、高杯、器台、壺、甕
タタキ具・アテ具	-タタキ	- 罎、器台、壺、甕
クシ状具	-カキ(クシ描、カキ目)	- 罎、高杯、器台、壺、甕

出土須恵器群の変遷(案)

ここまでの検討をふまえ、ここで陶器窯跡群出土の須恵器と対比を交えた出土須恵器の時間的序列をまとめた。蓋A i類と身A iii類はTK23型式と、蓋B類と身B類はTK47型式とそれぞれ諸属性に類似を指摘できよう。出土する古墳の築造順位と重ね尾支群における出土須恵器群の諸変遷を以下のように提示したい。

(I期)		(II期)		(III期)
<古>	<新>	<古>	<新>	
5号墳C	2号墳 →	2号墳	C 4号墳	C 13号墳
	第1次主体部	第2次主体部		
	3号墳 →	3号墳	C 6号墳	
	周溝下層	周溝上層		
	9号墳	C 11号墳		
	1号墳		8号墳・10号墳	
(TK23)	-	(TK47)	-	(MT15)

(Ⅰ期) 周溝の切り合いや杯蓋・身のA類と他器種は成形技法の差異性・類似性を指標として古相と新相に細分した。5号墳出土の一群を最古に捉え(古相)、次いで2号墳第1次主体部・3号墳周溝下層・9号墳出土・1号墳出土(新相)がこれにあたる。

(Ⅱ期) Ⅰ期と同じく、周溝の切り合いや杯蓋・身はB類と他器種は技法の差異性・類似性を指標として古相と新相に細分した。2号墳第2次主体部・3号墳周溝上層・11号墳出土(古相)と4号墳出土・6号墳出土・8号墳出土・10号墳出土(新相)がこれにあたる。

(Ⅲ期) 13号墳出土・7号墳出土の須恵器群がこれにあたる。13号墳から出土している高杯や図示していないが7号墳から出土している竈には、それぞれ長頸・脚化が観取できる点から陶邑窯跡群MT15と併行関係を想定できる。このことから、7号墳はⅠ期(新相)とⅢ期の2時期を含んでいる可能性がある。

太秦古墳群の尾支群から出土している須恵器は、杯蓋・身を中心として陶邑窯跡群出土の須恵器との類似性を指摘できながらも併行関係を想定するものとの違いも看取できる資料、在地の土器群といえよう。今回は検討を加えていない周辺遺跡の須恵器を同様の視点でもってその製作痕跡を検討するならば、窯跡は確認されていないがあるいは同工人集団による須恵器を追って窯および生産体制の復原が可能となろう。また古墳群や須恵器の時期からして、菱田哲郎氏はじめが指摘する陶邑工人の移動、地方窯の出現が考えられる時期でもあり、太秦古墳群周辺にもこの動きが波及してきたと考えることができよう。この時期は陶邑では簡略化が目立ち始める時期でもありながら、尾支群から出土している資料にはタタキ痕のスリ消しを行うものも多く見て取れるなどの差異が指摘できる。太秦・秦田といった渡来系氏族をうかがわせる地名が残っていることから須恵器の製作集団および古墳被葬者像に渡来系氏族も視野にいれた考えが必要となる興味深い資料であるといえる。(松尾)

〈参考文献〉

- 北野博司2001「須恵器の成形技法」『つほとかめのつくり方』『北陸古代土器研究』第9号北陸古代土器研究会
田辺昭三1966『陶邑古窯址群』I平安学園考古学クラブ
1981『須恵器大成』角川書店
中村 浩1980「第6章 和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ『大阪府文化財調査報告書』第30輯 財団法人大阪文化財センター
菱田哲郎1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会
望月精司2001「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」『つほとかめのつくり方』『北陸古代土器研究』第9号北陸古代土器研究会

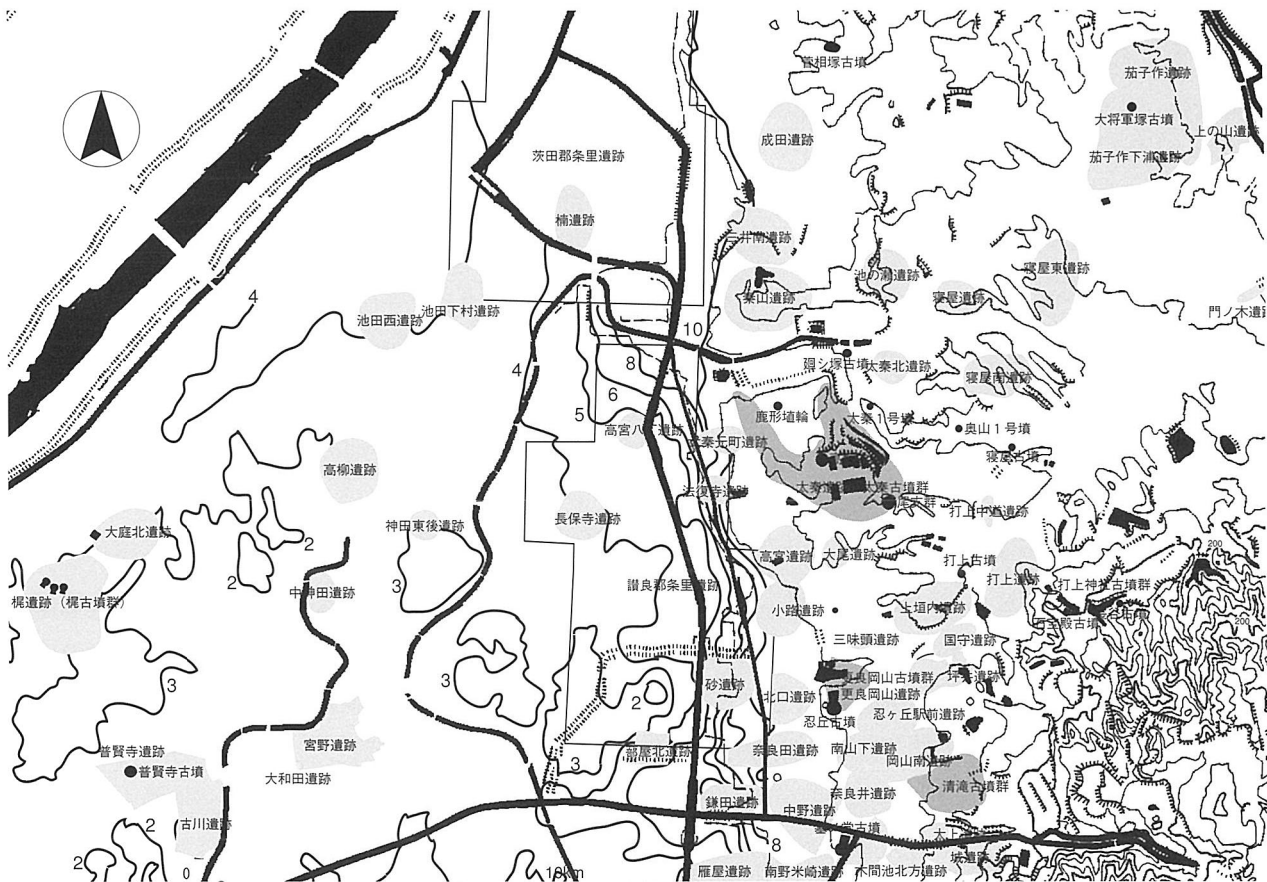
第2節 打上川・讃良川流域の古墳動向と太秦古墳群

はじめに

丘陵西縁辺上に位置する太秦古墳群は、打上川と讃良川に挟まれる。この両河川は下流で寝屋川となり南下した後、西に向かい大阪湾にそそぐ。河内平野はそこで分断され、南北に分かれる。第1章第2節で触れたように、今のところ、5世紀後半から6世紀前半の古墳は南下する寝屋川の両岸に多い傾向がある。本調査の成果からもそれは例外ではなかった。これは寝屋川中流域（ここでは下流域を南流する地帯、上流域を打上川・讃良川上流地帯とする）が、5世紀には同じ北河内の中でも、穂谷川下流、天野川上流を中心とした北側の直接淀川にそそぐ地域とは別に、より河内平野と親密性をもつことになる（第46図）。

北河内の平野部及びその周辺の古墳

河内平野の中流域西岸の平野部では西から見ると、守口市大庭北遺跡で一辺10mの方墳、同市梶2号墳では全長30mの帆立貝式古墳があり、その周囲に古墳が存在することが分かっている。南の門真市普賢寺古墳は径29mの円墳である。いずれも6世紀前半前後のものであるが、主たる造墓活動は5世紀中葉からはじまっていそうである。東岸の丘陵縁辺下では4世紀の四条畷市忍岡古墳に近接して、5世紀後半、全長27mの帆立貝式古墳を中心とし、円墳・方墳などで構成される更良岡山古墳群。やや北側に



第44図 弥生・古墳時代遺跡と古墳

寝屋川市三味頭遺跡で一辺15mの方墳も検出されており、讃良川の両岸に集中する（第1・44図）。

こうした平野部では、全体に小規模ながらも、帆立貝式、円、方というやや不均質な墳丘が群をなしていることが分かり、記述形態順に規模の大小と埴輪を樹立するか否かといった階層的な優劣が整っている。これらはおそらく、5～10数基を単位として群を構成する形態のものである。

平野部の古墳と太秦古墳群

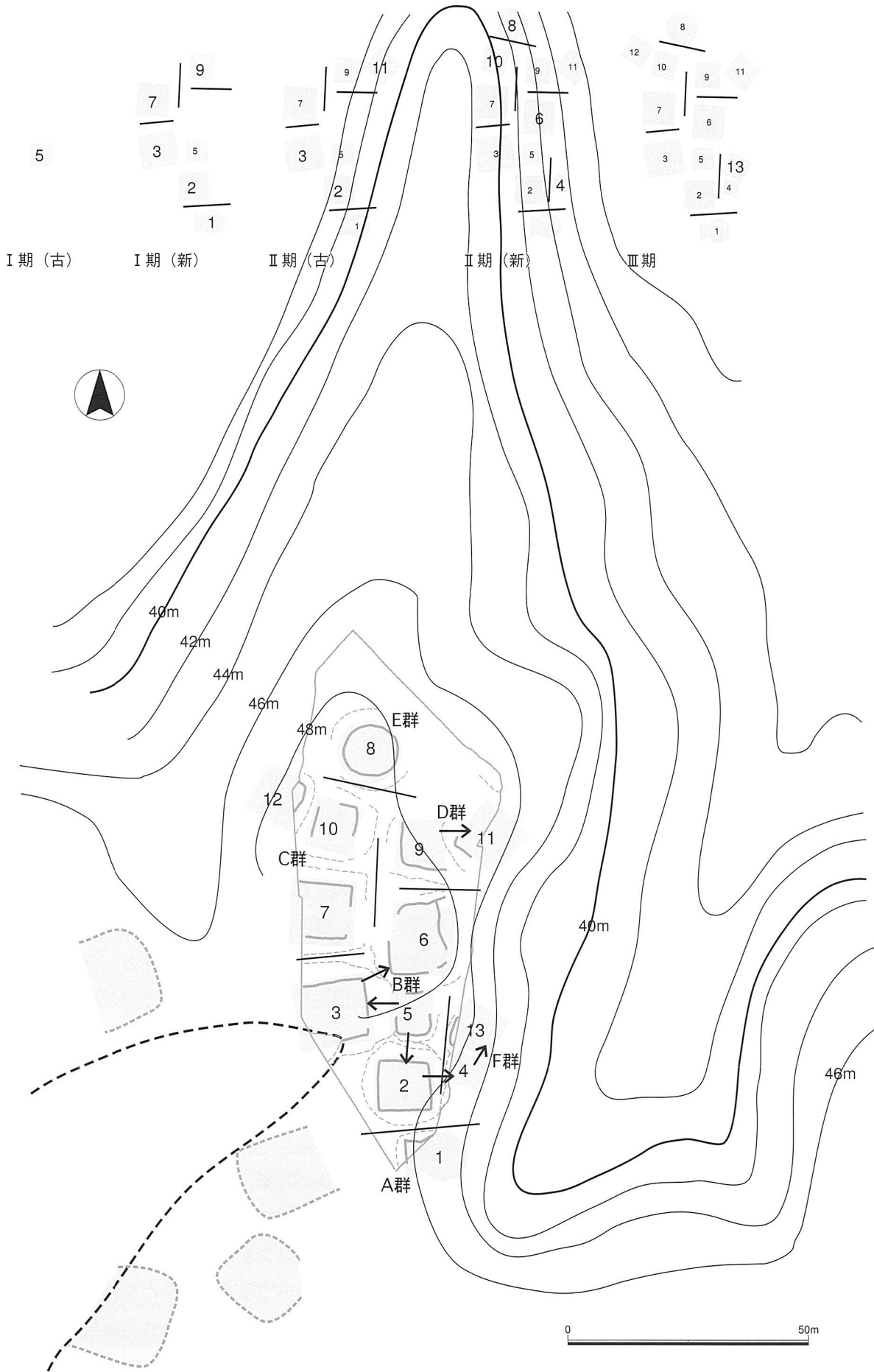
この状況を通して照らし合わせ、今回の調査成果とともに太秦古墳群を比較すると、群内において盟主的な高塚古墳は、径37mの造出しの付く円墳であり、埴輪を樹立し、確かに優勢なものであったことを示す。一方、本調査区の尾支群ではそれと相反して劣勢さを示す。讃良川のものとは比べても、おおむね7mと10m前後のものに分かれ、多少の不均質は存在するが全体に小規模であり、しかも密集率が高く、埴輪を樹立していたのは円墳である8号墳のみである。

つまり、尾支群は基本的には小形方墳を主として劣勢なグループとして位置づけられる。しかし、傾向として他の墳形もまじり、均質とは言い切れない内容とも言える。それぞれの群が大小にかかわらず、相対的にそれぞれの群に北河内地域における古墳階層傾向の縮図が備わっているようだ。ただし、尾支群では墳形の違いがその規模には反映されていないことも特徴である。

太秦古墳群尾支群の特性

本調査では面的に調査することができたことから、これまでにない群形成過程の一端を知ることができ、全体に削平を受け、グルーピングが難しい。あえて分けると、周溝の切り合いの距離から7群になる。A群は1号墳のみしか知り得ない。地形から考えると、あまり派生はしそうにない。ありえるとしたら西方にのびる。B群は2・3・5・6号墳、C群は7・10・12号墳、D群は9・11号墳、E群は8号墳のみであるが、北側に小規模なものが展開する可能性を残す。F群は10・13号墳である。この中で、前節のごとく、周溝の切り合いに明瞭なものがB群である。これを見ると、まず5号墳が築造され、その周囲に3・2・6号墳とうめられていく様子が分かる。このことからすれば、この尾支群は尾根の結末点にあたる頂部に、まず1・5・7・9号墳を築くことで5世紀第3四半期に墓域決定され、A・B・C群が決定づけられる。その後、B群は西半周囲へ、C群は北側へ展開し、尾根稜線をうめることになる。その間、もしくはその後、地形的には斜面によりかかる8号墳のE群、4号墳のF群が墓域設定されたものと思われる（第45図）。

尾支群は14年度の確認調査で西方にのび、少なくとも20基は造られていたことが想像できる。この地点の調査が実施されれば、より広域的な形成過程が分かるであろう。ひとまず、この造墓活動は2,600m²に13基、1基当たり200m²以下の集約的な密度であり、墓域配分の際の三世代を越えているのは明らかである。この密集率を消極的に想定しても、太秦古墳群はその分布範囲から200基は下らず、造墓基数からすれば河内平野南半部の大阪市長原古墳群に比肩する規模で展開していた可能性が高い。また、同じく方墳、木棺直葬、須恵器と埴輪を特徴とするが、埴輪の生産に関しては太秦古墳群内で完結すると考えられるものの、畿内各地のものとは比べると、埴輪造営の組織力としてはかなり微弱である。



第45図 太秦古墳群尾支群古墳変遷図

太秦古墳群の範囲

さて、この5世紀後半から6世紀前半につくられた太秦古墳群の範囲であるが、それを詳しく確認するため周囲の状況を記述する。まず、この古墳群が立地する尾根上の河内平野に面する場所については、寝屋川市大尾遺跡の調査成果からすれば、弥生時代中期の方形周溝墓群が存在し、それが削平されるのは早くとも飛鳥時代である。一方、寝屋川市高宮遺跡でも方形周溝墓が存在する。また、その西側の扇状地には古墳時代初頭の前方後方形や方形の周溝墓が寝屋川市小路遺跡で平成14年度に検出されている。先にも紹介したように南側の讃良川沿いは異なった性格の古墳群が展開する。これらのことから、現在の尾根上の範囲を大きくは逸脱しない。

そうであれば、残るは北東側である。北側は打上川を隔てて寝屋川市寝屋古墳が大谷に存在する。北河内では最大級の長さ10mをこえる無袖の横穴式石室をもつ古墳である。径22mの円墳で、周溝をもつ。長谷古墳は交野市星田に所在し、長さ2.2mの石槨気味の横穴式石室をもつ円墳で、鉄釘・人骨が出土する。また、寝屋川公園に西接して、本センターの調査で平成14年度に新規発見した奥山1号墳も横穴式石室の可能性が高い。そのすぐ横の公園内に石室石材と思われる花崗岩が散見される。太秦古墳群の東にある打上古墳もまた石材が散乱する。さらに、東方の打上川上流域には終末期古墳である石室殿古墳がある。長さ3mの花崗岩の床石の上に、同じく花崗岩を削り抜いた石をあわせた横口式石槨をもつ古墳であり、打上に所在する（第1・2・44図）。この範囲は横穴系が主体であり、太秦古墳群の特性にあたらぬ。

寝屋川上流域の丘陵・台地上の古墳

このことから、造墓活動は平野よりからたち川よりに移動し、打上川を中心に展開するようになる。主に打上川中流域右岸で横穴式石室墳の群集傾向が見られ、太秦古墳群で見た特徴と異なることが分かり、北東側の範囲もまた限定できそうである。一方、横穴式石室墳の変化は、太秦古墳群の丘陵一帯の造墓活動が終息し、しかも6世紀中葉から畿内的に展開する横穴式石室を主とする群集墳、その石材の調達がそうした河川を媒体にしたと考えられ、それを現実化する広域的なネットワークと墓域配分のシステムの中に組み込まれていく姿がこの北河内という地域にも存在し、確認できそうである。そして、このことから推測すれば打上川の石室群の被葬者のエリアは、淀川左岸と寝屋川下流域及び右岸を巻き込んだ広範なものとなる。

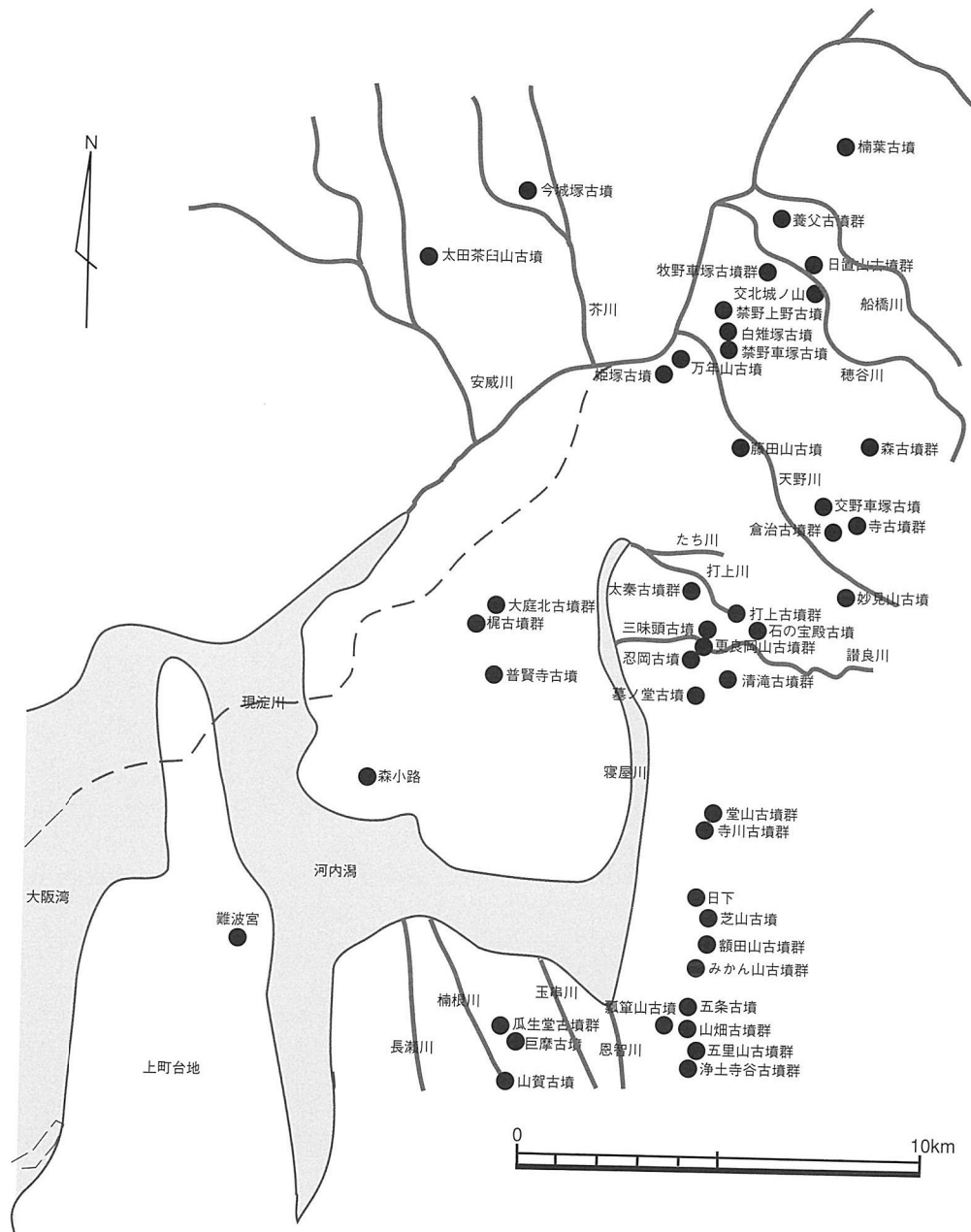
おわりに

以上のことから、全体的には弥生時代末頃は平野部から丘陵縁辺の流域、古墳時代はじめには微高地上・丘陵端頂部、そして丘陵・台地中腹へと古墳分布の移動現象が如実に見て取れる。そして、それは寝屋川を中軸として北河内西半の平野部全体が推移していたことの表れでもある。さらに、そうした範囲を基盤として5世紀後半に特徴的な小形方墳群の展開が北河内においても確認できた意義は大きい。

今回の調査で、太秦古墳群の動向の見通しは立ったものの、その情報がすでに行われた開発によって壊滅的に閉ざされる可能性もある危機的な状況にあることは心にとめておきたい。（一瀬）

《参考文献》

- 守口市教育委員会1991 『梶遺跡 市営住宅梶第一団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査』
- 門真市教育委員会2000 『普賢寺古墳 門真市石原東・幸福北土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 門真市埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集
- 上林史郎1993 「更良岡山遺跡の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第28回）資料』
- 寝屋川市・寝屋川市教育委員会1999 『茨田堤と茨田屯倉 ～古代の茨田郡を考える～歴史シンポジウム資料』
- 四条畷市立歴史民俗資料館2002 『みどりの風と古墳』 -忍岡古墳石室覆屋再建を記念して-
- (財)大阪府文化財センター2002 『小路・高宮・讃良郡条里 遺跡の調査』平成14年度 現地説明会
- (財)大阪府文化財センター2003 『大尾遺跡』



第46図 北河内主要古墳分布図

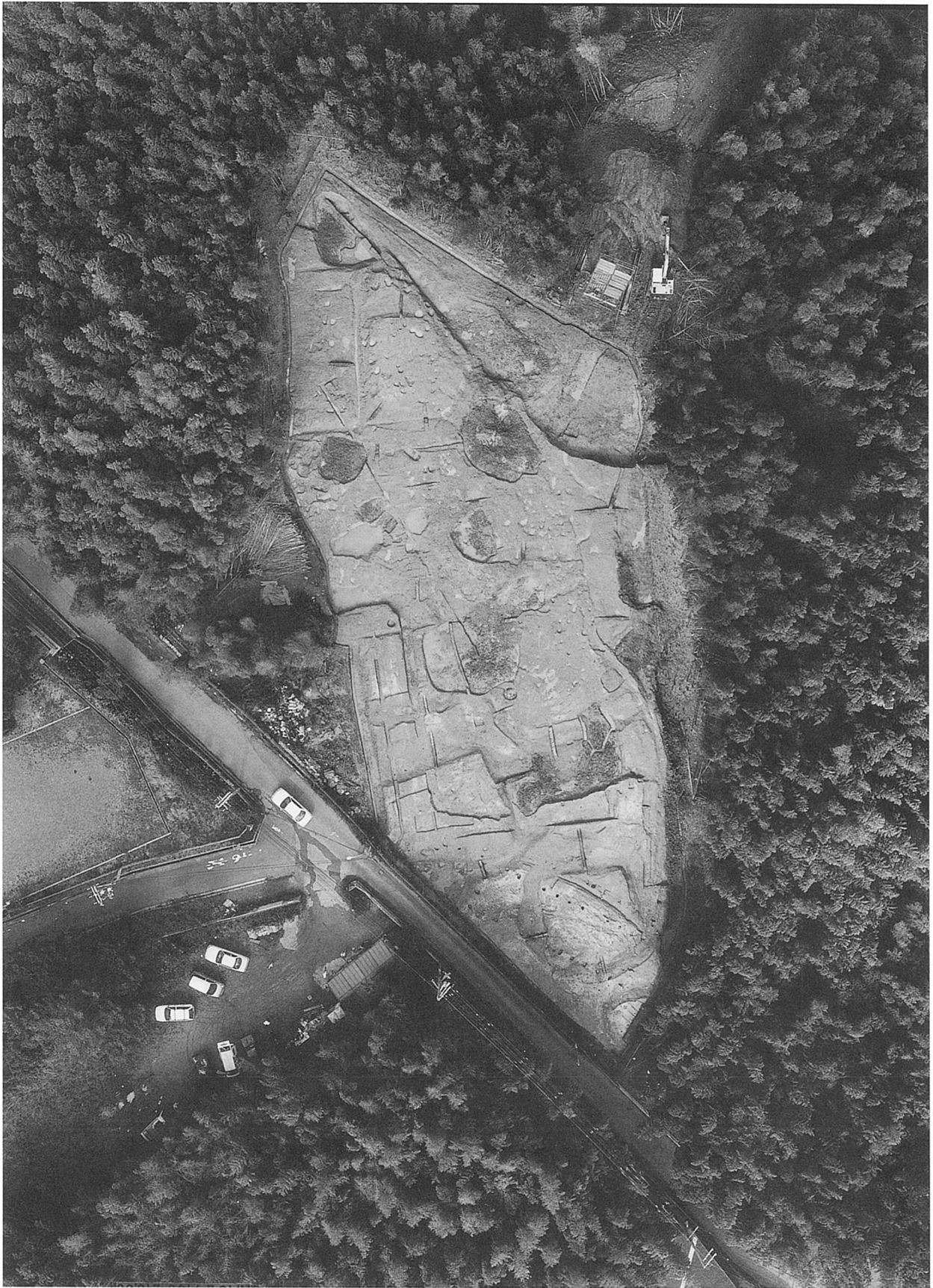
写真図版



写真1 太秦古墳群 全景（南西から）



写真2 太秦古墳群位置写真



航空写真 垂直（上が北）



写真1 航空写真 斜め全景 (東から)



写真2 航空写真 斜め全景 (南から)

写真図版 4



写真 1
太秦古墳群尾支群 全景 1 (南から)



写真 2
太秦古墳群尾支群 全景 2 (北から)



写真 3
太秦古墳群尾支群 全景 3 (南から)



写真1 K1号墳 検出状況（北から）



写真2
K1号墳 前方部前面周溝断面（南から）

写真3
K1号墳 前方部前面西側周溝
遺物出土状況（南から）

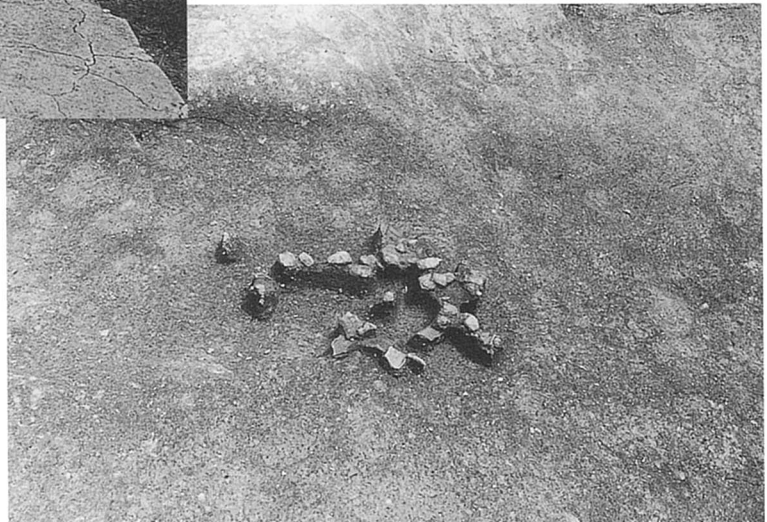




写真1 K2号墳 検出状況（南から）



写真2 K2号墳 周溝東辺断面（南から）



写真3 K2号墳 周溝南辺断面（西から）



写真4 K2号墳 周溝北辺断面（西から）



写真1 K2号墳 完掘状況（南から）

写真2 K2号墳 周溝西辺遺物出土状況（北から）



写真3 K2号墳 周溝南辺遺物出土状況（南から）



写真4 K2号墳 周溝東辺遺物出土状況（東から）



写真1 K3号墳 検出状況（東から）



写真2 K3号墳 周溝東辺断面（南から）

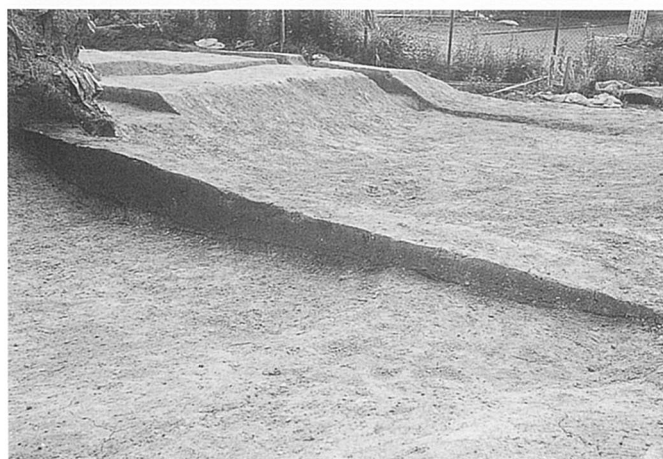


写真4 K3号墳 周溝北辺断面（東から）



写真3 K3号墳 周溝南辺断面（西から）



写真1 K3号墳 完掘状況(南から)

写真3 K3号墳 周溝南辺遺物出土状況1(西から)

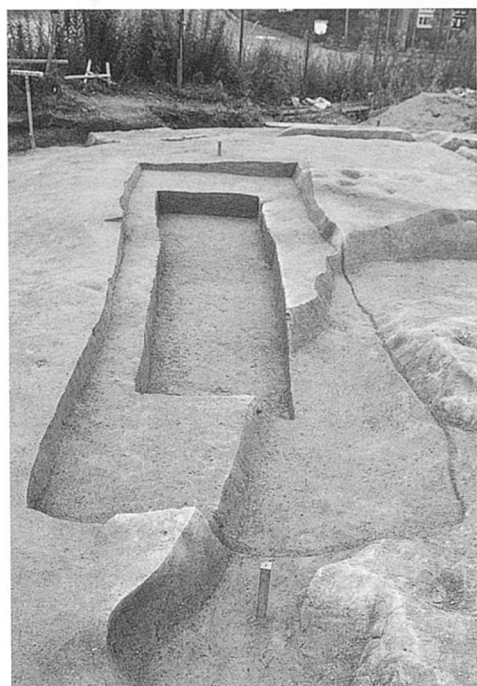
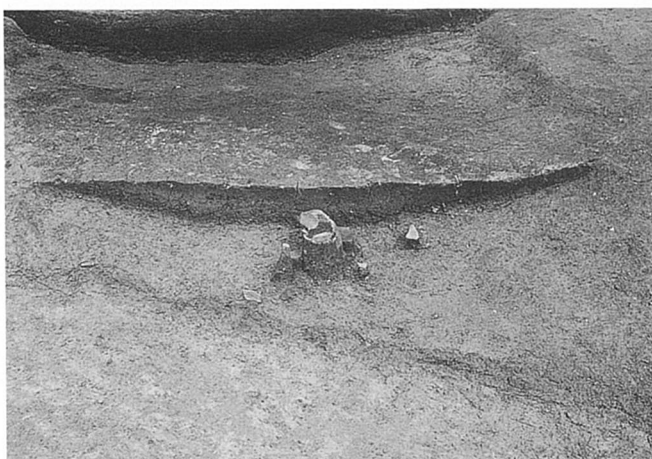


写真2 K3号墳 主体部(東から)

写真4 K3号墳 周溝南辺遺物出土状況2(南から)





写真1 周溝東辺遺物出土状況（東から）



写真2 K3号墳
周溝南辺遺物出土状況3（西から）



写真3 K3号墳
周溝東辺遺物出土状況（北から）



写真4 K3号墳
周溝北辺遺物出土状況（東から）



写真1 K5号墳 完掘状況(北から)

写真2 K5号墳 周溝東辺断面(北から)



写真3 K5号墳 周溝南辺断面(東から)



写真4 K5号墳 周溝南辺遺物出土状況(南から)



写真1 K6号墳 周溝東辺断面(南から)



写真2 K6号墳 周溝南辺断面(東から)



写真3 K7号墳 検出状況(東から)



写真1 K 8号墳 検出状況（西から）



写真2 K 8号墳 周溝西部断面（南から）



写真4 K 8号墳 周溝西遺物出土状況（西から）



写真3 周溝北部断面（東から）



写真5 K 8号墳 周溝北遺物出土状況（北から）

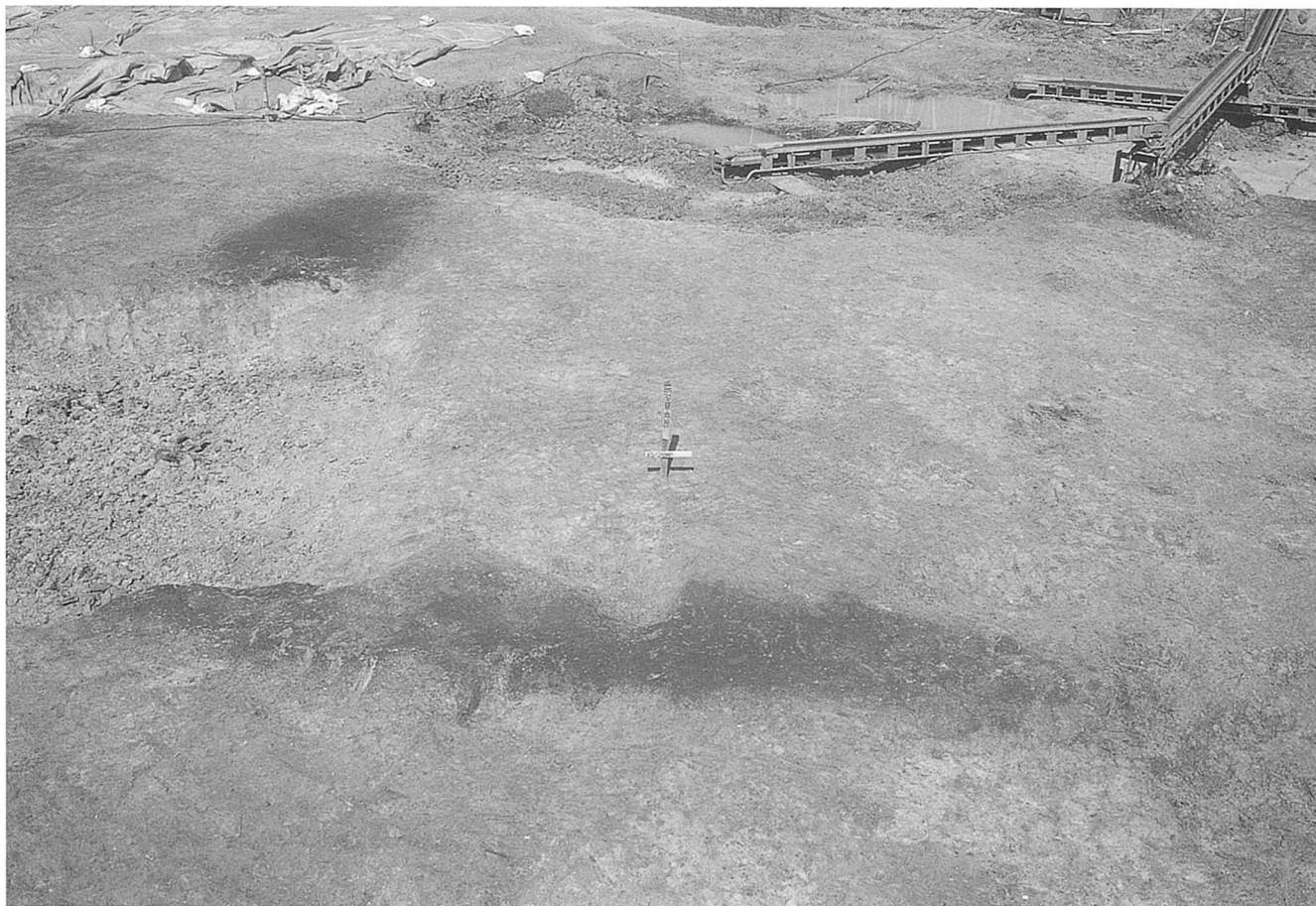


写真1 K9号墳 検出状況（南から）



写真2 K9号墳 周溝南辺断面（東から）



写真3 K9号墳 周溝西辺断面（南から）



写真1 K10号墳 検出状況（東から）



写真2 K10号墳 完掘状況（南東から）



写真3 K10号墳 周溝北辺断面（東から）



写真1 K11号墳 検出状況（南から）



写真2 K11号墳 周溝南辺断面（西から）



写真3 K13号墳 周溝西辺断面（南から）



1 (第7図1)



2 (第7図2)

1・2: K1号墳



3 (第13図2)



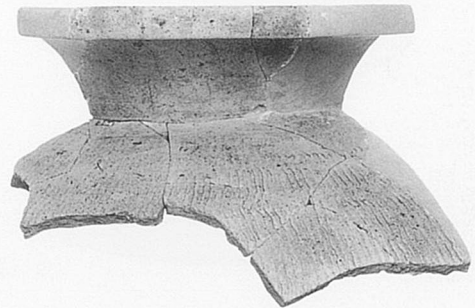
4 (第13図11)



5 (第13図16)



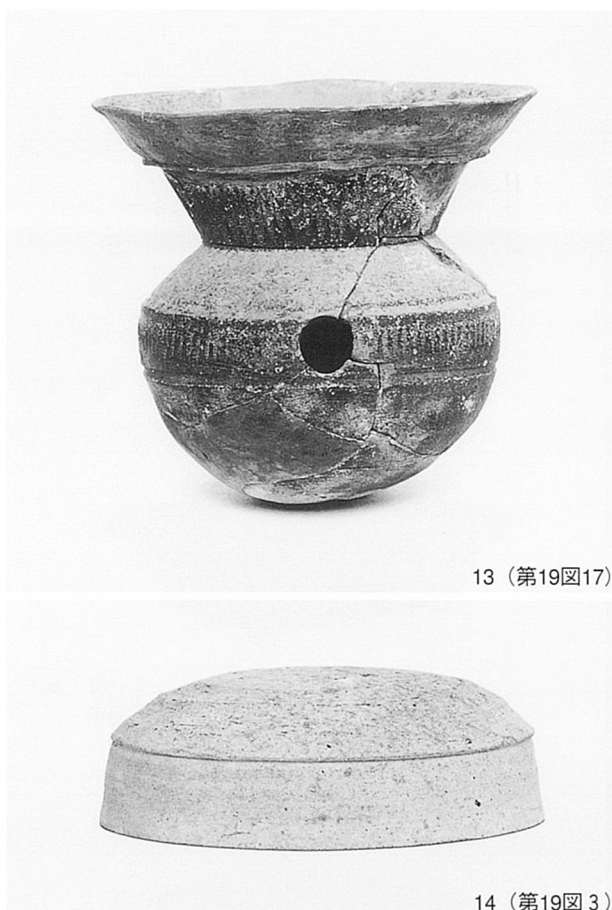
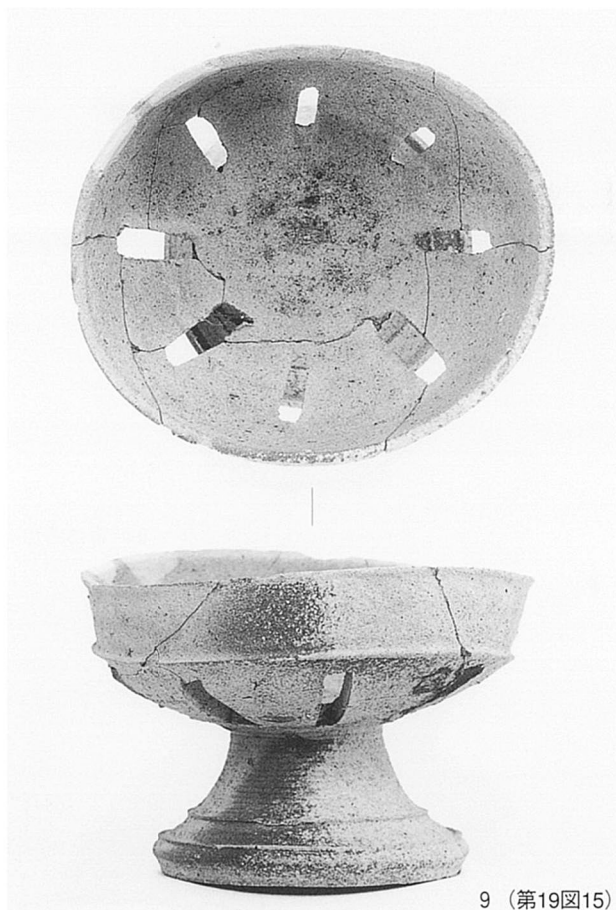
6 (第13図10)



7 (第12図3)



8 (第13図15)
3~8: K2号墳





18 (第19図20)



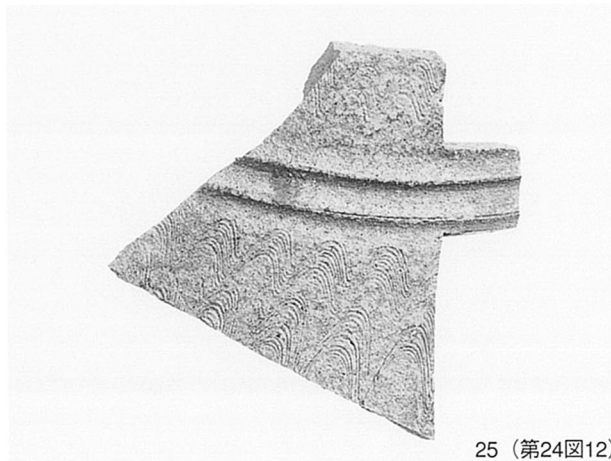
19 (第19図19)
18・19: K 3号墳



20 (第24図2)
20: K 5号墳



24 (第24図11)
24: K 10号墳



25 (第24図12)
25: K 11号墳



21 (第38図9)



22 (第38図10)



23 (第38図5)
21~23: K 8号墳

報 告 書 抄 録

ふりがな	うずまさこふんぐん							
書名	太秦古墳群							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う打上遺跡他発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター 調査報告書							
シリーズ番号	第99集							
編著者名	一瀬和夫							
編集機関	（財）大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2003年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちあげいせき 打上遺跡（確認） うずまさいせき 太秦遺跡・ うずまさこふんぐん 太秦古墳群	ねやがわしうちあげ 寝屋川市打上 ちさき 地先	27215		34°45'19"	135°38'57"	H13年5月16日 } H13年12月31日	2,600 m ²	一般国道バ イパス（大 阪北道路） 建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
打上遺跡（確認） 太秦遺跡・ 太秦古墳群	古墳	古墳	古墳周溝	須恵器・埴輪	

（財）大阪府文化財センター調査報告書 第99集

太秦古墳群

一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2003年6月30日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号

